

520. 4-A43-2ウ



1200500745177

204
43



始



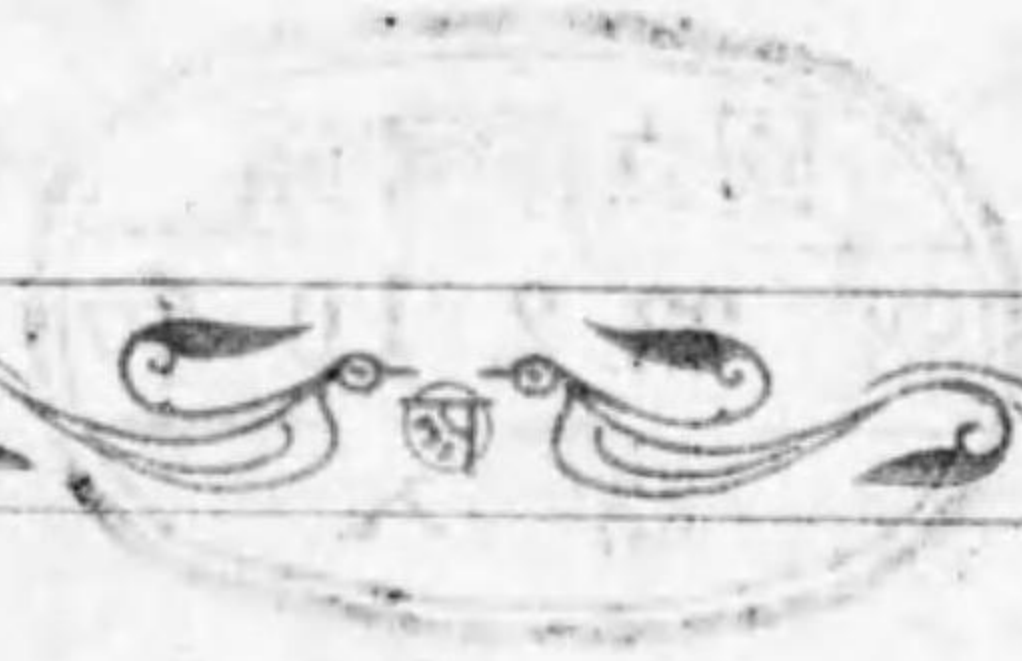
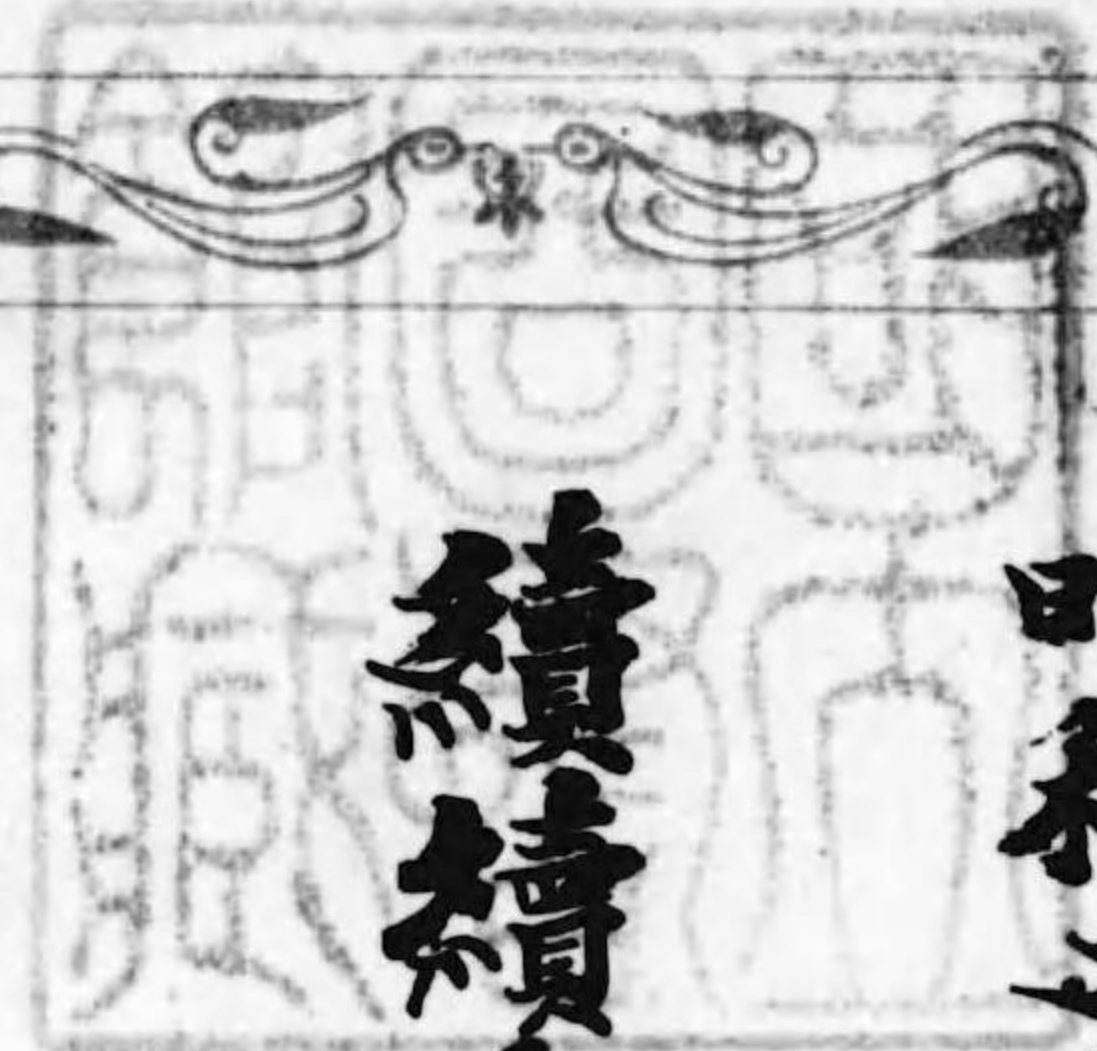
49
A438
3)

520.4
A43
2

昭和二十二年

續續成蟲樓隨筆

天沼俊一



序

出版ノ豫定ヲシタトイウ次第デハナイガ、多少暇ガ出来タノデ、古建築ニ就
イテ雑誌ニ記シタモノヲ増補シタリ、或ハマタ見學ヲシテ來テ忘レナイウチニ
書キツケテ置イタモノ、昨年夏期私ニ取リテハ最モ樂シイ思出ノ一ナル滿一ケ
月ニ互ル長期ノ旅行ヲ甲斐・信濃方面ニ試ミタ時ノ見聞等ヲ主トシ、四天王寺
伽藍復興記事其他ヲ併セ、昨秋既ニ相當ノ頁數ニ達シタ際、偶々明窗書房カラ
舊知上田菊次郎君來訪、四天王寺ニ關シ圖ヲ主トセル一書出版ノ相談ガアツタ。
併シ目下ノ状態デハ即刻起稿ハ到底不能デアルカラ暫ク延期ヲ乞イ、先ズ以テ
手許ニアル執筆中ノ隨筆ヲ至急完成セシメテ印刷ノ事ニ話ガ纏リ、遂ニ世ニ出

序



ル事ニナツタノガコレデア。此種ノ書物モ正編・續編・續々編ト、トモカクモコレデ三冊ニナツタカラ、コレヲ以テ終リトスル。ケレドモ古建築ノ一部ニ就イテ記スベキコトハマダイロ／＼アルト思ウカラ、ソウイウ種類ノモノガ相當ニ集ツタラ纏メテ古建築拾遺トデモシテ、他日更ニ發表ノ折ガアルカモ知レナイ。

題簽ハ今回モ亦、佐伯猯下ニオ願イヲシテ書イテ戴イタ。洵ニ有難イコトデア。厚ク御禮ヲ申上ゲマス。

昭和二十二年八月三十一日

京都市
上塔ノ段

著者敬白

新假名遣ニ就イテ

昭和21年秋、新假名遣ガ定メラレタニ就イテハ、原稿ヲ讀ミ直シテ出來得ル限リ新式ニ訂正ヲシタツモリダガ、元來コノ方面ハ昔カラ私ノ最モ不得手ナモノノ一ツデ、スラ／＼書ケル時ハ何デモナイガ、一ツマゴツキダシタラ、考エレバ考エル程判ラナクナリ、時間ガカ、ルバカリデ誤ダラケ、思ツテ居ル半分モデキナカッタカラ、新舊混淆シタ甚ダ拙イモノニナツテ了ツタ。コンナ結果ニナルノデアツタノナラ、一層最初カラ手ヲツケズニオイタ方ガヨカッタカモ知レナイガ、今更元ニ戻スコトモ手数ガカ、ルシ、更ニマタ圖版ノ解説等、既ニ製版濟ノモノモマタ同様デア。ダカラ甚ダ不體裁極ツタガ、一方カラ言ウ

ト後ニナツテカラ、丁度コノヨロニ、コンナ事ガアツタノモ判ル。カ、ル次第
ダカラ、其不統一ハ讀者諸君ニ於イテ大目ニ見テオイテ戴キタイ。

目次

- 一 錦織神社と兵主神社……………一
- 二 古建築細部の二三に就いて……………三
- 三 甲信旅行記……………四五
- 四 續續和歌山紀行……………一六九
- 五 村社志那神社本殿……………二二
- 六 雜記帳から(續編)……………二三五
- 七 四天王寺の焼失と復興(第三編 復興記下)……………二九九

一 錦織神社と兵主神社

錦織神社と兵主神社参拜記

共に大阪府所在の神社であるが、何故に此兩社へ参拜したかという点、雙方共細部彫刻のうち「木葉に毛筆」がある事を知ったからである。記事は取敢えず【續成蟲樓隨筆】第三四九―三五四頁にのせておいたが、更にこゝに稍や詳細にかいておく。

昭和21年3月21日、再度和歌山縣那賀郡田中村竹房の一之宮神社へ参拜し、「木葉に毛筆一本」の木鼻の摺本をつくり寫生をしたが、當日は例のT君も一緒であった。同君も自然こんな彫刻に興味を持たれたものか、後日になって錦織・兵主兩神社の毛筆入彫刻の、夫々摺本と繪葉書とを郵送して下さったので、不明な個所もあり旁それだけでは満足ができなく、實物が見度くなり、前者と密接の關係あるT君に周旋を依頼し、昭和21年4月23日参拜、幸に目的を達し、更に翌4月24日兵主神社へ参り、社司の厚意で見學を了したのは有難い幸であった。

錦織神社は大阪安倍野橋大鐵起點から長野行へのり、富田林の一つ先きの「ツツヤマ」驛で下車するのだと聞かされていた。最初は兩神社を一日ですます事ができると考えていたが、夫は少し無理だろうとの事に、24日の豫定を一日くりあけて23日にした。實は21日京都發、21・22日兩日四天王寺泊、23日には辨當をつくって貰い、一〇・〇〇に寺を出て安倍野橋驛へ行き、「ツツヤマ」一枚といったら、そんな驛はないと、嚙んで吐き出した様な味もソツケもない返事を出札嬢からたゞきつけられ、困ったが仕方がないから富田林の一つ先き迄と行ったところ、夫なら川西だといったから、ともかくも川西迄買ひ、改札口を出てから出會つた驛員に悉くきいたが判らなかつた。併し長野行の電車へのり、富田林驛についた時、窓外へ來た車掌に念のためきいてみた。此時はやはり判然しなかつたが、發車してから間もなく其車掌がきて、錦織神社へ行くには、以前は「ツルヤマ」驛で下車したが、此頃は「カワニシ」と改稱されたから、此次停車したら下りれば近いと教えてくれたので、安心する事ができた。改稱されても暫くすると現業員でも知らないのだからひどい。

川西驛で下車して改札口できいたら、出て右へ行けば直ぐだといつたので、其通り歩いたら五分もかゝらないで達した。どうやらT君が出してくれた手紙も未着らしく、神職も不在

で、失望したが、極く近所の家へ行ったのだからと、これは家人が直に呼びに行ってくださいだったので、間もなく歸つて來られたから、參拜の目的を述べたら、ゆっくりお調べくださいと快諾されたので、無駄足をしないですんだ事を喜んだ。天氣は怪しく曇り、いつ降り出すとも知れない。先づ毛筆入欄間をみまところ、此種のが二所あるらしく思われた。元來T君から送られた摺本に参考のためとて、同君撮影の寫眞が添えてあつたのを見た時から、どうも筆が二個所あるのではないかと思つていたが、どうしても二所と見えたから、二つとも摺本をつくり、鉛筆でかき起し、一先ず完了したのが二〇〇頃、辨當をすましたら一四・〇〇。此夜は大草村大美野のY邸へとめて戴くのだから、途中雨にあつてぬれるといけなかつたと思つて早々に退去をした。

川西驛から長野驛に出で、更に長野驛から北野田驛迄切符を求めた。この北野田驛から約10町西方に大美野といふ住宅地があり、富豪とか素封家とかいう上流の人が、宏大な邸宅を構えている。Y氏も昨年3月大阪大空襲の際、防空團長として活躍中、自邸の焼失を省みるに暇なきうちに全焼。つい近頃迄郊外の親戚に避難して居られたが、新にこゝに邸宅を得移轉したから一度來てはどうかという勧誘状を戴いたので、頗る厚かましいが右兩社の見學

には、恰もこの邊に足溜りが必要なので、宿泊を願う約束成立、出かける事になり、北野田驛に下車をした。

雨が幾分か降っていたが、或は老生に同情を表され、萬一驛でお目に懸れるかも知れないと思つて、氣をつけたがつい出會わずに終つた。これは私の責任であつた事は、あとから氣がついた。同君は天王寺方面から來る乗降場の方で、主として下りを氣つけ、或は上りかも知れないというので、反對側も注意をしてくださつていたそうだが、小生はそんな事は氣がつかないで、自分の下車した方のみさがし、其まゝさつさと歩いてY邸に達した。お嬢さんが早速驛迄父君を迎に行つてくださり、此失敗の結末をつける事ができた。

其夜は雨で翌24日朝は辛くも歇んだが、未だ十分雨氣が空中に充滿していた。朝餘り早いと却て通學の生徒で電車は混雜するからとて、然るべき時刻に辨當を戴いてY邸を出かけた。氏は何れにしても驛迄送るといつて一緒に來てくださった。併し驛へついてからも、乗換驛迄送るといつて難波行ののり、北野田驛から十ばかり行つたところに「岸ノ里」という停留場まで同行。こゝで下車して今度は多くの階段を下り、改めて和泉大宮(岸和田驛の「手前」から兵主神社へ行く)迄の切符を新に買うのである。成程これは獨りでも尋ねれば出来るが、やはり案内を知つて

The hiyosu shrine
Entrance prohibited to U. S.
forces by command of com-
manding general fist corps

いる人にして貰う方が樂にきまつている。

此所には乗降場が三つ並んでいた。其中央の乗降場で待合わして、來た電車にのり、「住吉」で、又は終點の「和泉大津」まで行き、和歌山市行の普通列車で「和泉大宮」で下車するのである。こんな乗方はY氏も御承知がなかつた位だから、來て戴いたのは全く有難かつた。小生がほんやりして立っていると、皆きいて然るべく誘導してくださったから、まことに樂であつた。偶ま下りが來たが、これは「和泉大津」行のであつたから、夫にのつて

終點下車。乗りついで目的地へ達した。

不幸にして改札口を出て少し行くか行かないか位に、大粒の雨が横なぐりに降つて來た。近所に家はなく畑中に廣い道路があり、最初左へ行き街道に出て更に左に行く。この街道へ出る迄に腰から下は大概ぬれてしまつた。停留場から神社迄約15分で行ける。此頃進駐軍のために神社でも寺院でも學校でも、隨所横文字の掲示が出ているが、どうも時にひどいがある。兵主神社のも氣の毒ながら其仲間の一つで、神社の名の「兵主」を羅馬字でかくなら、大に讓歩しても hiyosu ではものになる

まい。これでは「ヒヨス」としかよめない。Hyōzu でなければ工合がわるいだろうと思う。終りから二番目はrが脱落したのだろう。「ファースト」なら判るが、「フキスト」では何の事か。たつた十六字のうち二つの誤り、16%の誤字は豪勢なもの。戦前京都市内八坂神社の旁に自動車屋があり、其看板に One Yen Toxic for Three Perons と筆太に書いてあったのが、氣になつて仕方がなかったが、昭和21年になつても、尙ほ神社社頭の掲示が「スリー・ペロンス」の範圍を出ないのだから、あきれて物が言えない。

「フキスト」は握拳・拳骨・拳固等と譯す様だから、「フキスト・コワーズ」は拳骨團・拳骨班・拳固隊といふ様な意味にとれよう。負け戦になつても隠しておき、さんぐ／＼敲きのめされてペンションコになり、手も足も出なくなり。御免なさいとあやまつたのだから、Fight Corps がほんとうかも知れない。而も鐵釘流乃至鹿角菜の行列でやっているのだからおめでたいのである。天王寺驛附近の安料理屋に FENRU DRINKING END DINING ROOM といふ看板を出している店があるが、この方が罪がなくてよろしい。

大鳥居を入ると突き當りに社務所がある。幸に神職も居られたから、社殿に取つてある毛筆入墓股を拜觀致し度き旨申入れたり、誰人の紹介もなかったが、快諾を得た。そうして

早速案内をして戴いたが、目的の墓股は本殿の正面向つて左脇間にある筈なのに、そこにはなくて向つて右側面妻に用ひてあった。修理の時元の位置へ戻したのだそう。どうして元の位置が判りましたかと質問をしたが、判然した答は得られなかった。而も高く割合に見難い位置に取付けられていた。

一通り觀て社務所に引あげ休憩。此間一時天候恢復した様に見えたが、再び降りそうになつたので急いで歸途に就き、歸りは16分を費して驛に出で、一四・〇〇頃の電車で引返した。乗客も満員であつたしY氏ともはぐれ、乗り換驛等も不案内のため、いつか住吉も通過して、了い、氣がついた時は難波驛に戻つていたので、又引返し今度は「岸ノ里」にて乗換、北野田驛から14分でY邸歸着、一六・二三であつた。

以上二日ばかりで無滞兩神社を見學し、目的を達し得たのは、Y邸二泊の便宜を得たからで、而かも24日は私の爲に全く犠牲に供された爲と、深く感謝の意を表する次第である。夫にしてもこの兩神社を一日ですますことは不能である。よく前日錦織神社だけすましておいた事であつた。

昭和21年4月23日、錦織神社本殿欄間の見學を了し、一時は夫で満足をしたが、更に欄間全體九ヶ所共全部調べてみたくなり、5月24日第2回目を決行した。其爲23日は中河内郡惠我村のN邸の離座敷に罹災後寓居せるS君をたづねて一泊、翌日河内松原停留場より乗車、藤井寺乗換、川西下車、神社へ行って早速欄間の摺本をつくり初めた。此度は神職ともお馴染になつたし、前以て書面を以て見學差支の有無をお尋ねしたしするから、希望なら宿泊所の世話はできないが、研究のため京都から来るなら御隨意だといふ通知をK君にだしておいた。これは片便りだから、K君が態々出て来るかどうか判らない。來ても來ないでも私だけは成るべく午前中に大部分をすますべく、欄間を東から西へ順に六つ摺り、書き入れをしていたらK君がやって來た。晝食休憩して後は柘榴一つすまし、これでよせばよかったが、時刻も未だ早し、つい慾を出して本殿の墓股一つを附録にすった。此墓股は中心に牡丹の花、其上に圓相、左右に萱、つまり原始的牡丹唐草で、今日迄傳わっている型式のもの(一五)。以上で略ぼ目的を達し歸途に就いた。K君も一緒に歸つた。

朝は全部歩いたが、歸途は河内松原で下車すると間もなく、平野行のバスが出たので夫のり、三宅國民學校の角から14分で歸り得た。此夜もう一泊。つまりS君の寓居に二夜お世

話になつたが、宿主の宿主たるN氏の懇篤なる待遇に預り、洵に感謝にたえなかつた。つまりまるもうけをしたのは俊一で、ほんとうに皆様に御迷惑をかけてしまった。

4月23日第一回の錦織神社見學の時はT君から24日に神社で待つというウナ電を戴いたが、俊一は22日に京都を出發、其夜四天王寺へ宿泊したので電報を知らず、又神社の方は一日繰上げたので、折角であつたが神社でもお目にかゝらず、又5月24日の時は、丁度俊一が神社に居た頃、同君は神社の極近くの寓居に歸つて居られたそうで、「餘程ただ何かなしに神社へ行ってみようと思つたが、やめて了つた」と言われた。これは25日午後、俊一が所用のため、S君の寓居を辭して法隆寺へ行つて例の六疊に收まっていたら、間もなく面會を求められ、大に驚いてどうしてこゝへ來た事を嗅ぎつけたかときいたとき、同君は笑を含んでそんな事は判つてるといわれたが、さすがに昨日錦織神社にいた頃は、嗅覺鈍麻していたものか、神社へは見えなかつた。「やっぱり行つてみればよかつたのに、惜しいことをした」と。今年3月21日・5月25日と二度出會つた。夏長野では同君の都合がつかないので面會しなかつたが、ことによつたら10月中下旬頃、再び和歌山縣の一部で出會う事になるかも知れない。二度ある事は三度あるというから。

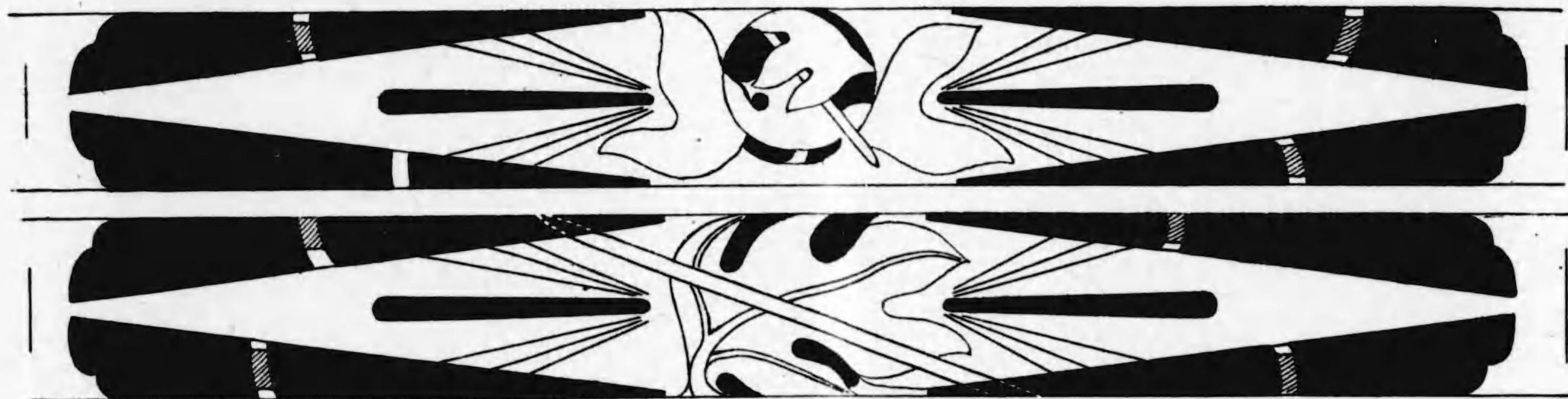
錦織神社本殿欄間（一・二）

所在地 大阪府泉南郡富田林町大字甲田

桁行三間梁間二間、單層入母屋造檜皮葺、正面に軒唐破風附で三殿より成る。中殿素盞鳴尊・左殿譽田別尊・右殿菅原道實を祭神とし、正平18年12月5日の創祀といふ。平面は三間に過ぎないが、屋根は複雑で、入母屋造の前方に向拜をつくり、且つ屋根に千鳥破風がある。社殿は南面し、中央軒唐破風下の懸股及び其上の枋は特殊の形を有しているが、或はよく調べたら此だけは少し後のものかも知れない。左殿枋間桐、右殿同橋入、本殿は三殿共牡丹入の墓股をおく。牡丹は中心飾として花の上に圓相、左右に蕾を配置す。圓相の内には梵字を入れてあつたかも知れないが、現在は三つ共態と破壊して、判らなくして了つてある。併しこの牡丹は花と蕾と葉との配置が左右相稱なる事例により例の如く、永く範を後世に垂れたのである（一五）。

三殿共正面扉上に幅の狭い——というよりは高の低いといった方がいゝかも知れない——

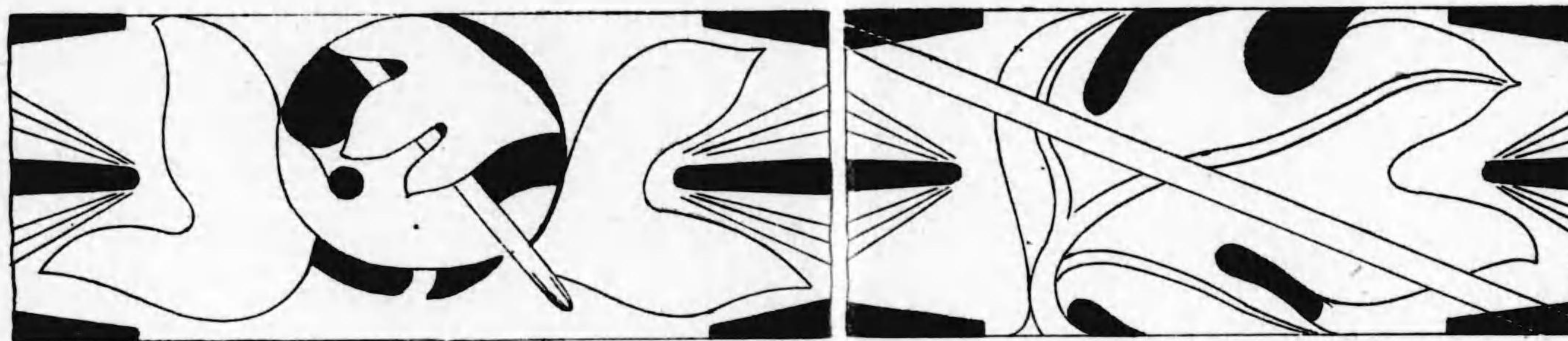
葉には總て脈を彫刻してあるが、修理出來後餘り緑青を塗り過ぎた為、殆んど全部判らなくなつた。故に本圖には全體を省略しておいた。



上, 第七. 錦織神社本殿西殿東欄間立面圖

下, 第八. 錦織神社本殿西殿中央欄間立面圖

縮尺 10寸 15寸 20寸



第七中心飾詳細

第八中心飾詳細

縮尺 1寸 5寸 10寸

昭和二十一年四月二十三日午摺・昭和二十一年八月五日製圖



欄間が設けてある。この欄間は竹の節で一殿の正面を三等分し、その各區劃毎に一つづつ、薄い板に中心飾とし花模様其他を簡單ながら透彫にしてある。勿論三等分といったところで多少の出入はあるが、一區劃の幅^{2.20}、高^{0.28}、厚^{0.025}、其全形は二の第七・第八に示した如くである。此透彫をした板を厚^{0.08}の上下の框に、左右は竹の節に嵌込んである。どうも今迄は少なくとも桃山以降とはかり考えていたが、四隅が内方に入り込んでいる(即内方に茨を)
持っている輪廓内に、菱形が入れてあるのが、こんな時代からあるのだから、幾分勝手がちがった。何でも多く實地を取調べてからでないか、めったな事はいえないのをよく承知していながら、つい言い過ぎたり書き過ぎたりして失敗するが、これも亦其一つである。併しながらさすがに古いせいか、文様も至極平面的で且つ圖案的であるのは争われない。ここで一通り日本建築に於ける欄間の發達というか、變遷というかそういう事に就いて記しておくのも、決して無駄ではあるまいと思う。

*山梨縣中巨摩郡吉澤村、順徳山常説寺の鎌倉時代と認められる輿の「臺」(四個長柄の下に取付けてあるもの)及び「てかけ」の孔(つかまる爲め)の形も、同様に洲濱型を半分に切った様な形をしている。二〇・二二参照。

日本建築欄間の變遷大要

(1) 飛鳥・奈良時代

有無未詳

(2) 平安時代前期

有無未詳

平安時代後期

當代は菱格子欄間があつたものゝ如くである。醍醐寺薬師堂内部内外障境のは、其一例とする事ができるかも知れない。併しあれが平安後期即ち現在の建築時代迄遡り得るかどうかも判然しないし、又どうしてあの様なものが出現したか、考えをつける事ができない。とにかく實例(?)としては、あの建築にあの欄間が突然現われているので、其前がないのだから。

(3) 鎌倉時代

和様

前代の繼承(?)で「菱格子」・「吹寄菱格子」が寺院建築に於いては先づ普通。神社建築では正面上部の狭いところに唐草模様の透彫を入れたりする。末期になると、時に可なり込み入った複雑なものもあるにはあるが、夫とても何れも極めて平面的圖案的小なる上に左右相稱で、原始的のものである。

天竺様

未詳。多くは飛貫と頭貫との間、窓とも欄間とも見える空隙に、平たい薄い板を「小間返」に打つたのがあつた。つまり「無雙窓」の様なもので、開閉の設備のないものである。つまり連子窓の「連子レシッコ」が平たい板からできていると見ればよろしいので、換言すれば、やはり連子窓に他ならないのである。醍醐寺經藏にあつたから天竺様とも思えるが、唐様建築にもあるから、夫ではっきりしない。

唐様

謂ゆる「弓欄間」・「浪連子」で、これも亦「小間返」が普通であるが、時には間が大變に廣くあいているのがなくもない(梅田釋迦堂(和歌山縣海草郡加茂村大字梅田))。

(4) 室町時代

和様

寺院建築に於いては、主として「菱格子」又は「吹寄菱格子」だが、神社建築では「盲連子に散文様」・「透彫」——例えば牡丹唐草・桐唐草・橘唐草・笹龍膽唐草等——等で漸く手は込んでくるが、やはり平面的たるを免れない。但し極く末期になると、少しく厚みを増し、従って唐草文様に於いては莖も太く葉も肉質となり、花等は可なり發達をして次時代の肥厚欄間のもとをなして来る。又繪畫的にも發達す。

天竺様

未詳

唐様

前代同様

(5) 桃山・江戸時代

和様

當代様式は打破されたが、欄間のみはそうでなかったらしい。即ち「弓欄間」は依然唐様建築に用いられたので、和様には殆んど例を見ない、と同時に唐様建築に浪連子以外の

ものが用いられたかどうかはこれも亦實例はない様である。菱格子の少し變化複雑となつた「松皮菱」・「花狹間」・「龜甲文」・「箴欄間」(オサランマ、細かい格子の様なもの)・「雲文」・「散圓文」・「中心を通る線に水平には上下、垂直には左右相稱の透彫」・「繪畫的雄大なる透彫」等。此等のうち「箴欄間」は勿論、「松皮菱」・「花狹間」・「龜甲文」は木片を組み合わせたものだから別だが、透彫のものは總て薄い板を用いてあり、此等は鎌倉時代よりの繼承式である。

室町時代末期から、一方にはまた其厚さを増した立體的欄間が、長足の進歩を始めた。例えば「孔雀に松(竹を添え)」・「小鳥に椿」・「葡萄に栗鼠」等で、此等は殆んど總て兩面彫刻を異にしている。そして多くは極彩色に金箔を用いているから、簡素なのに比べると比べものにならない程美しい。新しいものになると四天王等を刻したのである。

時には箴欄間の中央に、格狹間の如き一種の輪郭を入れ、其内部は精巧なる彫刻を以て充たしたいわゆる「欄間飛入彫物」なる特殊のがある。つまり簡素なもの、精巧なものと一緒にしたので、例えば京都二條城二の丸御殿椽の夫に於いてみる如きもの。其他殆んど枚擧に遑ない位種類がある。

以上欄間の發達變遷の大體を頭へ入れておいて、さて錦織神社本殿の夫を見る事にする。此建築は正平18年というのだから勿論欄間は未だ殆んど發達せず、つまり原始の域を脱し得ないが、幸に全部當初のものと認められ、一見直に桃山以降のとは大差ある事が知れるのである。かゝる型式のものは到底今日の人の頭から出ない、のみならず長い菱型は實に珍らしい。そうして其中心飾は左の通りである(一・二)。

東(即向^つ)から六枚は、「椿」又は「茶梅」の花か、ともかくも椿科植物の花に葉を添えたもので、ことによつたら一人の彫刻師が造つたのかも知れないが(一上より六)、第三殿の三枚は全然異なっている。第三殿の向つて右から二枚はこゝに問題にしたもの、即ち「木葉に毛筆」で、最後のは「柘榴」である。かくて第三殿のは、中心飾こそ變つてはいるが、統一を破る様な事はしてない。私は第一乃至第六の中心飾の花が、他の三枚と比べてよくできているから、或はこの六枚は師匠が刻み、木葉と柘榴は或は弟子の作ではないかと思つてゐる。

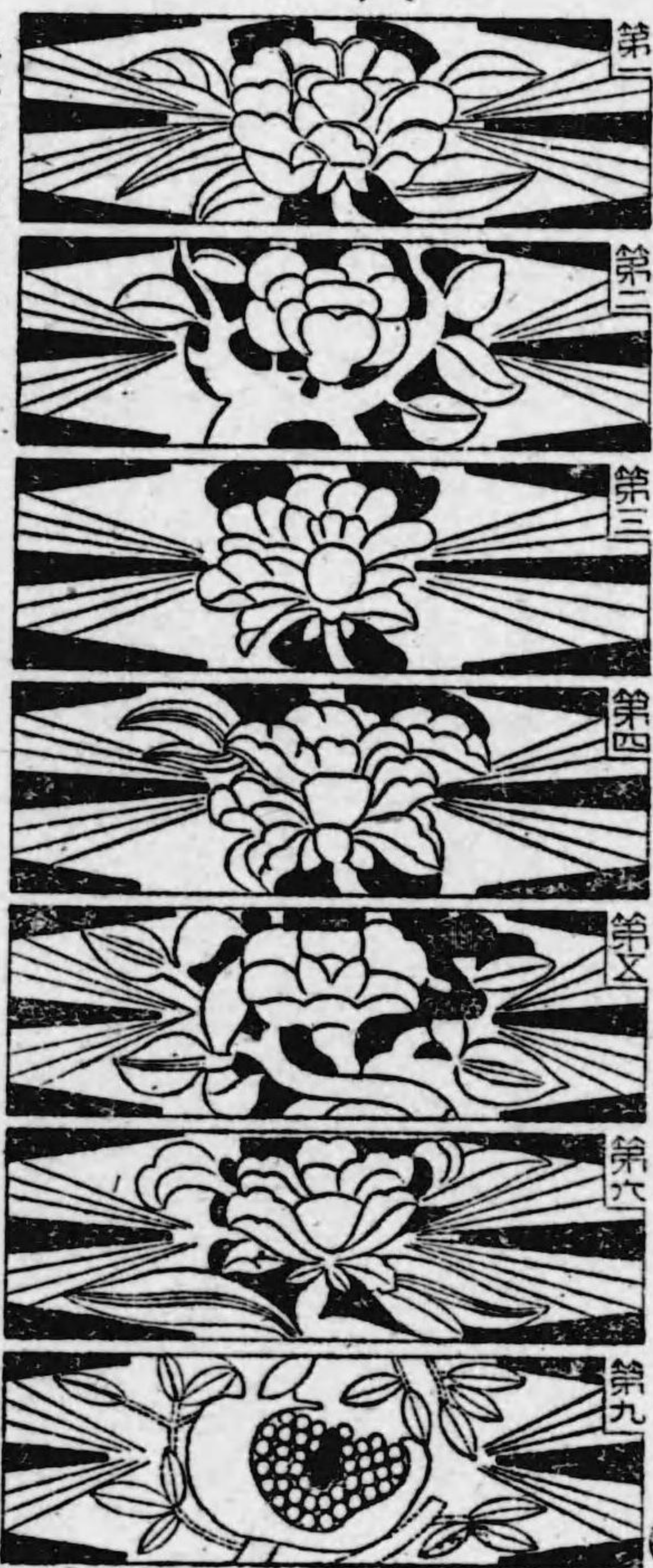
第七・第八(二)は、既に【續編】第三四九—三五四頁に記した様に、私は「木葉に毛筆一本」と断定したのである。一度では見誤りということもあり得るから、前記の様に再度見學した。そうして其時は同行したK君に、第七は「木葉に毛筆」だが、第八は「毛筆」では

あるまいといふ説がある様だが、そうは思われぬ。どつちかというとな第七よりも寧ろ第八の方が筆らしく見えるが、どう思ふかと尋ねたら、同君は直に賛成して、最初一見した時、第八は筆と直感したし、木葉は梶の葉でなからうかと言つた。わけの判らない葉がどうして梶の木の葉といふ見當をつけたのかと思つたら、曰く昔梶の葉に何か書いたという事が平家物語に出てゐると、飛んでもない事を言い出した。平家物語なる書物を通讀した事がない小生は、其書き起しに「祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり」といふ文句を知つてゐるだけ。さすが國史專攻の文學士だけあって大變な事を知つてゐたものだ。小生もぶら／＼してゐるうちに、一度位讀んでおけばよかつたと大に後悔したが、さてあんな厚い書物を、今更通讀は面倒だから、其まゝにしておいたら、6月6日に【平家物語評釋】(文學士内海弘)を持參して見せてくれた。夫には

「かくて春過ぎ夏たけぬ。秋のはつ風吹きぬれば、星合の空を眺めつゝ、あまのとおわたる梶の葉に、思ふ事書頃なれや、夕日のかげの西の山の端にかくるゝを見ても、日の入り給ふ所は、西方淨土にてこそあんなれ。……(卷一妓)王が事」

とある。そうして本文の上欄に語句の解釋を入れてあるが、左に書きぬいてみる。

一、錦織神社本殿欄間七種



昭和二十一年五月二十四日午前八時より昭和二十一年六月二十日製圖・

本殿正面の欄間は、各殿に三つづつ、合せて九種ある。東から六つ、即第一殿及び第二殿の分は、何れも中心飾が茶梅が椿か、こもかむ椿科の植物の花に、僅かの葉を添へたものにして居るから、大同小異で大差はないが、珍しから全部を圖示して置いた。上から下へ順に東から西に反復して居る。

然るに第三殿のは、彫刻師が別人であつたか、余異なつた意匠で、左端と中央つまり第七、第八が「木葉」に毛筆で、第九即最終のものには「柘榴」の實を中心飾にして居る。この「木葉」に毛筆は二に詳細に圖示して置いたから、此圖には最下に「柘榴」を掲げた。柘榴は阿利帝母を祀つた建物の墓殿内の彫刻に普通は多く見出されるが、衆神がまつない場合は、稀有の例に属するものSS知である。

あまのとわたる梶の葉に——天の河のせとを渡る舟の梶といひかけたので、昔はたなばた祭の晩には梶（椿と同種の木）の葉に、ものを書いて柘機にさゝげたものであつたのだ。

思ふ事書く頃なれや——たなばたの祭は、もと二星の一年にたゞ一度相逢ふといふ戀を祝福する意味であつたのだが、後には其祭りの時、若い人たちが、思ふことを、梶の葉に書いてさゝげると、其思がかなふといふ意味が附加される事になつたのである。

此解釋の通りとすると、此等の木葉は、九分九厘迄は「梶」の葉であろう。此書の解釋は、併し總てその儘受取つていゝかどうか判らない。敢てけなすのではないが、例えば棟門には「樓門に對していふたので、樓のなくて、なみの家の様に作つた門」、平門には「前に軒の出た門」としてあり、俊一が讀んだのでは、何の事かまるで見當のつけ様がない。だからこれでは困るが、此木葉の解説は洵に適當と思われ、確かに「梶の葉」に「毛筆」であらう。例え軸らしいものゝ断面が圓く盛り上つていなくとも、夫はものが眼から遠いのと小さいのとで、そう丁寧に刻まないでもいゝと考へて省略をしたと見るべきである。

只併し、此種はいつも必ず葉でくるのである。つまり葉の先の方が反轉して、筆をおさえて、一見落ちない工風がしてあるのに、第八ばかりはそうしてなく、上からおいてある様に

見えるので、これは筆ではあるまい。夫に軸も平たいし、何か文鎮の様なものでも置いたのではないか、という説も出たらしい。尙お二の右下に掲げた第八の詳細をよくみると、右下から左上に斜にある棒か文鎮かは、上下が不自然に切れている上に、上の方は少し両方から細くしてある様である。これは第八即其全形に、（白色の）点線（の）で復原した様な形に最初彫刻してあったものらしく、夫を菱形に地板を切る時、自然上下が切れて了ったのだろう。何故そんな事をしたかという、單に想像だが菱形に地板を残す事をつい忘れて一ぱいに全形を刻んでしまったのを、後に所要の形に残したので、自然こうなつたと思つたのである。夫ではなぜ葉を反轉させてくるまなかつたのだろうか。そんな事をいつたつて算術ではあるまいし、 $4 \frac{2}{2} \parallel 2$ といった様に、答が2でなければ間違とは言えない。だからこんなのがあつても、少しも差支はないのである。私は第七の方が、これより餘程筆らしくないと思つている。成程軸は第八よりは圓味をもつてはいるが、穂の先等はそばでみると随分粗末で、とても筆とは見えない位、つまり第七が筆なら第八も同じく筆、第八を否定するなら第七も同様に取扱うべきである。其上に右に引いた様な文獻がある以上、殆んど無條件で毛筆としてよろしいと思う。

次に第九の「柘榴」(一下)が興味を惹く。渡來植物ではあるが、渡來したのはいつ頃か私は知らない。併し中世以後多く訶梨帝母即鬼子母神を祭つた建築の臺股脚内の彫刻にでてるのは左迄珍らしくないが、欄間等にはどうか知らないし、且つこれ等は現存のものとしては古い方らしい。鬼子母神像に鎌倉時代より古いのはつい見た事がない。私は門外漢だからあるのを知らないでいるのかも知れないが、果してないなら全く想像だが、鎌倉時代になつて末子に哺乳しながら片手に柘榴をもつて海外からやつて來たのかも知れない。そうすると當時は珍物で、今ならマンゴー・パイヤ・マンゴスチン等と同様に取扱われたのだろう。左ればこそ鬼子母神でない祭神の社殿の欄間に彫刻したとも考えられる。たゞ惜しい事に、これが最も風化甚だしく、殆んど當初の形が判明しない。現在ののは修理の時想像で繪を描き起したもので、全然あてにならない。葉は稍やいゝが、枝は餘りひどいから点線で示しておいた。

誰も殆んど氣をつけない様だが、以上九枚の欄間は、まことに珍物だから、極力保護に努めなければならぬ。最初木葉と毛筆の彫刻がある事を知らせてくださったT君、見學の便

宜を與へてくださった同社の神職、古文獻に就いて教示を惜まなかったK君に對し、厚く感謝の意を表する次第である。

兵主神社本殿墓股（四・五）

所在地 大阪府泉南郡南播守村大字西之内

文部省の調査には

創立年代不詳、延喜式内社の一にして、今の社殿は天正兵火の災を免れしものと稱すれども其様式を見るに恐らくは當時焼失してその後間もなく再建された者の様である。三間社にして軒唐破風を有し繪様列形並に彫刻の屬皆雄健豊麗よく桃山時代初期の佛を残してある……。

とある。天正兵火に焼けたのなら、各部何れもよく桃山時代の様式でなければならぬ。併し其墓股等は桃山というよりは、寧ろ室町末期と見られる。現在二個残っている様であるが、雙方共そう見て差支ないと思う。尤も社傳が正しいとして、夫では室町時代のいつ頃建てられたものか、夫が何か文獻でもあって、中期頃とすれば駄目になるが、若し末期とすれば差支あるまい。仍て今こゝに室町末として取扱っておく。

修理設計書に寸尺を記してあるが、夫によると桁行11.5、梁間8.0、軒高10.6、棟高22.0、向拜桁

行11.5、梁間5.95とある。夫で三間社軒唐破風附、千鳥破風はないから、錦織神社本殿の様で一層規模の小さいもの。神職の話に、岸和田が爆撃された時は、随分ひどかったので、とても助からないと思っていたが、幸に焼失を免れたと。洵に幸な事であった。滑稽な感じのするのは修理設計書で、炭酸紙を用いてあるから、少なくとも三通や四通は同じものがあるだろうが、「斗拱和洋三ツ斗」とした誤記である。夫を誰も気がつかないのか、訂正もされず一件書類に綴り込まれて社務所に保存されてゐた事で、此分だと文部省にあるのもやはり和洋三料式のかも知れない。

四は繪葉書を複製したものが、社殿の両方に拙い木製の燈籠をかくすため、樹木を描いてしまったから、現在とは少しばかり異なったものになったが、これでもう少し大きく装飾も多くなった上、向拜料栱間にも蓼股が入り、屋上に千鳥破風がつけば錦織神社本殿になるのである。現在此建物には蓼股が二個残っている。左に説明をしておく。

其一 栗に栗鼠。

栗の實が少なくとも四個ついている枝を、脚内左下から右方斜におき、最右端の毬がはせて實が現われ、そこに正面を向いた栗鼠がいる。毬はいずれも刺をとってあるから、はせて

栗が現われていなければ、栗だか何だか判らないかも知れない。併し枝には葉がついていて、葉で總ての空隙を充たしているから、先ず夫からでも栗という見當はつくにはつくであろう。

栗鼠は多くの場合横向きなのに、これは少し姿勢が變つてゐる。尤も身體は横向きで、ある種の雄蛾の觸角の様な尾を背負っているが、顔面だけ珍らしく眞正面を向いている。栗鼠の様な可愛らしい顔ではなく、多少風化したせい、少しおそろしいが、ともかくも珍らしいほり方。そうして勿論この栗鼠とはせた栗とが中心飾をなし、毬入三個が其左に、右方の空隙は葉でうめてあるから、どうも左の方が重い様に見えるのは止むを得ないが、其實は左程でもない。

其二 木葉に毛筆一本(五)

修理前の寫眞によると、此蓼股は正面左方の料栱間にあったが、現在は元の位置だという左側面の高い所に入れてある。元來この繪葉書の説明に「菊水に筆」とあるが、其一部(圖の縦に描いた部分)にどうみても何が變つたものが入っている様に見えたので、是非實物が見たくなり参拜して實見したところ、其部分はこの繪葉書とも異なり、色も異って見えたので、神職に

尋ねたら、それは昭和2年から4年へかけて大修理の時にやりかえたとの答を得た。

神職の話は次の様であった。修理前から此部が破損していた爲、いつの頃か附近の大工に修理させたが、夫は素人がみても拙劣極るものであったから、先年此部分を除去し、更に十分研究をして現在の様にした上、舊位置に戻したと。此木葉は菊に見える様だから、菊と假定してやはり其様な葉を以て埋めてある。其新補の葉は裏向きに反轉させてあるので判る。併し洵に失禮な申分で恐縮するが、どうも修理工事關係者の研究も彫刻師の技倆も、共に十分とは行かなかつた様で、小生をして遠慮なしに言わせると遺憾な點があつた様である。小生なら拙い修理の部分を除き、其まゝにしておいたであろう。これは頗るずるい卑怯な手段かも知れないが、判らないのに無理に埋めなくても、判らないものは判らないとして、この位の疵なら壞れたまゝでもよかつたらう。

扱て出かけたお蔭で縦線を引いた疑問の部分は幸に解決したが、他の部分の木葉——其一群が中心飾をなしている部分——は菊かどうか。彫刻師はやはり梶の葉のつもりでほつたのかも知れない。そうして此一群の木葉に包まれている筆は確かに筆で、軸には孔まであけてある。そうして其他の空隙を充たせる帯の様なもの疑もなく水であろう。夫で葉が何の葉

だか判らないから「木葉に毛筆一本」としておいてよからう。

此建築の兩側面は、何れも二重虹梁大瓶束と二重虹梁蓋股と併せたものであるが、二重目の虹梁上に此毛筆蓋股を入れてあつた。兩側面の中央(即ち)の大瓶束は、其「結綿」の部分に注意すべきである。其理由はこれが一轉すると、大徳寺唐門の兩妻の、あの特殊の猿頭結綿に變する可能性がある。下方二本の大瓶束は左右側面で意匠少しく異なる。要するに建築の小さい割に側面は込み入り過ぎている様である。他の細部に就いては省略する。

私の爲めに一日をさき、御多忙にも係らず同行して下さつたY氏、見學につき十分便宜を與えて下さつた神職に、敬みて感謝を申上げる。

以上で錦織神社と兵主神社の記事を終る。

後に記すが、和歌山縣海草郡加太(カダ)町大字加太に春日神社という郷社がある。加太町には「淡島さん」と俗稱する「加太神社」と、この「春日神社」と兩社ある。その春日神社本殿は慶長元年の建築であるが、その背面中央の蓋股が、やはり脚間に「木葉に毛筆一本」とを入れてある。そうすると、毛筆を建築彫刻として用いた例は、鎌倉末(吉野時代)から桃山に互り、合せて七例となつた次第である。此分でいくと、少なくともあと三つ位は見つかるかも知れない。後日のため昭和21年9月30日に於ける私

の知っている實例を左に書いておく。

建築彫刻の補助に毛筆を用いた例

鎌倉時代

- (一) 周邊に圓缺のある木葉三枚に毛筆（一乗寺辨天堂脇障子欄間）
- (二) 菱形の中央圓相内に木葉二枚に毛筆（錦織神社本殿欄間）
- (三) 菱形の中央に木葉一枚に毛筆（同）
室町時代
- (四) 草木らしい植物（蒲公英か）に毛筆（北室院本堂木鼻）
- (五) 周邊に圓缺のある木葉一枚に毛筆（一之宮本殿木鼻）
- (六) 木葉（菊か梶の木か）に水に毛筆（兵主神社本殿裏段）
桃山時代
- (七) 木葉に毛筆（春日神社本殿裏段）

此分は筆を特に太く彫刻してある。惜しい事に高い所にあり、且つ覆屋があるため大變見難い。

（昭和21年10月9日起稿
昭和21年10月4日稿了）

二 古建築細部の二三に就いて

古建築細部の二三に就いて

昭和20年6月、和歌山縣那賀郡田中村鎮座、一之宮神社本殿木鼻彫刻の一部に、「蠅」即「芋蟲」をとまらせてある珍例を見出したので、同建築の他の木鼻に刻せる「木葉に毛筆」と、夫から幕股脚内彫刻の一なる——葉縁に圓缺を有せる——「枇杷に栗鼠」及び正面欄間の菊透彫に關しては、拙著【續成蟲樓隨筆】第三四〇・三四一頁に其概略を、菊透彫は同縣有田郡鳥屋城村の白岩丹生神社の夫にも觸れて何れも記しておいたが、更に此度こゝにまとめて幾分詳しく記載しておこうと思う。

一 蠅（芋蟲）の彫刻

夫は勿論木鼻のうち、幾分賑かにするため補助としてあるが、芋蟲をとまらせた木葉を刻してある珍例がある。夫は一之宮本殿の東側面前方の木鼻の裏面即北側、換言すれば昇殿して右手の椽に立ち、ふりむいて眼の前の木鼻の彫刻である（二右上）。此表つまり南面に

も「瓜」か「ボウブラ」^{*}か判然しない若い實の生った蔓草らしいものが刻してあるが、其實と思われるものは、ざっと菊科植物の蕾の様で上を向いていて、どうも何だかはっきりしないから、前回には同行者にも見て貰い、瓜の種類であろうと決めたが、その時裏の方も見る事は確かに見た。併しまさか芋蟲がいると思わなかった。其時の心覚えを記した手帳を出してみたら、表を「瓜？」とし、裏は單に「葉」としておいた。何にしる葉は殆んど木鼻一ぱいに刻してあったから、薄ぼんやりしていても、さすがに気がついたものと見える。

神社本殿は、いつの事か判らないが、黄土色をした泥のような、繪の具とも何ともつかない一種の塗料で、そこいら中を塗りたてゝ了っている。嘘をいへば五厘位に甚だ厚ぼったく塗ってあるから、汚ならしいばかりでなく、形も随分崩れているのを、T君が丹念にこすつて剝がしたのである。主として彫刻の眞の形を観るためだから、最もひどく色を落されたのは、此「木鼻」と次に記す「枇杷に栗鼠」の蒸股とであった。うまく落とせない部分になると、瑕をつける虞があるので、指の先でさつと摩擦したのだから、現物に少しも損害なくて

^{*}ポルトガル語 Abobora の轉訛という。カボチャ・タウナス。

綺麗に落ちる。私は同君が斯様な方法で調査された事を知らないで、少し後れて出かけたなら、いきなり「あの栗鼠は後補ですね」と言われ、どうしてそんな事が簡單に判るのか知らんと思ひ、椽へ昇って見たら、厚く塗ってあった胡粉(栗鼠は白かつた)は丹念に剝がされ、裸の粗末に削った栗鼠が正體を現わしていた。こうすれば誰にでも判る筈だ。隠されていた部分は明らかとなり、同時に新古も判明する。

此序にもう一度木葉木鼻を見直したら、葉の上部に更に太い繩を縋った様なものが全長に副って盛り上っていて、其先の方に剣らしいものがついているのが眼に止った。そうして繩らしいのは芋蟲で、剣らしいのは「尾角」^{*ピカク}であろうという見當がついた。丁度其時下からT君が夫は何かと質問をされたから、芋蟲だと答えたら、餘りに意外であったと見え、初は怪

^{*}芋蟲の種類によりては、尾端に細い劍の様なものが生えているのがある。眞直で鋭く見えるのと、下方に曲っているのとある。上方に曲っているのがあるかないか知らないで、先日ある専門家にあったときいてみたら、あるという返事であった。とにかくこの様に尾端から生えているのを「尾角」(Horn) といっている。此場合は芋蟲が腹部を上にして、腹脚で葉縁につかまり、背を下にして休息しているところと見る方がよからうと考える。



訝な顔つきをされた位で、私とても實は半信半疑であった。「芋蟲ですか」との反問に對し、私は尾角と繩の様な形を證據に芋蟲説を主張した。

尾角がなかったら、或は何物か見當をつけかねたかも知れない。恐らくこの芋蟲は鱗翅目のうちの蛾の老熟した幼蟲と思われた。蛾の幼蟲で尾角のあるのは、主として「スズメガ科」の夫と心得ている。たゞ實物に於いては、背の方から劍の様なものが眞直に生えているか、或は下の方に彎曲しているのに、これは下から上の方に曲り、且つ二又になっている。これも亦大概一本でこの二つになって枝が出ているのはつい見た事がないが、ことよつたら圖案化した結果かも知れないから、先ず問題にしないでおくとして、腹脚——芋蟲や毛蟲の腹には何對かの疣足があつて、夫で枝なり葉なりにとまるのであり、親になつてから役にたつ胸脚は、體を支えるのに多くは役に立たない——で葉縁にしっかりとつかまわつていて、ところを刻んだのであろう。夫にしても頭がないが、休息中の幼蟲の頭部は、不馴な眼には一寸判りにくい場合もある。だから刻んでないか、或は葉の元の方の巻いている中の方に入つているところかも知れない。また此種の幼蟲では、「氣門」*も相當に目立つものもあるから、當初

*腹部の各關節に主として開孔せる呼吸孔を「キモン」といふ。

は腹脚と共に彩色したかも知れない。

幼蟲によつては、腹關節にある斜線が甚だ顯著なのがある。つまり頗る目につくのである。環節よりも寧ろこの斜線の方が目立つから、一寸みると繩の様でなくもない。だから此芋蟲は關節を誇張便化したか、或は腹關節の著しい斜線を見誤ったか、何れかで彫刻師が繩狀に刻んだのであろう。

黄土を剥落させた跡には、葉は緑、蟲體は赤味を帯びた彩色が残っていた。当初はそんな色で塗つてあつたのかも知れない。蛹化直前には此種の蠅は可なり大きくなり、時に地中に入つて蛹化する種が地上を匍匐している際等に、二本の指で腹部の中央の邊を撮むと、はち切れそうに肥大した冷たい身體を交互に左右に曲けて指を巻くから、随分に不氣味である。夫を刻んだのだから、餘程剽輕な彫刻師でなくては、恐らくこれだけの勇氣はあるまい。

前記の通りT君の質問に對し、私が芋蟲と答えたのを肯定されるかどうか、少しくあぶなかつたから、此繩の様なもの、蟲體の關節を便化しても出来るし、又或種の斜線——白色の等は相當に目立つ——平行して腹側を走っているの等になると、夫が目立ち關節は殆ん

ど判らないから、纏れた繩としか見えない結果、少しばかり誇張してこんなものを刻んだかも知れない。蟲體はこの様に肥満している上に、尾角迄あるのは「スズメガ科」の老熟した子供で、而も大型のものであろう。全く美事で偉大だから彫刻師の注意を惹いたので、普通のものであつたら問題にはされなかつたらう。偶ま此本殿の創建か再建か、現建築のできた歳は何かの都合で順境に恵まれ、生みつけた卵子が皆孵り、何れも健全に發育し、大きな芋蟲が此邊に多數發生したから、葉にとまらせて見る氣になつたのかも知れない。と大に説明に努めた結果かどうか判らないが、後ではどうやら芋蟲説に賛成された様で、昭和21年4月5日鞆淵局の消印のある通信の中に、芋蟲の寫眞を撮らなかつたのは残念に思っているとあつた。これでどうやら同君を我黨に引張り込み得たらしい。

二 木葉に毛筆 (三右つか ら二つ目)

此に就いては別項「錦織神社と兵主神社」(第12頁及び二・五)を参照の事。

三 葉縁の圓缺

此種の木葉は、屢記した通り一之宮神社本殿木鼻(三右上か)にあるほか、同殿東側面蓋股内の木葉にもある。左に此建物に用いてある料栱間蓋股脚間の彫刻を記してみると、

正面 松樹小禽。

西側面 貝類、鮑・蛤・法螺貝等。

東側面 枇杷に栗鼠。

であるが、このうち栗鼠は當初のものを失い(暴力でとつたらしい)、粗末な後補で間に合せていそげれども、植物は小破があるだけで殆んど元の儘残っている。植物は枝の一部に葉が五枚ついていて、實も五個生っているし、どうも少し短かいが葉の形から、どうやら枇杷らしい(三左方上二枚と)。其周囲の圓缺は片方に一つのと、兩方に一つづつとで、先端が反轉しているのと、全然形が崩れているのとある。こんなにも多くの葉をほったのは、こゝに初めてみたので、自然に一つ枝にこの様に集まったのがあるかどうか知らない。昭和20年6月見學した時に、見つけて手帳へ記しておき乍ら、心覚えの書き方が不完全であったのと、後日出してみても木鼻の木葉との區別がつかなくなり、記す事を失念して了って洵に申譯がなかった。此分は珍

らしく枝ごとの寫生——少し誇張してあるかも知れないが——と見られ、殆んど圖案化した所はない様である。

序に記しておくが、以上三個の蓋股は輪郭が中々しっかりしているのみならず、彫刻も亦然りだから、何れも當初のものと認められるが、彫刻は皆輪郭外へはみ出している。此等の喰み出したものは、一般に桃山時代からとして差聞ない。併し夫が室町末期にあつても何等不都合はないのである。此建築に棟札でもあるか、或は桃山時代にできた文獻でもあればとにかく、さうでなければ私は室町末と思つている。

此葉縁の圓缺に就いては、室町時代の神社建築の間に菊唐草を入れたものが、少なくとも此建築の他にもう一棟、同縣有田郡鳥屋城村大字小川、白岩丹生神社本殿にもあり、これは菊の葉の缺刻の底を少しく便化して圓孔としたものであるが、此等は元來が菊葉だから當然缺刻と鋸齒様のものがある。其缺刻の草實の様な底を少しく便化すると圓形になるが、夫は葉縁でないから、類例として擧ぐるには及ばないと思う。仍て今爰に兩神社の菊欄間の一部を三の下方に掲げておいた。上のは白岩丹生神社、下のは一之宮神社の夫である。前者は正面欄間を三區に分ち、右端は「椿」らしく、中央は「菊」、左は圓い實が生っている植物が入れ

てあり(二四)、何れも透彫だが後者は細長い場所全部に菊の透彫を以て飾ってある(三下方)。雙方共室町時代(前者は明應五年の棟札があったそうだが現在は白蟻の喰害により文字全く消滅。最古の夫は永祿三年のもの)だが、前記の通り後者は極く末期と見られる。

扱て其菊欄間を比較してみると、大體左の異同がある。

蕾・花 殆んど同様。

葉 共に葉の缺刻の底の形を便化誇張し、圓孔の様にしてある。其圓孔は完全に閉

じられていてのと、少しく口を開いているのとある(圖は便宜分廻しを用いて圓を描いたが、實物は勿論そんな

完好な圓)。一之宮神社のは便化甚だしく、寧ろ墮落の傾向を示している。

莖 重なり合ひ全體著しく立體的となつて來た。鎌倉式に遠ざかり、漸く桃山式に移り變らんとしている事は注意すべきである。圖は大體摺本をつくつて描き起

したのであるが、凹凸甚だしきため僅に最高點のみしるしをつけ、残りは總て寫生をした。だから圖と實物も多少(實は多)の距離があるのは、寫生に十分の時を費す事が出来なかつたので、止むを得なかつたのである。

大凡右の通り。後者の欄間板の厚さは約八分あつたと思つてゐる。寸法をとる事を忘れた

ので次の機會に譲る。

此等二種の菊の透彫を比べてみても判る様に、太い莖が前後に重なり合つて刻んである。即桃山へ入つてから欄間が急に厚くなつたのではなく、室町から其傾向があつた事が判るであらう。又葉を見ても下のは寫生に遠過るし、上は完全な圓孔はないが、下のは多くがさうなつてゐる。併し此等は何れも周邊の圓缺と思えない。強いてさう見られない事もないが、さう見ない方が穩當であらう。

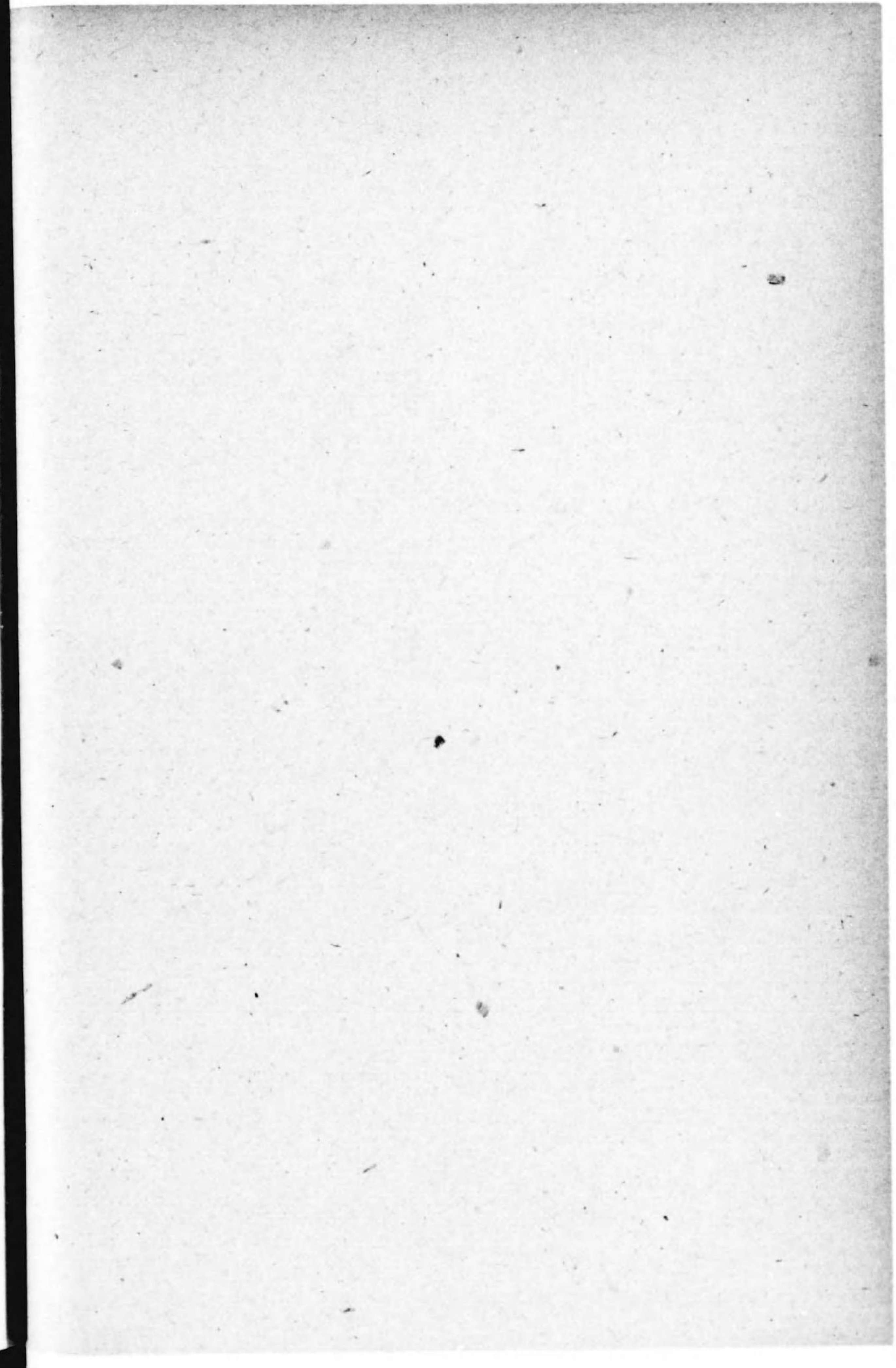
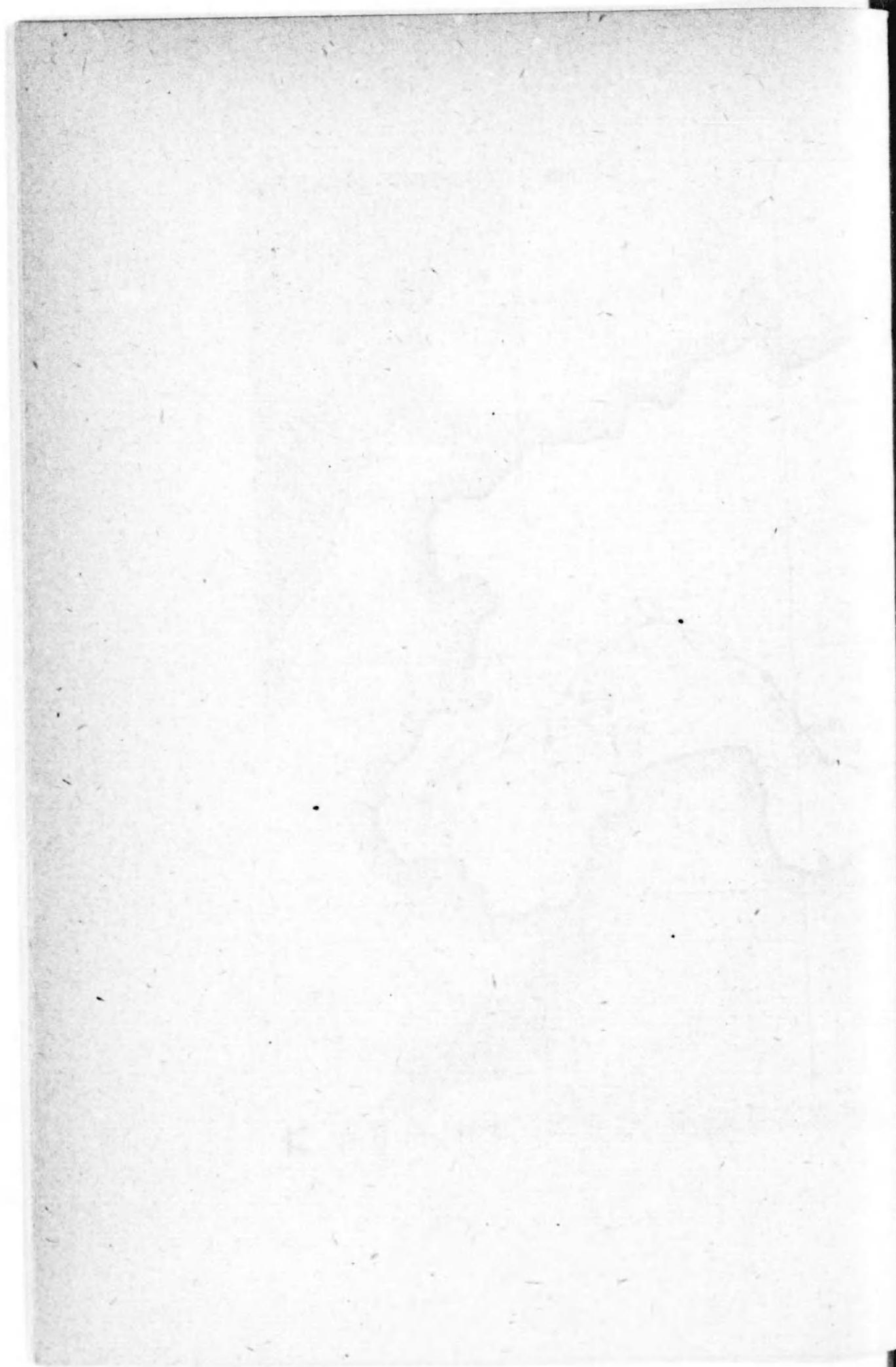
然るに圖の上方の、左上下と右下とは、どう見ても葉縁を圓く切取つたものである。同時の作でも枇杷の方は寫生的であり、たとえ栗鼠の鼻の先にある反轉したもの(左上中)でも、木鼻の毛筆を巻いているのに比べると、圖案化の程度が遙に軽いのである。夫にしても此種の葉に、今のところ三種の實例があるのは確かであり、其時代は今日でも尙お前に推定した通りと考へてゐる。さうして播磨一乗寺境内の辨天堂の脇障子欄間に現われた彫刻と(續成

隨筆第二六九、此一之宮神社本殿の木鼻や葦股内の圓缺ある木葉との間には何の關係もなく、前者が建立されてから遙か後に、自然の手本から獨創的意匠を以て、同じ様なものを案

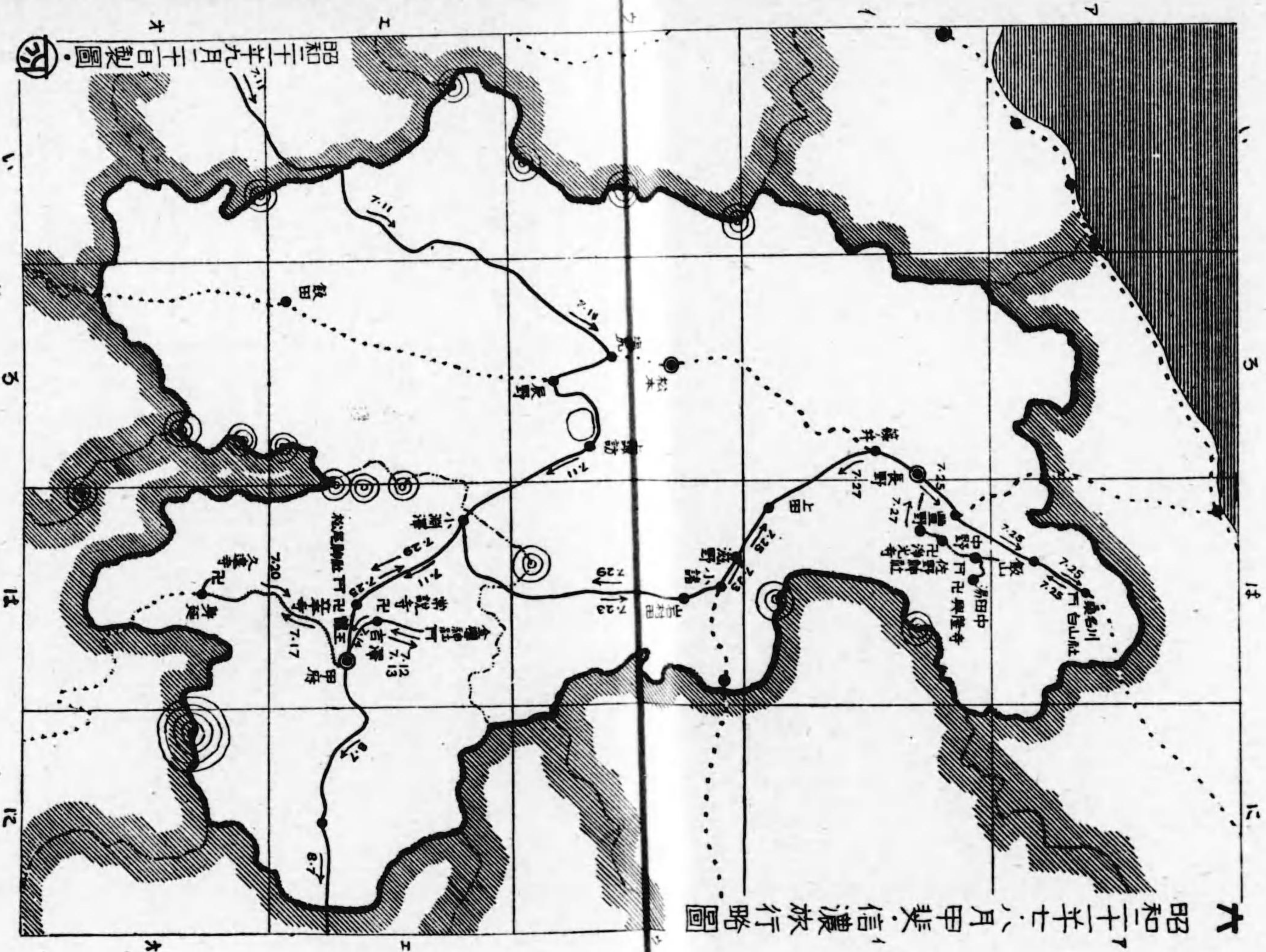
も知れない。出施工したのであろう。今でこそ僅かに三例だが、後にはもっと多くの實例が見出されるか

(昭和22年11月15日稿了
昭和22年11月15日増補)

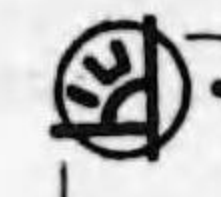
昭和二十一年七・八月
三甲信旅行記



六 昭和二十七年八月甲斐・信濃旅行略圖



昭和二十七年九月二十日製圖



緒言

山梨縣中巨摩郡敷島村の人M君が、京都市上京區千丸良隅の住人T君にきいて來たといつて拙宅を訪問されたのは、今では明かに記憶しないが、何でも凡そ5年前、即昭和17年の頃であつた様に思う。此時迄は名をきいた事もなし、まして一面の識もなかつたが、とにかく面會を試みた。ところが同君は五輪塔や寶篋印塔の圖を數枚、而も原寸圖をひろけて曰く

此頃そこいら中の墓地にたつてゐる墓標にるくなものは一つもない。自分は全く素人だが、先づ自分の先祖の墓標から改良して行き度いと思つて製圖を試みた。但し此等は何れも既に建設してあるから手入はできないが、將來完全なものに近づけ度いから、忌憚のない批評が望ましい。

と、世の中には随分變つた人もあるものだ。誰人の紹介もなしに、いきなり飛び込んで來て、自分の製圖を批評しろには少なからず驚かされたが、又一方から考えると、非常に熱心な事も判つたので、こちらも遠慮のない所を喋つた。つまり憎まれ口を敲いたのであつた。此時はこれで無事に分れた。その後數回來訪されたが、いつも原寸圖を何枚か必ず持參された。

いつも忘れた時分に豫告なしに飄然とやって来て、挨拶もそこ／＼に先ず大きく巻いた圖をひろげ、さん／＼人に喋らせたあけく、夫をまた元の様に巻いて飄然と去る。お若いからには違いないが、實に氣輕るである。初めのうちは夫でも番茶の一杯位は出せたが、此二三年來茶はあっても湯がない。湯がないのはガスが出ないのと薪の缺乏が原因である。併しそんな事には一切おかまい無しに來訪される。遂に心置きなく話をする様になった。

私は昭和16年2月に、日蓮宗の大本山の二なる能登の妙成寺へ參詣して、以來何とか好機を得次第、同宗の總本山なる身延山久遠寺へお参りを致し度く考えていた。勿論建築は皆新しいそうだから、殆んど期待はしなかったが、伽藍の配置が見學し度かったのである。昭和20年晩秋M君來訪の時、其話をしてみたら、來年暖くなったら案内をしようとの事であった。實は計畫をしていたのではなくて、ほんの一寸した話の序に述べた希望がものになりそうであつたから、豫ての望が充されるのも左程遠い事でもあるまいと思ひ、甚だ勝手ながらいろいろの用事もあるから、夫を一通り片付けてからに致し度く、尙お出來たら少し早い目につ頃からという事を知らして戴き度いと頼んでおいた。

所が昭和21年3月和歌山縣でT君と共に一之宮神社を見學をした際、もしかすると此夏山梨方面に旅行が出来るかも知れないから、そうしたら^{*}鯨桁の白山社へも是非行って見度く考へていと話したところ、同君は自分もどうせ長野迄私用で行くから、日程が決まったら知らしてくれとの事であつた。然るに5月29日M君來訪、今丁度時候もいゝしするから、山梨方面の旅行はどうか。二三日の事ならどうでもして待つてゐる。都合して行かないかと勧誘されたが、そう急では何分手をつけかけている用事の始末に困るから、遺憾ながら一週間や十日位待つて戴いても到底駄目、夫に梅雨期も近いし、一層の事7月から8月にかけてるか、或は9月になり、厄日がすんでからに致し度いと、自分勝手な申出をした。そうしたら7月中旬以後として、成るべく早く手紙を出すという事に決まつた。

此機會に豫て熱望していた「鯨桁の白山社」の見學を是非實行し度く思つた。今回の好機を逃がしては到底當分——或は永久に見込があるまいという豫感がした。だから餘程以前か

*長野縣下水内郡(シモミノチゲン)岡山村大字桑名川所在。【續隨筆】第一九七頁「鯨五種」及び本書第一四二頁——第一四八頁「白山社社殿」參照。

ら準備おさく／＼怠りなく、「萬萬一好運に恵まれたら、此夏錦地へ參れるかも知れません。そうなれば是非白山社の見學を致し度いですから、御無理とは存じますが、どうか宿屋のお配慮が願ひ度いのです」という甚だ以て蟲のいゝ手紙を、信州小縣郡滋野村のY翁の所へ出しておいた。

幸にして愈よ出かけられそうになったが、此手紙に對して返事が來ない。或は此頃の事だから不着か途中停滯かとも考えられた。そこで5月30日に書留郵便で、7月下旬頃伺えそうですから、何卒宿屋をよろしくと書いて出した。ところが此と入れ違ひに返事を戴いた。そのうちに宿屋は極力探がす事はさすが、一層の事自分の家で泊ってはどうか。食料は何とか工風をするからとあった。此手紙は5月30日附、5月31日の滋野局消印、6月1日着。洵に有難い次第と心から感謝の意を表した。

6月18日附甲州のM君から書留速達郵便を戴いた。甲府局21・6・19消印、6月22日着。どうも不思議千萬の事實は、滋野局のは普通便で翌日着、甲府局のは書留速達で四日目着。併し夫は夫としてM君は詳細なる豫定を組んでくださった。而も第一案と第二案とある。出來たら7月5日出發6日着として、7月7日は甲府空襲記念日だから、將來都市の復興につ

第一日	7月10日	京都發・甲府着
第二日	7月11日	休養
第三日	7月12日	昇仙峽・御嶽金櫻神社參拜・一泊
第四日	7月13日	神社見學・歸途吉澤常説寺休憩・一泊
第五日	7月14日	甲府温泉郷一泊
第六日	7月15日	休養
第七日	7月16日	休養
第八日	7月17日	身延山參詣・一泊
第九日	7月18日	身延山見學・一泊

き、何か参考になる様な事を1時間乃至1¹/₂時間話してくれまいかとあった。講演という程でもないが、復興都市の社寺建築に就いてなら、多少の意見がなくもないから、及ばずながら引受けるとしても、7月5日出發はとても實行ができない。だから第二案の7月10日にきめるより仕方がない。そこで左案の通り實行する事にこちらだけきめ、其旨申送った。豫て打合はしてあった通り、休養の日は十分にみてあった。豫定をかいてみると左の通り、但し括弧内は私が書いたもの。

第一〇日	7月19日	身延山發・歸甲
第一一日	7月20日	休養
第一二日	7月21日	休養
第一三日	7月22日	(此日の日程記載なし。休養一日の餘裕を取ったものか)
第一四日	7月23日	甲府發長野行(滋野村のY翁邸行)
第一五日	7月24日	休養(Y邸にて)
第一六日	7月25日	神社見學(長野縣下水内郡岡山村桑名川の白山社見學の事)
第一七日	7月26日	休養(Y邸にて)
第一八日	7月27日	歸甲(Y邸發・龍王驛着・M ₄ 邸泊の事)
第一九日	7月28日	休養
第二〇日	7月29日	休養
第二一日	7月30日	甲府發・歸宅

としてあり、其後に大善寺や清白寺へ未だ參詣してなければ序にどうか、京都出發の日が決定したら知らせてくれ、他にも用事があるから京都迄迎えに行つて、列車の時刻等を相談するとあつた。そこで前記の通り7月10日出發と定め、6月23日早起して夫々適當に手紙を

認めた。

M₁君へ……7月10日發、總て貴方製作の豫定表通り、但し金櫻神社は一泊では不足ではないか。長野行は先方の都合でどうなるか不明故、24日より早くならない様にしたし。7月9日四天王寺泊、7月10日朝四天王寺より發。大善寺・清白寺は既に先年參詣したが、都合にてもう一度行く。

Y翁へ……7月23日着・24日休養・25日白山社見學・26日休養・27日歸甲ときめたが、貴方の都合で、24・25・26の3日の間にきめて戴き度い。26日より遅れる方は差支ないが、24日より早くならない様に、宿泊の便宜感謝に耐えない。

T君へ……7月25日白山社見學と確定したが、24・25・26の3日のうちになるかも知れず。

M₃君へ……7月9日夜一泊、7月10日退去、甲信方面の旅行に出かける。7月10日の晝辨當の用意願ひ度し。

右四通の書面中、最初の二通は書留速達、後の二通は普通便とし、書留の方は6月24日一〇・〇〇頃出町局から出した。

6月24日午前、丁度入れ違ひに6月22日附(田中局21・6・22消印)のY翁の書留便が着いた。夫によると「桑名川附近の野澤温泉へ照會したが返事が來ないから自宅へ泊る様に。何れにしても滋野迄來

ればあとは全部案内をする。時刻表を添えておくから、來着の時刻を決めて通知せば尙よく考える。下高井郡穂波村に天正十九年の棟札のある佐野神社というのがある。自分も未見だが一見如何。という意味の手紙で、神社の寫眞一葉が添えてあった(二二)。參拜し度い氣もするが、時刻は滋野驛を四・〇〇に出ないと日歸り(二〇・一五歸着)はむづかしいらしい。私は弱りきっているが、前後一日づゝ休養を要求した手紙と入れ違いだから何とも恐縮だが、今私が考えている時刻は、

甲府發 二・四三 → 滋野着 八・三三

滋野發 四・〇〇 → 桑名川着 → 八・七七

桑名川發 → 二・〇五 → 滋野着 二・二五

滋野發 七・三三 → 甲府着 二・四六

この通り實行するとしても、先年大門の佛岩寶篋印塔を見學して上田市へ歸着したのより二時間も早いので、Y翁の承諾を得ればこれでよからうと考えた。

7月に入ってもM君から音信なし。遂に7月8日、つまり翌日に出發というつば際になつて、一五・〇〇頃雨中來訪、直に要談に入り、曰く東海道線は復員者で到底混雜だから、一層の事關西線か電車で名古屋迄行く事にするが、切符其他全部任せろとの事に、丁度幸い

紀行(六)

だから全部宜しく依頼をした。つまり私は9日四天王寺行一泊、10日指定の時刻に指定の驛へ行くといった所、其日の朝九・〇〇迄に四天王寺へ迎えに行くから待っていていけばよろしいが、其日の晝辨當だけは用意する様にといいことであつた。同君はこれから奈良へ行くとして談がすむなり辭去、續てS君來訪されたが間もなく辭去。同君は珍らしく甘味若干入手したとて爪哇珈琲と砂糖とズルチンとを惠與されたので、家族一同で賞美、旅行の幸先大吉だといつて喜び合つた。

7月に入つてから更にY翁より通信あり、上高井郡在住の宮崎龜三郎君(舊姓久保田)より「佐野神社見學をすゝめ、そうなれば自然自宅一泊となるから、ゆつくりする様にといい意味の手紙があつた」といふ書留郵便着。又朝淵のT君からは「多忙のため桑名川行は決行出来ないからやめる。但し上高井郡都住村雁田の淨光寺藥師堂は、應永十五年の墨書もでゝいるし、これだけは見學如何。山浦さんはよく承知の筈」といふ通信があつた。この事は早速Y翁へ申送つておいた。

昭和21年7月9日。

火曜日・晴、京都發・大阪着・四天王寺泊。

昨日の豪雨今朝歇む。併し京都は曇。四天王寺茶室前の、昨年9月に確かに躑躅だと思つたのは、そうではなくて「クチナシ」であつた事が判つた。勿論植物に關する知識が皆無の結果、この様な有ふれた樹も判らなかつたには違ひないが、これである時「オオスカシベ」が飛來した理由が明らかとなつた。本能というものはおそろしいものだ、今更の様に感服をした。茶室前庭の樹間に「アオスジアゲハ」と「コシアキトンボ」が盛に飛ぶ、午後「ニニーゼミ」が競争で鳴いた。蒸暑い日であつた。

7月10日。

水曜日・好晴、四天王寺滞在。

早起して待つていたが九・〇〇の約は守られず、漸く一一・三〇になつてM君來訪、今日ならどうしても一五・四二の汽車より仕方なく、そうすると明朝八時頃でなくては行着けない。だから一層明朝五・五一天王寺發にすると、夕刻の7時何分・即日のあるうちに甲府へ着けるから、そうしたらどうかとの事に、幸ひM君も同席して居られたので即決し、明朝の食事は今夜炊いて握飯にして置き、夫を持って出かけ、晝食は同君の手で用意をして戴く事

にした。同君は自分の荷物を預けて辭去、明朝早く私を誘ひに來て一緒に出かけるといった。連絡がついてほんとうに安心ができた。

「クチナシ」の花は此朝萎れた。「コシアキトンボ」は六・〇〇頃から飛び出し、時には三疋位巴文を描いて飛ぶ。「クロアゲハ」と「アオスジアゲハ」も盛に飛ぶ。7月13日夜一泊の豫定なる常説寺は尼寺の由、この寺には順徳上皇御乗用の輿ありという。數年前風俗研究會の有名な江馬文學士が深く研究され、非常な價值を有するものたる證明をせられたとの話をきいた。

7月11日。

木曜日・好晴、四天王寺發・天王寺驛より乗車。甲府に向ふ。

二・五〇眼がさめたきり寝つかれず四・〇〇起床、四・三〇用意をして待つていたら、四・四五になつてM君來訪、5分たつて一緒に出かけて五・〇五驛着、切符は天王寺・甲府間三等で31圓、所が此列車のうち名古屋直通は先頭の何輛かで、中途からあとは龜山停りであつた爲少しまごついたが、幸に同君の盡力の下に私だけ一席を得た。一一・二八名古屋着。乗換。こゝを起點とした鹽尻驛(ウ)行のは一二・一二發、途中割合にすいていて一七・二八

安着したにはしたが、新宿行は2時間34分待たなければならない。上諏訪行なら僅に16分待つだけとの事に、少し迷ったが途中の乗換は到底覚束ないそうだから、一層此驛で待つ方がよからうと議一決、幸にM君は夕食にあてる握飯迄用意してくれていたもので、ひだるい思いをせずにすんだ。而も King Brand Salmon のレーベルを貼った好物鮭の罐詰があったのは有難かった。かくて樂に驛乗降場に於いて夕食をすました。

私共が乗ろうとする汽車は長野驛發だから、勿論超満員でくるので、鹽尻驛(ウ)で先頭に一輛増結するという。位置を見計り待っていて、5番目に至極樂に乗れた。見渡す限りの人で、この位樂に乗った事は古來未曾有であった。私は下車の時を考えて入口に最も近い席にM君と向い合つて席をとった。夫でも何でも一ぱいの人。汽車は一九・四二に出たが、上諏訪驛(ウ)等は混雑言語に絶し、よく鹽尻驛で新宿行を待った事だと思つた。だから龍王驛(リュウオウ驛。甲府驛の一つ手前の驛)(エ)へ着いた時は到底まともに下車できず、M君が先に窓から降り、私の中から荷物を渡し、續て私も窓から半身を出し、下でM君が受取り、内から他の乗客が兩脚を出してくれて、漸く下りられた。正に最初の——恐くは最後の——藝當は他力でやつてのけたのであった。時に二三・三〇。15分待つたが發車しない。改札口は反對側だから仕

方なしに待つていたが、餘り發車しないので驛員の承認を得て向い側へ渡り、徒歩M邸に向つた。驛の改札口を出て、暗暗たる月光を浴び、田舎道をM君と並んで歩き出したのは正に二三・四〇。

龍王驛で發車を待つていた時、だしぬけに大して人相のよくない人が、私に向つて「アナタ一人ですか」と訊ねた。多少心中不安だったので、何故にそんな事をきくのか反問したら、先方はもう一人のいる場所があるからとて、特に老人だから親切にしてくれた事が判つた。私は申譯のない事をいふと思ひ「夫は洵に御親切にありがとう御座いました。私はこゝへ下りたのです」といって此話は終つた。夫位乗客が寒驛に集つていた。甲府ではとても乗車思ひもよらないので、一つ手前の龍王迄來たよめんなに雑沓するのだとの事であつた。乗れないで悲鳴をあげたり、あきらめて茫然乗降場に立つて眺めている人もあつた位の混雑であつた。何だつてこゝ人が出るのか。

7月12日。

金曜日・好晴。敷島村三井邸着・同邸發・御嶽着・御嶽宿泊。

夜途の上に初めてだから可なり遠い様に思つた。鞆一個肩から下けて漸く40分歩きつゞけ、

○・二〇目的の三井邸着。玄關へ上って座ったのは夫から五分後の7月12日○・二五。常説寺の尼さんが来て泊っていたが、主人の歸宅に一同起き出でた。尼さんと初対面の挨拶をし椽の戸をあけて月を眺めながら話をしていりうち、軽い食事の用意ができたとして、饅頭の御馳走に預ったのがやがて三・〇〇、ともかくも横になった。一寝入したら六・〇〇が鳴ったので起きてしまった。

此日は一日休養と思いのほか、夜は御嶽迄行つて一泊するのだそう、これは小生には少し意外であったが、變更相成難しとの事に、豫定表を見たらそうなっていた。考えてみれば出發が一日後れたのだから、どうも致し方がない。一五・〇〇頃に出かける様にしておけとの事であった。晝食の時主人は留守で私一人、夕方には1 $\frac{1}{2}$ 里歩かなければならないから、其つもりでたっぷり詰め込んでおいた。

毎日一四・三〇甲府驛前發天神森(昇仙峽の入口。七)行のバスが最終との事に、M邸から約20分の距離を歩いて、千塚町停留場にて待つ、バスは一五・一三來たので乗り、終點へ一五・四五に着いた。昇仙峽という有名な景色のよろしい所だそう。途中いろいろの名所あり、そのうち「人面石」というのが私の興味を惹いた。なぜならモヘンジョ・ダロ出土の、あの彫刻

七 御嶽昇仙峽及附近の名勝



(大正14年から15年にかけての發掘に際し、見出された髭の生えた男子の小像の一部)の横向きそっくりと迄は行かなくても、先ず夫に近

い顔の様に思われたからであった。他のものは率直に言えば先づ平凡、なぜこんなに有名になったのか殆んど私には判らない。バスの終點即長潭橋の袂から、地圖に記してある數字を加えたと約40町の邊に「仙峨瀧」というのがあるが、これも亦私は大して感心しなかった。

こんな程度の山間の小瀧は、朝鮮の山寺の屬庵巡りをすれば珍らしくない。大概の人は此瀧から引返すそう。こゝ

から更に20町計歩くと御嶽の部落に達し得る。だから初めからだ合計約60町歩かなければならない。1 $\frac{1}{2}$ 里歩くのだと聞きかされていたが、事實は夫より9町多かった。宿屋へついたのは一八・五

○であったが、途中休憩した55分を差引くと、つまり2時間55分の約3時間で60町、1時間に20町の割。

私がM君と一緒にバスへ乗った千塚町停留場から、同君の友人だといふ寫眞師のK君と吉澤村常説尼寺主のK尼とが同乗し、後者は吉澤村入口の櫻橋停留場にて下車され、前者は私と共に徒歩して旅宿に到着した。ところがやはり此邊の宿でも米を持参しなければ泊れないそうだが、米は一人前三食分前以て届けてあるそうだが、どこからどうして届けたのか私には判らない。そうするとどうしても一夜しか泊れない。そうすると明日は半日では是非片付けなければならぬ。どうもこれは洵に困った事になって来た。せめてもう一夜泊らなければものにならないが、食料がなくてはお話にならない。

宿は御嶽の部落の突き當り、神社への石段の下、御嶽館といふ立派な家。今夜は特に温浴があるとの事に、早速頂戴に及んだが、入浴中K尼が太鼓を敲きながら安着された。此宿の階上から正面に富士山が見える。南嶺西に當る。夏だから餘り引立たないが、冬であつたらさぞ美事であろう。

湯から出てみたらK尼はどこで調えたか、濃厚な搾りたての牛乳を硝子コップに三杯飲ましてくださった。昨夜三時間しか寝ていないから、さぞつかれたろうと言いながら、これは實に意外で有難かつた。何にしろ此二三年、牛乳なんか見た事もなかつたし、實は非常に疲労していたから、全くりフレッシュしてきた。尙お同尼は私の疲れを顧慮し、どこかでリヤ・カアを借り、私を乗せるつもりで途中迄引張って来たが、とても追いつく見込がないので、途中知り合いの茶店へ預けて来たといつてくださった。御親切は千萬辱ないが、まさか私が乗るわけには何ぼ何でも行かない。また同尼も同行M・Kの兩君をあとにしたらしい様にも考えられたが、夫もまた拜辭するより方法はない。結句御親切を有難頂戴する程度であるが、何ににしても老骨一人の無理難題に對し、皆様の御高配感謝に耐えない。

飯米はどこからか持参したのだそうだから、これは一人あて一合の割らしく、盛切りでお代りはなかったが、副食物は相當なもので「玉子の眼玉焼」・「馬鈴薯・胡瓜・人參の鹽味付」・「馬鈴薯のみの味噌汁」・「胡瓜とホウアラの莖の漬物」。夜は涼しく蚊は一疋も居ないので、ねる時も蚊帳を吊らず、我等一行四名の他に客がなかったから、M・Kの兩君は知らないが、尼僧と小生は夫夫靜かな一室を占領、私は早く就床したので、他の人々はいつ頃ねたかまるで知らなかった。

7月13日。

土曜。・探明。金嶽神社参拜。御嶽。常説尼寺。泊。

朝早くから「ヒグラシ」の鳴聲をきく。富士山はよく見え頗る絶景で、空氣清澄、冷氣肌にしみて氣分甚だ爽快。五・四〇より石階257段を昇り参拜、一巡して歸宿したら六・四〇であった。正に1時間を費した。朝食をすまして八・〇〇改めて参拜、各建物を一應見學したら一〇・四〇になったので、社務所にて一休。此間最近社務所の奉仕者によりて見出された「幣串」を一見した。小生にはかゝる品は判らないが、飾金具は正に鎌倉（初期）と見てよさそうに思われた。問われたので其旨を答へたら、一同満足された様であった。續て晝食の爲め歸宿。晝食は玉子丼、天氣晴朗。

前記の様に此日は是非吉澤村の常説尼寺迄引返さなければならぬ。夫には可なりくたびれているから、休養が必要である。仍て午後外出せず、一五・〇〇出發を申出で、一五・二五御嶽館發、仙娥瀧迄40分を費し、途中隨所に休憩したうちに、此方面のバスの終點なる茶店へK尼先づ入り、店にいた若い婦人に「おぢさんは未だお歸りになりませんか」とたづね、其返事に未だですとあった。實は私は早く寺へ行ってくつろぎ度かったのだから、こゝで手間をとるのは少しばかり困る。だから御主人は留守の方が、ほんとうは私にとって都合がよかった。夫でも20分ばかりゆっくりしてしまつた。最終のバスは時間が來ているのに未だ來

着しないのは何れ何か事故でもあったのであろう。いつ迄待ってもきりがないというので、辭して出發、一九・一三吉澤の常説尼寺着。とかくと何でもない様に見えるが、實は途中の茶店に預けてあったリヤ・カアを引張り出し、私に是非共乗れとすゝめてくださった。併し初めは遠慮していたのに、つい斷りきれず、總距離約23里の13はM君、残りの23は常説尼寺の弟子の筋骨逞しい尼さんの厄介になった。いやはやどうもというところ。

寺へ着くなり先ず入浴、さすがに遠慮をしてかゝり湯だけにしておいたが、出たら枇杷とパンと牛乳、續いて夕食四人、尼僧・M君・K君・小生。珍物葡萄酒があった。これは何でも總代の家を托鉢入手の品との事で、俊一はつかれていたので喜んで適量だけ戴いた。夕食後如何なる次第か兩君徒歩歸途に就かれたので、結句一泊したのは俊一だけであった。尤も

夕食献立

月が非常によかつたので、若い人は歩いて歸っても涼しくて絶景でさ

鱈鮎二碗

ぞよかつたろう。兩君去つてから椽にて涼を納れ、二二・三〇臥床。

胡瓜漬物

蚊帳不用といふ話であったが、とてもひどい蚊なのでやはり蚊帳を借

野菜サラダ

りて吊つてねた。御嶽の部落の様に行かないのは是非もない次第。月

白米御飯

は笠を冠つていたので明日の天候少しく心配になつて來た。

7月14日。

日曜日・晴。常設尼寺發、甲府市温泉郷富士野屋泊。夜、ソウライ瑠院座談會。

四・三〇「ヒグラシ」の競鳴と「ニーニー」の鳴聲とで眼がさめた。本堂にて朝のおつとめが始り、六・一五迄続いた。天気は持直したものの、如く晴れていた。足が少し痛い。休養が必要である。

朝食献立

素食献立

朝食は八・〇〇頃より。午前中の仕

パン・スープ

パン・白ソース添

事は順徳上皇御輿との傳説ある輿の見

茄子の實の味噌汁

鱈 鮎

學に費す(別項)、結局鎌倉初期の工藝

胡瓜おろし

馬鈴薯・三度豆・人

品と見られた。此日此寺に於いていろ

馬鈴薯・三度豆煮付

參煮付

くの方にお目にかゝったが、多くは

一一・〇〇頃から一四・〇〇頃にかけておいでになったので、ゆっくりお話を伺ふ時間もなく、何れも記憶から脱失した。たゞ一人中村幸雄さんだけは、前日最後に休んだバス終點

*甲府行バスは長潭橋から川下、二三町のところから出る。その茶店の主人、山梨縣景勝開發主事として縣の經濟部山林課兼内務部教學課に勤務されている。此頃の様子では進駐軍の用事もいろいろあるらしく、晝夜の別なく活動して居られるとの事である。

の茶店の御主人で、K尼が是非「小鳥のおぢさんに紹介する」といつて居られた其人であった。前日はバスが後れてお目にかゝれず引揚げ私も早く休憩ができて助かり、此日ひるまお話もうかがえたし、洵に幸であった。

私は嘗て中村翁が佛法僧鳥がそう鳴かず、木葉木葉が「ブッポウソウ」と鳴くといふ事を確かな證據をつかまえて證明されたこと、内田博士の【鳥と獸】(京都芸章堂發行)という隨筆で讀むには讀んだが、其發見者のお名前は忘れてしまっていた。ところが同翁の談で忽ち記憶を呼び起し、「佛法僧鳥がそう鳴かないで、木葉木葉がそうなく、射落して證據を提供したといふのは、私は書物で讀んでいました。其御本人でしたか、夫は洵にうれしい事でした」と、お目にかかった喜びを申したところ、同翁も大に喜ばれ、結句中村さんとだけお話をしたよ

*【鳥と獸】農博 内田清之助氏著 一二六―一二七頁。

【野鳥襟記】猪川城氏著 三〇―三五頁、二一五頁(生態放送)

少し古い百科全書等には佛法僧鳥が「ブッポウソウ」と鳴く様に書いてある。私はいつどこで書いても Poop-pop, Poop-pop ときこえ、終りの「ソウ」をきいた事がない。朝鮮の山寺でもよくきいた。

多分あれがそうだらう。併し素人だから、間違へて外の鳥の鳴聲をきゝ違へたのかも知れない。

うな次第となり、他の方には何とも申譯のない事になって了った。古來鳥の學者が全部誤っていた事を發見され、訂正された大功ある中村翁に面會し、其聲咳に接し得たのは、たとえ僅かな時間であつたにしろ、限らない喜びであつた。K尼が「是非共小鳥のおぢさんに紹介する」といったのは故ある哉で、改めてK尼に感謝をした。翁の態度は謙讓其物であり、私は一層敬意を表し、楽しいひと時を過ごした。

甲府行のバスは今度が最終であるから、吉澤^{チツサツ}からでは乗れないかも知れない。終點迄一走り50錢ですむから、逆に乗って下車、發車迄中村翁の茶店に憩い、嘗て同翁が射止めた鳥のアルビノ、即「白鳥」^{シロカラス}の剝製を見せて戴いた。白と黒と二つ並べて見せるのだから、眼明きならどんな判らずやにでも判る。世間にある筈がないといふ譬に「スッポンが時をつくる」という句もあり、また「しろがらす」という名詞もあるそうだが、前者は絶対にないとしても、後者は現に證據があるのだから、この後の例は今は通用しかねる場合もある様である。話はずきなかつたが、バスの發車に促され、止むを得ずお別れをした。

かくして終點から終バスで甲府に向ひ、途中下車して三井家の菩提寺なる青松院へ行き、M君の計畫された各種の石造建築を觀、次に甲府市に出で、湯村温泉富士野屋に泊す事にな

つた。こゝはM君の親戚に當るそうで、宏壯なる大旅館、一浴休息、夕刻からやはりM君の伯父さんに當る齊木逸造翁を會長とせる正瑋院^{マンソウウイン}と訓むそうだの座談會を開いた。總て同會の同人の集合だが、俊一は勿論出席の光榮に浴し、尙お客分として同縣史蹟調査委員たる郷土史家村松志孝翁も出席された。夕食の獻立はこゝに記した如く、豪華版であつたが、會員が持寄つたものだそう。夫に名産葡萄酒、これには Rare Old Wine のレーベルが貼つてあ

夕食獻立

アロピ酢の物・胡瓜添

焼豚・野菜サラダ添

生茄子鹽味付・鱈魚かけ

野菜天麩羅

鱈、鮎

つた。頗るなごやかな會合、人數僅かに十人、墓標改良計畫を主として司り、三井英俊氏専ら設計製圖に當つて、既に相當の成績をあげているが、將來手廣く此方針をすゝめて行く計畫だとの事である。俊一は一九・〇〇から二一・〇〇迄席末を汚していたが、K尼斡旋の下に階下六疊間に退去してお先へ失禮をした。

昨年6月3日、和歌山縣那賀郡の一之宮神社から、風市神社社務所迄T君の自轉車の荷物臺の上に乗せて貰ひ、空前絶後と思つたが、これは誤りで此日はバスを下りてから青松院迄と、更に青松院から湯

村温泉郷迄と、M君の自轉車臺へ乗せて貰った。これが皮切りで今回は同君のには何度も、時には初對面の人のへも乗せて戴いた。どうも此頃の様に乗物がなく、且つ暑氣劇烈か乃至遠路の時は、老人はこゝろでもして戴かなければ全くやり切れない。お蔭で荷物臺への乗り方は、修行が積んで大分上手になつた筈である。

7月15日。

月曜日・好晴。湯村温泉滞在。市内墓標巡覽。

前夜、明日は休養日につきM君は終日墓標巡覽を計畫中とかの噂あり、かくては到底俊一の老體が續きそうもないから、午前涼しいうちだけとし、午後は閉居を主張し略ぼ決定した時、階下の寢室に退去したので、解散の時刻を知らなかったが、昨夜この旅館に宿泊したのは、齊木翁とK尼と小生の三人であつたらしく、朝食を一緒にすまし、九・二〇來訪したM君案内の下に、附近の松元寺シヨウゲンジと鹽澤寺シホノサヅとへ行く。松元寺には同君の處女作寶塔一基があつた。同君の乞ひにより無遠慮の批評を試みたが、位置としては凡そこの位絶好の場所を占めてゐる墓はめつたにあるまい。鹽澤寺では裏山の古墳をみた。實に久々で玄室内迄入つた。もう一つあるそうだが、雑草が餘り生ひ茂りそこまで行く途もない有様なのでやめにした。

鹽澤寺の境内に地藏堂というのが建つていた。M君から古そうだからといふので、豫てから多少問題になつてゐるとかきかされたから、これは住職の案内で内部を一覽した。柱・木鼻・藁座・内陣柱上枓栱・太瓶束・吹寄菱格子欄間等、何れも室町時代のもの、如くであり、後世勝手に修補されてゐて、ものにはならないが、今の堂はともかくも室町時代に建築されたと見てよからう。右のうち藁座はもつと大きかつたのを、少し端を切斷して再用したようである。K尼も同行された。

晝食の爲歸宿。午後小生獨り在宿、枕を借り二階の大廣間を占領してひる寢をした。夫迄に入湯すべく二度風呂場へ行つてみたところ、餘りの混雜に恐れをなし、目的を達せず引揚げた。町から大して高級でもない二手類が勝手に(?)入りに來る様で、逗留客には洵に不愉快である。此頃の事だから仕方がないかも知れないが、小さい風呂はあつても夫は入る事ができない様になつて居り、大きな浴槽一つでまるで芋を洗う様な状態。寧ろやめた方がいい。それでひるねは一六・〇〇迄、約二時間半にわたり、おかげで出發以來のつかれもとれた様な氣がした。

一七・三〇M君歸來、直に階下六疊の小座敷に移つた。夕食は可なり晩く、而かもおかず

は一品でいゝかときくので、何の事か不明だから、いゝ加減に軟いものなら何でもよろしいといったところ、持って来た膳部にはかなりの御馳走があり、盛飯だが白米で十分にあった。鮎鮎でよろしいと言っておいたのにも係らず、三食獻立次の通り。

朝食

晝食

夕食

胡瓜もみ

チキンライス 一皿

鮎刺身・胡瓜と玉菜添

胡瓜・玉菜漬物

胡瓜漬物

鰹鹽焼・茹玉菜ソースかけ

味噌汁

白飯

茄子二杯酢

白飯

滋野村のY翁宛、同翁から調べて戴いた時刻表により、23日一一・四五甲府驛發、一八・三五滋野驛(は)着の汽車で出かけて差支はありませんかという速達便を出した。一週間あるから否やお返事は戴けるだろう。これが滞りなくすめば正に大願成就といえるのである。

7月16日。

火曜日・好晴。慶長院行。富士野屋敷・三井邸泊。

朝三・〇〇から大丈夫だから湯に行ったら、夜があげかけていたので不思議に思ったが、ゆっくり唯一人であつた時が三・四〇、ことによつたら時計が狂つたかと考えている

うちに五・〇〇の警笛が鳴響いた。此宿の朝食は晚いから、明朝もそう早くはたてない、一層の事もつとゆっくり出かけ、三泊にして十分に観度き旨をM君に話した。明日は待望の身延山参詣の豫定日である。ところが今夕此宿を引揚げ、三井邸へ行くのだそう。夫ならいくらでも早く出發できる筈である。

九・〇〇旅宿を出て暫く徒歩してから、例により自轉車の荷物代りとなり、甲府市内の慶長院といふ寺へ墓標をみに行く。こゝでも忌憚のない批判をし一二・〇〇歸宿。此日は前日と反對に浴槽内は唯一人であつたが、晝食は昨日同様至極少量。やがてK尼と法弟某と來合はせ、持参の行厨を開き雑談に午後を費した。K尼の高配により、強力メタボリン2ccの注射をすまふことができた。有難い事であつた。此間、月末にもう一度常説寺へ行き奥の再見學をなし、又出來得たら人面石のあたり迄も行ってみる事に決まつたのは好都合であつた。

一七・一〇愈よ旅館を出て、再び松元寺へ行き、三井邸に移つた。勿論自轉車で運んで貰つたのである。此日は富士山のあたり透き通る様に晴れていた。二三・〇〇就眠。

甲州に多産するかどうか知らないが、此朝七・一二、「ミンミン」の鳴聲をきいた。12日以後時々聞く。

此朝のは「21→6→7→7→7→7」といふ工合に、初めは21聲つづけ、合せて55聲鳴いた。これ等は合計少ない方である。

7月17日。

水曜日・好晴。三井邸・身延山着・清分寺泊。

五・〇〇起床。七・三〇朝食後主人外出、荷物を驛迄運び、各所との連絡をとり歸來、一・〇・三〇發僅に18分を費し、一〇・四八驛着、愈よ乗降場で甲府驛着の電車を待った。甲府は終點だから、樂に座席を得られるつもりで行列を造って待っていたが、どういふものか大變な人数で、電車は來ないのに刻々人は増すばかり、中等程度の生徒が大多数を占めていた。少なくとも三輛連結と思っていたのに、一一・二五にやっと着いたのは二輛、客が下車し切らぬうちから、中等學校の生徒は雪崩を打って我先にと車内へ押寄せ、此時迄辛くも持堪えていたキューは完全に破壊され、割合に前にいた俊一は漸く座席を得たが、同行のM君は駄目併し生徒のこんな亂暴には馴れているせいか、例の如く悠悠迫らず「あんなのぢき下ります」と。

電車は一一・四〇に發、身延驛(オ)まで正に1時間を費し、一二・四〇着。幸に身延町から

驛着のバスが後れたので連絡、一三・一五終點着、徒歩約二町で清分寺(棧瓦葺の厩大なる三門地)に入る。甲府市信立寺住職鹽田義遜(セ)師既に在り、初對面の挨拶をし後直に晝食、少憩の後一五・〇〇より同師の案内にて「祖廟」及び「法界堂」を見學した。

祖廟は石造方形大面取の小建築、寶塔型であり、創意は出ているが相輪短きに失するもの如し。誰人の設計か尋ねたが判らなかつた。其祖廟に達する前の川に架してある石橋の親柱の頭は、開敷蓮花には違いないが、恰も磯巾着が觸手をひろげた様で、頗る奇觀を呈していた。俊一は自今勾欄の親柱を、(一)蓮蕾、(二)開敷蓮、(三)磯巾着、(四)異型(例えば古四王きもの。或は天恩寺佛殿の、様なものも入れていゝかも知れない)位に別けようかとも考えた。この橋も誰の設計か判らなかつた。萬一大家の意匠になつたものとする、甚だ失禮な無駄口を敲いた事になり、何とも申譯がない。若しそうしたら何卒お許しを願度いのである。

鹽田師は次に法界堂を見せてくださった。三間四面單層の小堂で方柱料栱舟肘木疎極木舞裏。柱・舟肘木・丸桁・極等何れも大面取。内部正面中央の臺股は脚間に「兔に浪」を入れ、また須彌壇の羽目板には蓮唐草を入れてあったが、此等は何れも桃山時代位のものと考えてよさそうである。同師は身延山の建築として、これ等は優秀の部で、且つ最古の型式のもの

と思われると言われた。私は此日惣門(高麗門)を瞥見して古いと思い、桃山を距る左程遠くないと考えて同師に話したら、寛文5年9月の建築だとの事であった。成程と頷かれる。そうすると、(一)、法界堂(但し大)、(二)、惣門(比較的古い)という事になる様である。

法界堂をみてから、更に程近き林中に移したという方三間の建築を見た。これは改築前の宗廟の覆屋だという。料拱唐様三手先の大建築。建物もこれ位になると、一層罪がなくてよろしい。正面に突き出している木鼻は「浪を唐獅子化」したもので、即ち「自然物を動物化したので、こうなると少しく不気味な感じがする。今日はこれだけで清分寺(セイケイジ)へ歸った。

鹽田師は一七・二〇退去された。明日退引ならぬ用事があるとの事であった。そのおいそがしいのに係らず、態々数ならぬ小生のために一日をさいてくださったのは御禮の申様もない次第。連絡がうまく取れず、小生は何も知らなくてゆっくり出かけたのは、何とも相すまなかつた。こゝに謹んで御詫を申上げておく。夕方少し天氣曇る。

電車が始發の甲府驛をでる時の、中等程度の學校の生徒のあの亂暴狼藉、餘りひどすぎる。老幼婦女なんか突き飛ばされ、現に私の直ぐ後方で老婆といふ程でもないが、かなりの老婦人が轉ばされた。彼

等は先を争つて座席を占め、得意然とあたりをねめ廻す。まことに言語道斷の振舞を、驛員は知らん顔をしていた。或はいくらいつてもきかないかも知れない。關西のある驛での話だが、其近所のある有力者が、驛長に驛員の不法行爲を注意した時、驛長の答は「どうも安月給ですから、少し位のことには仕方がありません」といったとか。私は直接其注意した人からきいた事がある。由是觀之、どつちもどつちらしい。夫にしても生徒の行爲はあきれてものが言えないが、どうやらこれは全國共通の現象らしい。ただ程度の相違位のところだろう。こんなのが學校を卒業して就職したらどうなるか。學校の先生や父兄は、生徒のこの様な行動を恐らく御承知ないのである。だから訓戒もなさらないのだろう。だから彼等はいゝ氣になって野性を發揮しているのだろう。民衆は泣く兒に地頭だと思つてあきらめてい

身延山へ宿泊するに就いては、K尼が萬事幹旋してくださいるのだそう。私にどういふところへ宿泊を希望するかときかれたから、金を出しても泊れない様な、そうして静かな所が希望だと答えた。そうしたら百方盡力して「清分寺」というのに決めてくださった。此寺は留守居の坊さんが獨りきりで、座敷は締切つてあるから、掃除をしなければ泊れないとあったので、K尼は法弟と共に先發、全部清掃してくださいったのだそう。洵にどうもお手敷をかけて相済みませんでした。厚く御禮を申し上げます。其代り私としては、此夜は廣い幾室も續いている座敷へ唯一人、戸を締める事もなく、ゆっくり寝に就く

事ができ、其喜びはいつ迄も忘れる事はない。M君は少しはなれた友人のところへ泊りに行き、K尼と法弟とはどこかへ行かれた様で、ほんとうに金力では到底こんな所へ泊る事はできまい。正に念願が叶った次第であった。

7月17日。

木曜日・曇。身延滞在・諸堂見学。

四・三〇「ヒグラシ」の競鳴一しきり、間もなく鳴きやむ。眼はさめたが起きるのが懶く、遂に六・〇〇になった。朝食は七・〇〇であったが、昨日特待を断って私の申出た通り、臺所の隣室でK尼や留守居の坊さんと共に盛飯を食べた。

何分見上げただけで恐れをなす様な、蹴上の高い飛雲閣の階段式の、夫こそ45位かと思われる石段約300段を昇るか、或は羊腸たる斜面を歩かなければ、主要建築物のある所へ達する事ができないから、一度昇降したが最後、俊一は閉口してう虞が頗る濃厚である。其邊は最も察しのいいK尼の、晝辨當をもって行くとの提案に、絶対賛成をした、八・四〇出かけ、勿論斜面を緩歩して昇り、先づ高麗門に達し、入って左手に鐘樓を見、受附に旨を申出てここから上り、客殿を通抜けて書院に休憩。

佛殿・眞骨堂・開山堂に参詣して書院に戻り、辨當をすまして、午後は現在法主の居間なる「奥書院」に行き、第八十四世法主日圓上人に面會、此書院は可なりの古建築なる由猊下より承った。この長押の釘隠は「龜」の形で、これは甚だ珍しい。やがて退去、これより祖師堂・釋迦堂を見學。日蓮上人の尊像も特に拜觀し、一五・〇〇終了、一五・二〇辭し、一五・四〇歸着した。歸りは正面の石段を數えながら下りた。M君と私と總數五段の差があったが、これは私の誤りで、同君は態々數へ直してくださった。結局合計292段が正しいのであった。

清令寺とはいうものゝ、先ず普通の住宅の様な建物で、其一端に本堂がついている。第十九世日鑑上人の庵として建立したが、落成に至らぬうちに遷化されたそうなる。前記の通り此寺はめったに人を泊めないそうなる。其本堂は舊姫路城主酒井伯爵の後室顯壽院殿の寄進という。

裏手に美しい風呂場が附屬している。此風呂には以前皇族のどなたかゞ宿泊の時、おはいりになったのと、今の院主が其後入っただけとの事。今夕は特に留守居のN師が心盡しの温浴をつくってくださいましたので、傳説の通りとすれば、俊一は洵に光榮に感激して疲労を休める事ができた。尙おきく所ではラトリンの設備も、特別装置が施してあり、衛生に最も注意がしてあるそうで、最後に其特別装置をき

かされ、何とも申譯のない様な心地がした。

今朝「ミンミンセミ」の長く鳴いたのを聞いた。これは私が今迄数えたうちの最も長く続いたもので
 「24 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 6 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 6 ↓ 7 ↓ 6 ↓ 6 ↓ 124」。つま
 り合計124聲続けた。あの鳴くのを見ていると、随分努力して一生懸命である。あの小さい身体で、あの
 大聲を124もつゞけたら、如何に疲労困憊したろうと、洵に氣の毒になった。先日きいた55聲の二倍強。

7月19日。 金曜日・晴(夕刻雨、極少量)。身延滞在。諸門見學。

昨夕怪しかった天候は幸に持直し、此朝は晴れた。副食物は勿論精進だが、野菜は引きた
 て、新鮮此上なく、美味此上ないが、齒のいゝ(といふよりは寧ろ普通の)人が多數のため、私には少し固
 いのがいはば缺點である。だから「缺」を自由自在に使い、要すれば匙を用いて可然處置し
 た。此日晝食は餛飩であったが、朝夕は獻立次の通り。

朝食

味噌汁(三度豆・馬鈴薯のみ)

胡瓜織切、味噌添

夕食

味噌汁(三度豆・馬鈴薯のみ)

胡瓜織切、二杯酢

いつも大概この程度。参考のため記しておく。

九・〇〇先ず第一に三門をみる。特に階上へ昇って内部を拜觀した。料拱は和様詰組で天
 井は竿縁、須彌壇上におまつりしてゐるのは中央に釋迦一體、左右に十六羅漢だけでは、どう
 も何となく物足りない。昨夜も所用あって自宅へ歸られたM君、此朝九・三〇頃石工を連れ
 て歸來された。よくもコー身體が続くものだ。小生とは丁度20歳の差があるとの事だが、何
 としても羨しい次第である。但し何故に石工を連れて來たか、まさか訊く事もできず、私に
 は今以て疑問である。而も石工は宿泊せず途中(身延鐵道)の驛迄私の知らない間に歸つたそう
 でいつの間にかいなくなった。

三門見學に續て總門を視察、これで午前を終り、午後は疲労したので外出せず、全く休養
 夕刻に及んだ。一七・〇〇頃法主からK尼に贈られたメリケン粉でパンを造つたといつて思
 いがけなくお八つが相當の量、換言すればたっぷり出て來たのは、そろ／＼晝の餛飩で空腹
 を覚えかけた頃とて、甚だうれしく頂戴を致した。腹の蟲も満足したと見え、夕食迄は至極

おとなしくしていた。

夕食後入浴。留守居の野坂是勇氏心盡しの温浴。特に滞在最後の夜だといふのでたて、く
ださったそうだから、喜んで一浴直に就床した。此日は午後少しく曇り驟雨模様、遠雷數回、
雨は三粒許り降り、夫から曇ったまゝ夜に入った。

此山にも「ミンミンゼミ」は少し居る。此日鳴聲をきいたうちの長い二つ。「14 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 6 ↓ 6
↓ 6 ↓ 6 ↓ 6 ↓ 6 || 60」・「18 ↓ 8 ↓ 5 ↓ 5 ↓ 6 ↓ 6 ↓ 6 ↓ 6 ↓ 6 ↓ 6 || 84」後の方の初めから
二つ目の8は、5でやめかけて更に3つ續けたのであった。最初は最も長くつゞけ、夫からあとは大概
5か6。8つは殆んどきかない。

7月20日。

土曜日・晴後曇。身延山發・甲府歸着・三井邸泊。

前夜私は早くねむったので。M君が北方の椽座敷にねた事を知らず、夜中手さぐりで便所
に行くべく試み、妙なところに蚊帳が吊ってあり、すっかり見當が判らなくなって困った。
ところが同君は四・三〇に起きたして外出された。小生は五・〇〇起床。此朝の勤行は特に野

坂君一人入念に取行ひ、小生列席。K尼は専心朝食の準備をなし、六・三〇最後の朝食にか
かる。特に味噌汁はおそろしく美味であった。

朝食をすますなりK尼は取るものも取り敢えず先發歸寺された。あとできいたのでは、小
生が三泊を申出したため、米も一日分不足となり、M君の歸宅も米の補充であったし、尼さ
んの大あわてでの歸寺も、一日延びたので用事の都合に齟齬を來たした爲だと。夫ならまる
で小生が横暴で、甚だ以て怪しからん次第だが、そんな事はまるで知らなかった。知らなか
ったからこそ出來たので、知って居たら、いくらすう／＼しい強健特製心臓を持っていたっ
て出來る筈はない。勝手な事を申出してまるもうけをしたのは小生だけになった。

朝食後M君と共にもう一度寺務所へ行き、清セイキョウ寺宿泊につき便宜を與えられたと聞かされ
た本行坊住職をたづねたら未だ出勤前だと。丁度M君は法主に面會の約ある由につき、併せ
て挨拶を依頼し、小生は主として元經藏であったという多寶塔式の建築を觀察し、下山しよ
うとした時、同君も亦目的を達し、こちらへ來るのに出會い共に下山。清寺座敷で尼さん
のくれた不時用意の代用食を喫し、九・五〇身延終點發のバスにて身延驛迄、一〇・二七の
下り電車に間に合い幸に座席を得、一二・〇五甲府驛着。

M君の話では途中どこかの驛から石工が乗車するかも知れないとあったが、とう／＼乗つて來なかつた。尙お自転車甲府驛の近くのある家に預けてあるからとて、下車して炎天下を随分歩いたが判らず、石工も石工で自転車を預けた家の町名も姓も告げず、同君もきゝもしなかつた。何判っているからとあったが、結局私はある所で畠中の小さい樹陰に長い間立って待っていただけで埒は全然あかず、遂に持前の短氣を起し、徒歩を主張して其通り實行し、炎天下を一二・三五から一三・二七迄、つまり47分を費して三井邸に歸着。随分くたびれたが、此度の旅行は實に満足をした。一五・〇〇食事。美味満腹。失禮ながら記念のため獻立を夕食のと共に書いておく。

晝食

夕食

昆布入吸物

代用食糧鮎

茄子煮付

野菜の身の吸物

生胡瓜おろし(鯉魚かけ)

玉葱・馬鈴薯・人参煮付

罐詰鮎

茄子鹽漬

茄子味噌漬

罐詰鮎

白飯

御飯もあるからとあったが、満腹で辞退した。

(一) 「甲府」は假名でかくと「かふふ」らしい。小生は知らないが驛立札にそうかいてあった。いつか羅馬字反對論者が「芭蕉の上を蝶蝶が飛ぶ」というのを、Haseo no uheo Tehutehu ga tobu とかして判るかと思太を飛ばしたのを讀んだ事があったが、この流義でいくと「甲府」の事を「Kahuhu」と書いて通じると、こちらも尻馬に乗ってもいゝ様な気がする。要するに假名遣い位やっかいなものはない。併しこのやっかいな假名遣いも、改正せられたのによると「甲」は「カフ」をやめて「コウ」となり、「蝶」も「テフ」をやめて「チヨウ」とされたから、これからは最早「かふふ」だの「てふてふ」等はなくなくなった筈。これでやっとな安心ができた。併し俊一にはむつかしくて、未だ十分に呑み込めない。一々其度に子供にきいて書く始末。

(二) 愈よ明後日は午前二時間、東光寺に於いて講演をするので、其案内が主人宛に來ていた。其うちに次の様にあつた。

一日時 七月二十二日(月曜日) 午前九時(時間勵行) より凡そ二時間に亙り

一 會場 甲府市東光寺町 東光寺

一 講演 東光寺佛殿(藥師堂) 室町中期建造物、國寶に就て、其他本縣古建築の二三

一 講師 京都帝國大學名譽教授工學博士天沼俊一先生

とあつたが、又しても名譽教授は誤りで、不名譽教授か非名譽教授か、何れにしても上に一字脱字があ

る。世間では名譽教授と思っている人が今だにあるらしい。いつかある雑誌へそうでないと書いたが、一般に其辯明が行渡ってないと見える。大學により夫々内規が異なるから、いろ／＼のところがあるが、京大では現職の間なまけても勉強しても、結句勤務の最少年限をきめてあるから、其期限以下のもはテナテ最初から問題にならない。私はよく知らないが、何年以上ときめてあるらしい。だから一日不足でも問題なしに除外されるわけである。俊一は最年限としても半年位不足らしいので、ルンペンに轉落したから、こういう工合に間違われているのは、甚だ以て迷惑である。此機會に再び記しておく。よく學位のない人が世間では學位は當然持つて居ると思ひ込み、□□博士とかかかっているのを見るが、夫を御覽になつ時、私と同じ様に迷惑されるのではないかと考えている。

(三) M君滞獨中、ベルリンからナポリへ行き、ナポリからモナコ國經由ベルリン歸着のオートバイ旅行記を夕食の前後に互り朗讀してくださつたが、二・三〇迄き、随分ねむくなり、遂に閉口して謝してねる事にした。乍序同君は滞獨十年、獨文に堪能で *Meine Reise von der Stadt des Bären zur Kautzenstadt (Berlin-Angora)* という一文をものさかっている。

7月21日。

日曜日・晴・速宵。三井邸滞在。新造墓標點検。

九・三〇より石屋へM君と同行、同君設計の五輪塔の蓮瓣の改造をなさしむ。これは同君

よりの特別依頼によつたのである。歸つたら山梨新聞社長(但し)の手紙が届けてあつた。明朝八・三〇迄に新聞社にきたれ、講演場まで自動車の用意あり、という文面であつたが、これは受けぬ事にして斷つて貰つた。小生は少し早く講演場へ行つて建築を一應調べておく必要があるし、新聞社から現場迄車へ乗せて貰つても、三井邸から新聞社迄やはり歩いて行けない。此事は既に鹽田師から17日か18日に電話で斷つて戴いてある筈である。萬一夫が通じていなくても、此日M君甲府迄行き(勿論他の用事があつたので)、態々新聞社と社長の宅とへよつて斷つて來たと歸來話された。これで安心した。

此朝滋野村のY翁から葉書が二枚來たが、發信の日附も郵便局の消印もないので、いつどこから出されたか、或は(まさかと)誰か序にもつてきたのか不明であつたけれども「……白山社の方へも佐野神社の方へも連絡を取りました……」とあつたので大安心をした。夕食の時は私の全く知らない間に三井政善氏を招待してあり、主人と三人晚餐を共にし、洵に楽しく

*名刺に元奈良女子高等師範學校教授・元師範學校校長とあり、其昔俊一が奈良縣技師の時代に丁度奈良女高師の教授をして居られたそうで、俊一は存じ上げなかつたが、先方では知つて居られたそうだ。其後あちこちの師範學校長を歴任、退職後三井邸のつい近くの、三井一家のうちのある邸に假寓して居られるそうで、つい20日に甲府から徒歩敷島村に向う途中、初對面の挨拶をした。此夜はだから二度目であつた。

ゆっくり御馳走になった。主副食物は未だ嘗て見た事のない程の偉大なるベジタブル・オムレット(玉葱)入)。二〇・〇〇解散、直に就床。

7月22日。

月曜日・晴。東光寺に於いて講演・善光寺見學・三井邸滞在。

七・〇七例の式にて出發、七・四〇東光寺着。着してみても驚いたのは會場の設備が全然出來ていない事であった。其上に私は應對をしなかったから知らないが、講演場は今の本堂(これが焼けた残った國寶)前の廣場だと住職がいったとか。M君があきれ顔で私に話されたので、一體これはどうした事か、何か行違ひではないかと思ひ、先以て本堂内に入つてみたところ、所狭き迄に雑物がおいてあり、まるで物置同然の體。あきれ果てゝいるうちに、太鼓を敲き題目を唱へながらK尼來着。そのうちに時刻は漸くたち、追々聽講者が集つて來たので、四五名がゝりて堂内の雑物を片付けだした。勿論俊一も相當にお手傳をしたつもり。住職は全然顔を見せず、我不關焉といった有様。主催者たる圖書館の責任者も來ず、どこの國に講師に會場の設備を手傳はせるところがあるかと、實は頗る不平であつたが、時間勵行とあり、こち

らも其由を前以て申出で、九・〇〇を打つと同時に、聽講者が一人も來なくとも始めますといておいたのに、九・〇〇になつても尙お責任者は來なかつた。併し既に來會された鹽田師を煩わして開會の辭を述べて戴き、直に始めて一〇・五七に、つまり約豫定の時間に終つた。こんな講演は生れて初めてであつた。遂に住職はまるで顔を出さず、自分の住んでゐる寺に國寶があろうと、無かろうと、そんな事には全然無關心。裸體で大あぐらで庫裡にいたそうだ。其不熱心あきれたものなり。

所があとで知つたが、此頃は圖書館に心配事があり、これから先は、どうなるか見當がつかず、館長殿初め一同其心配のために中々一方ならぬ苦勞をしていたので、實は降つて湧いた講演會に盡力する事なんか出來なかつた爲だと。洵に伺つてみれば御尤千萬であつたらしいが、併し夫にしても夫は俊一の知らない事である。時間の勵行位はして戴き度かつた。

講演終了後、關係者から食事の用意があり、自動車が待たしてあるから、直に圖書館迄來てくれとの事であつた。これは勿論拜辭した。夫なら夫で何故前日に一寸知らせてくださいなかつたのか。こちらは左様な事は知らないから、講演後附近の善光寺本堂を見學すべく計

畫をしていたのである。敷島村迄歸るには又M君の車に乗せて貰はなければならない。夫でも同君の食事も用意してあるなら格別、きけば夫はないそうだ。

そうすると若し私が先方の仰しやる通りに、圖書館へ行って食事を戴くとすると、まさか其間M君に待つて戴く事はできない。其上にあとは圖書館から敷島村迄炎天干になって復歩くか、そうでなくばバスの出る時刻を見計らい、附近の停留場から千塚町の角迄行き、夫からたとえ僅かでも知らない途を歩かなければならない。そうして何れにしても善光寺をみるのをやめなければならぬ。而も先方は是非とすすめてくださったが、お受けすれば夫は先方に都合がよろしかろう。併し俊一は迷惑至極だから、どこ迄も辭退し、M君の自轉車で善光寺に赴いた。

善光寺本堂は新しい建築で、大きいばかりで美的價値に乏しいが、鐘樓には正和二年——だと思つたが誤つていたかも知れない——の刻銘ある鐘が吊つてあった。歸途甲府驛により明日の切符を買つておこうと思つたが、夕方滋野驛に着く管の二・四三の汽車は、いつの間にか取止めとなり、ひるま着くためには四・三三のに乗らなければならない事になっていた。だから夫がいやなら一三・四五きりなく、これだと二一・〇〇頃着く。今からだとウナでも

間に合うかどうか判らないので、切符は無制限に賣るそうだから、夫ならゆっくり、午後考えるつもりで、一先ず歸る事にした。

夕刻甲陽圖書館長N氏來訪。一人で思う事をまくしたてた後、サツと引あけて行かれた。随分面白い人の様に思つた。夕食は二一・〇〇頃からであつたし、明朝は主人のすゝめにより四・三三の汽車にきめたので、食後直に就眠した。

7月23日。

火曜・晴。三井邸・滋野村着・山浦邸泊。

隣室の時計が三・〇〇を打つたので直に起床、洗面して荷造をしていたら、未だ荷物はできないかと催促されたので、最早總ての準備ができたのかと思ひ、大急荷物を纏めて渡した。主人は驛迄見送るといつたから、歩く事は助かり其厚意を謝した。然るに用意萬端できたのに辨當だけが出来ず、後れに後れて出發は三・五〇。扱て愈々出かける事になつたが、荷物が無い。これは主人が既に早く驛迄持たしてやってくだされたのであつた。荷物の催促は其爲であつた。今更氣がついても既に遅い。正に美事に陥奔に落入つて臍をかんだが及ばなかつた。奔はひどいと言つたら、實を明せば奔をよけるから黙つていたとの挨拶。ほんやりも此處

迄来れば申分はあるまい。

出發前迄透き通る様に晴れていたのが、いざという時に曇った。出發に際し發車迄あと43分ですと申したら、令聞は夫なら大丈夫と申された。主人は例によりこんな時は黙々として何も言われないから、伺いをたて、みても仕方がない。成程橋迄僅かに十分間。橋を渡り暫く行ったら前方に令弟が重い荷物を肩から掛けて歩いて居るのが見えたが、やがて追越し驛へついた時は四・一五、つまり合せて25分間で着した。そうして馴れているからとて直に切符を買ってくださった。(甲府滋野間小海線經由三等10圓)。自分はあるとから荷物を持って行くから、早く改札口を出て行列をつくれと注意され、重いものは自分で持たない方がいゝに決まっているから、早速其通り實行し、待つ間程なく汽車着。思った程混雑もせず、座席半分を得たので、氣も落つき此上は荷物を待つばかり。やがて窓外よりこゝですかといつてM君がのぞき込んだから、荷物を受取ろうとしたら持って行くという。汽車は大丈夫か知らんと少し心配でなくもなかった。併し直に同君は乗車してきて荷物を下に置き中々下車しない。こゝに於いて同君は小淵澤驛(エ)の分岐點迄見送ってくださる事と想像し、少しばかり恐縮していたら、そうではなくて滋野驛迄の切符を握って居られたのに、あいた口が當分塞がらなかった。又しても

第二の陥穽。穽は幾つでもつくつてある。穽があるのを知らしたら、落ち込むものはないといふ御託宣。一々御尤もである。俊一が如何に少しおめでたい程度の善人だといふ事は、以上穽の挿話だけでも判るだろう。洵になさけない次第である。

小海線というのは甲信の境、甲州にある小淵澤驛から、信州小諸驛を連ねた支線で、途中に「松原湖驛」もあるし、「心臓おばさん」が疎開中の「岩村田驛」(ウ)もある。後者は「イワムラダ」と呼んでいる。驛の立札にもそうかいてあり、あの邊の人は皆濁って發音している。この間迄郡役所もあり、北佐久では殷賑第一市街であったが、近頃は小諸(ウ)が第一になったとの事。心臓おばさんが「イワムラタ」と發音されるのは研究が足りないからだ。小諸驛で1時間25分待ち、漸く下り列車到着、大變な客で辛うじて乗れた。唯一驛の事でこんな苦みをしたので寧ろ小諸から歩いて行った方が樂で且つ早くついた筈である。これはあとで判ったので、此時は氣がつかないでいたから、時間も大分無駄になった上に、苦しみも多かったのである。

滋野驛に下車し、驛員に尋ねればよかったのに、皆出拂っていたからそうしないで前の家できいたが判らず、今度は郵便局できいても判らず、仕方がないので役場できくつもりで

悟をし、ひる日中、20日同様かん／＼照りつけられながら街道を歩いた。扱て愈々役場に向った時、後ろからついて来た人が、「山浦先生のお宅なら、ここを真直に行くと橋がありますから、其橋を渡るとちぎ左手の大きな家です」と教えてくれた。もっと早く教えてくれればいゝのに、先刻途中で人にきいている時から知っていた筈なのに、と暑いものだから、先方では親切に教えてくださったのに、不平をこぼしながら、先づ橋を渡り更にたづねて行った。時に一二・四〇。

此日Y邸迄全部道程にわたりM君は私の重い鞆を持ってくださった。何とも申譯のない次第。上つてゆっくり辨當を開き、少憩の後M君は小諸驛へ出て直に歸るとて辭去された。夫に先だち信州見學の豫定につき改めて

- | | | |
|-----|-------|------------------|
| 第一日 | 7月23日 | 滋野村山浦邸着・泊 |
| 第二日 | 7月24日 | 休養 |
| 第三日 | 7月25日 | 白山社見學・穂波温泉着・泊 |
| 第四日 | 7月26日 | 穂波温泉滞在・佐野神社見學 |
| 第五日 | 7月27日 | 穂波温泉發・滋野村歸着・山浦邸泊 |

第六日 7月28日 休養
第七日 7月29日 山浦邸發・敷島村歸着・三井邸泊。

と定め、29日に歸着する旨申しておいた。此日は大暴風雨乃至天變地異無之限り、小諸驛に出で、七・三三同驛發の汽車に乗る事迄付加えておいたが、どこ迄もおめで度き頭腦の持主なる俊一は、ここにも亦大きな陥穽の掘つてある事を知らなかった。アント・ライオンの挿鉢型の穴は、蟻にとっては大なる脅威であると同様、M君の陥穽は一度踏み込んだが最後、腕けば腕くほど、アスファルトの池に陥ち込んだ地質時代の動物同様、自滅するのは唯時の問題である。此最後の穽こそ29日朝になる迄は全然知らなかったが、此時Y翁から聞かされて、「そうだったのですか」は、どこ迄おめでたく出来ているのか我乍ら見當がつかない。いくらお人よしでも程度がある筈なのに。

M君は一四・〇〇頃辭去されたので、あとは久々にてY翁と心置きなく雑談。夕食の副食物の一に川魚の焼いたのがあった。私は先年大門村の故兒玉三郎さんのお宅で一夜御厄介になった時、初めてみた長さ一尺に餘る偉大なるイワナに亞ぐ上に、まる／＼と太った肉附のいゝ、見るからに食欲をそゝる魚。此方面に殆んど素人で、やはりイワナだと思つたらそう

ではなくて子持のハヤ、今年は變調で少し季節が後れたから、夫で今頃子持のが食膳に上るのだそう。

7月24日。

水曜日・昼後晴。山浦邸滞在・休養。

豫て主人との間に打合せができていたのが、午前舊知鷹野(信州勇猛團副團長)遠藤兩氏來訪、四人卓を圍みて快談時の移るを知らず、小縣教育會より神科村山口産水蜜桃を贈られ、一同にて早速御厚志を頂戴した。一〇・三〇所用ありとて兩氏去る。

晝食後主人は切符買ひ旁外出され、俊一は晝寝。明朝は四・〇〇滋野驛發、白山社見學の後、下高井郡穗波村穗波温泉宿泊に決定、總て主人同行してくださる由、遠藤氏は所用のため同行せられないが、鷹野翁は一緒に行くといつて居られた。夕刻松本氏來訪。先年コヅナに就いていろ／＼お世話になったお禮を申すことができたのは幸であった。時間切迫とあつて夕食半ばにして退去されたが、明日は萬障繰合はして、十中九分迄は行くつもりだとの事。主人も是非とすゝめて居られたから、ことよつたら、昭和16年以前の勇猛團の一部、即小勇猛團が出現するかも知れない。そうなるのとたとえ人數は少なくとも、團長と副團長が行か

れるのだから、正に古今未曾有の豪華團となる筈で、この小旅行が如何に楽しいものかを想像し、少なくとも明日だけは天氣晴朗で驟雨雷鳴もない事を祈りつゝ、二一・三〇就眠した。

此日は主人からいろ／＼の話を承った。

(一) 主人の名「政」は「タダス」とよむのだそう。(成程そう承つて歸宅後字引をあけてみたら、小生の持つてある安物でも「ただす(正)」とあつた)。前日途中で、「此邊にヤマウラ・セイと仰しやる方のお宅はありませんか」ときいたら、先方は「女の方ですか」と反問した。考えてみればセイでは女と間違るかも知れない。主人の話にそれでは判りにくい。此附近では「タダスサマノウチ」といつてきけば直に知れるとあつた。小諸方面から行けば右側、滋野驛方面から行けば左側の邸宅で、直に判るのに、何故近所で知らないのかと思つたら、きゝ様がいけなかつたのであつた。

(二) ハヤは千曲川でとれるので、川下から上る、長野邊から上流が漁場となる。初めに上る魚は大形で、後になる程小さくなる。放卵するところを付場という。其「付場」に群をなし來るのを網で掬い捕るのだが、百貫位捕れる時がある。焼いておけば賞分はもつが、一週間位で味が變るから、成るべく早くたべる方がよしい。氣候の加減で此頃(7月下旬)でも子持がある。

(三) 【成蟲樓隨筆】 佛岩寶篋印塔の記事中のY翁、柳澤平助氏、既に八十歳に達せられ、健康を保持せられて居られるのはまことにめでたい極みだが、27日即私の休養日に山浦邸迄おいでくださる由を

承った。但し此頃は散髪屋迄もめつたに下らない（翁の邸は上手にある）から、27日午前中に行かなければ中止した事と承知せよとの事だそう。幸にして來訪せられん事を熱望する次第である。これは一日のび、28日が休業日だから、何卒28日という事を柳澤翁え申出る手續をするという事に決まった。是非久々で面謁の榮を得度く、28日天気晴朗で、翁の御健康に異状のない様に念願をした。

7月25日。

木曜日・曇後好晴。滋野驛發・白山社參拜・穂波温泉着・穂波浦泊。

一・〇〇起床、三・二〇出發、四・〇〇滋野驛發、超満員にて辛くも乗車し得た。篠ノ井驛(イ)で漸く座席を得、豊野(飯山鐵道)下車、驛待合で朝食の握飯をたべる事ができた。九・〇三桑名川驛(ア)着徒歩約20分で神職宮本昌次氏宅着。尤も飯山驛(ア)位から漸く見學希望者が加わったもの、如く、桑名川驛下車の時は相當の人数に達し、又驛頭には村長月岡行雄氏

*昭和17年鐵道省發行『鐵道七十年記念時刻表』第189頁所載、飯山鐵道線豊野十日町間十六驛名を記してあるうちに「桑名川驛」なし、但し桑名川附近に野澤温泉というのがあるそうだから、或は其頃は其名で呼んでいたかも知れない。併し昭和18年末に山浦さんが行つてくださった時は既に桑名川といっていたのか。何れにしても昭和21年7月25日には、正に桑名川驛は存在したのは確かである。

も、此日特に御多忙なるにも係らず特に來られ、其他を併せて可なりの人員が神職宅へ行進を續けたのであった。俊一は「お暑い時に遠路を洵におつかれで御座いましょう」と言われ、一層汗が出た上に大分擦れた。こちらこそ誰にも頼まれたのではなし、勝手に出て來て皆様に一方ならぬ御迷惑をかけているのだから。

暫く休憩して一〇・〇〇我々の一行數名だけ、神職案内の下に先ず山を登り、社殿(ア)に參拜し墓股の寫生をするつもりが、光線不十分でよく見えず。又社殿の平面は前方が廣く後方が狭くて梯形をなせるもの、如く、「縫破風」の下端にも鱗を刻んであるのは、破風の「鏝」にも或は鯨頭が刻してあったもの、如くと考えられなくもない。興味はつきないが、いつ迄も見ていてもきりがなし、其上に一・〇〇即私が上つてから正味1時間の後に一同上る様にいっておいたものだから、そろそろ集合して来たので、一・一五より45分間正に一・二〇〇迄大體の話をして下山、桑名川國民學校に於いて更に話をつゞけ、宮本氏方にて一行約20名晝食の饗應に預り、私共は辨當を持參していたに係らず、多大の御心配をかけて了った。神職は、たとえ夫れが幾分外交上の辭令を含んでいたにせよ、「保有米とジャガ芋ならありますから、どうか十分召し上ってください」と。凡そ今時羨しい家もあるものだ、つくづく感

心させられた。此食事に當り、祝酒を差上度いが、酒はありませんから、配給の焼酎で御辛抱を願いますとて、無色透明の液體を猪口についでくれた。俊一は何しろ初物なのであるから、試みに恐る／＼舌端をつけて見たら、ひり／＼と麻痺したので驚いてやめて了った。生れて初めて焼酎の猛性に驚かされた。

豫期しない講演料は教育會の名で戴いた。金額は知らないが其儘そっくり社殿保存費の一部として神社へ寄進申上げた。私共は晝食の用意はあったにも係らず、一行へ御心配をかけたのに恐縮したから、一同からという事にして差出したところ、先方では心よく受納してくだされたが、私一人の寄進として挨拶を述べられたのは、愈よ恐縮して了った。

一六・〇五桑名川發豐野方面行のが終列車というので、適當の時退去、飯山驛下車、徒歩(乗物なし)長野電鐵の信濃田中驛に出で、一八・〇八發の電車で中野驛(はイ)乗換、此驛で此日長野縣廳に於ける會議に列席のM₅君に迎えられ、一九・〇〇少し前終點湯田中驛(はイ)着。同君に誘導せられ穂波温泉の穂波館に入り、直に一浴を試みた。内湯はなく、下駄をはいて外の湯に入りに行くのだから、原始的で少しやっかいである。

M₅君には随分久々で出あった。中々の元氣で、目下此土地の國民學校へ奉職して居られる

由、この宿もすべて同君の斡旋と、明日參拜する豫定の佐野神社氏子總代三氏の賛同とで決まったとか。浴後被招待者二名(Y翁と小生)と主人側四名(M₅君と總代三氏)と、計六人の小宴で、大に歡迎してくださったのは有難かったが、内一人は例の無色透明の狂水の亂飲で臨時性腦神經麻痺症に罹り、あたりかまわず大聲を發し、小生は可なり弱ったが、夫でも二一・〇〇頃幸にして終了、撤宴の上一同退去。續て新に來訪者二名あったが、ねむくてたまらないから、Y翁によりしくお願いして先に失禮をした。

皆様の特別の御厚志により、昭和18年10月以降、一度でいゝから參拜し度く思っていた桑名川の白山社々殿は、正に今月今日、幸に希望を達し得た。洵に有難い次第であった。併しながら慾を言えばゆくりと見學が致したかった。朝は二・〇〇に起き、ともかくもやって來たのだから、つかれている。時間も限られている。先方としては御尤も千萬とは拜祭したが、此際「お話し」等は許して戴き度かった。夫から夜の宴會等も、ほんとうはやめて戴き度かった。何しろつかれているのだから。夜二一・〇〇すぎの來訪者にはすまなかつたが、お先に失禮したのも亦、止むを得ず正當防衛に出たのである。何卒御海容が願ひ度い。

後日の參考のため書き残しておくが、交通費左の通り(單位圓)。

八・〇〇 汽車賃 滋野驛より桑名川驛迄3等
 〇・六〇 汽車賃 桑名川飯山兩驛間 3等
 一・五〇 電車賃 信野田中驛より湯田中驛迄
 六・六〇 電車賃 湯田中驛より滋野驛迄

7月26日。

金曜日・曇後晴。穂波温泉滞在・佐野神社参拜・興隆寺見學。

四・三〇入浴。此位早いと大して浴客もなく割合にすいていて、湯をはねかされる心配も少ない。朝食は割合に早かったが、味噌汁一杯に紫色の海苔八枚、どうもおかすが不足で少し困ったが、併し御飯だけは不思議に十分井に入っていた。九・〇〇宿から約五町位の佐野神社へ参拜、参加の勇猛團員に概話の上、附近の興隆寺に参詣して本尊拜觀。此時追々参集した關係の人々(主として教員)に須彌壇の話をした。是非何かと所望されたから。

終つて間もなく淨光寺薬師堂(下高井郡都佳村)のH住職来訪、本堂の一部で面會したところ、明日歸りがけに立寄る様に勸告された。出發前頼淵のT君から、應永15年の墨書銘が出た事も承知して居り、現場主任のK君は先年播磨の一乗寺修理工事の際、俊一は何度も出かけて行つていろ／＼御迷惑をかけ、お世話になつたまゝだから、此機會にお目にかゝつてお禮も

申し度く、尙おH師は、電鐵停留場なる都住驛(ツグミ)から僅か20分の距離だと言われたので見學致し度くなり、Y翁と相談してお邪魔致す事にきめた。

晝食のため歸宿。一三・四五再度神社参拜。此度は集合の人々のため、主催者の申出により講演の眞似事を致して歸宿入浴休憩。Y翁の舊知S未亡人より贈られた十個の雞卵のうち半數を譲られたので、夕食は玉子飯の豪華版。宿屋の副食物はたとえ胡瓜揉に味噌汁一杯でも、そんなものは尻目にかけて落つき拂つて、最後の一粒迄腹中に納めて泰然自若としていた。夜M君来訪、自分は教員の傍百姓をして、初めてつくつた米だといって紙包を出された。俊一は洵にうれしく頂戴した。どうでも勝手に處分してくださいと申されたが、夫では京都迄もつて歸り、家族一同と共に御厚志を戴きますとお答えをした。これは後の話したが、帰宅して量つたら正に白米一升であった。

此日は一日随分疲労したが、有意義に暮した事に満足した。二一・〇〇頃はどういうものか軽い眩暈らしく、頭がフラ／＼して困つたから、M君の辭去を待つてお先に床へ入った。

*昭和21年12月19日から、突然眩暈になやまされ、翌22年1月3日迄殆んど臥床、其後は當分ねたり起きたり、めつたにない病氣に取りつかれた。高血壓になやんだが、其原因はこんな時から萌していたのかも知れない。

(昭和22年1月6日記)

やはり暑い上につかれたのが多少の原因をなしたのかも知れない。

7月27日。

土曜日・晴。穂波温泉。栗師堂見學・澁野村歸着・山浦邸泊。

四・三〇起床したが、頭の工合は治っていた。併し此朝は入浴を見合せた。講演のお禮はしない代りに宿料はこちらでもつ事にきめたとM君の申出に服従したから、どうもお世話になりました位のことで、どの位皆様に御迷惑をかけたか、何も知らずに出發し、湯田中驛即ち終點から八・一〇の電車に乗り都住驛下車。相不變最大最強最健のY翁とM君は、颯々爽々として徒歩、俊一は驛迄來てくださったH師の自轉車の荷物臺の上に、代表的ライブ・ロードとしてこれ亦負けず劣らず英姿颯爽として跨り、九・〇三寺着休憩。一〇・〇〇より石段91を昇り修理事務所へ出かけた。

庫裏の椽から下りたと同時に蚊蝶科の蝶一疋眼前の石へ靜止した。見ると珍らしや「スミナガシ」。明治29年の夏だから正味50年前になるが、武藏國八王寺町(今の八王寺市)方面へ昆蟲採集旅行をした時、初めて一疋を得て随分喜んだこの方のことだから、何とかして捕えたく思い、K君の帽子を借りてうまく伏せ、針でさして安心をして出かけた。集っていた村長さん校長

さん等は不思議な顔をして見て居られた。併しこっちは「私の内職でございます」といった様な顔をしてすましていたが、内心はうれしかった。

應永15年の墨書は、巻料等の含みのそこにかいてある。繪もあつたり、いろ／＼で數も多い。一二・〇〇から一二・四五迄、住職の希望斷りきれず、事務所に於いて何か喋らされた。客殿に於いて晝食を饗應され、一四・〇〇より再び事務所へ行き、更に堂礎石上に刻した柱心を示せる細線を見、辭して再びH師の自轉車で驛迄送られた。他の人々は徒歩で間に合わず、途中から駈歩で驛着、間髪を容れず辛くも發車に間に合ったが、僅か數分のこと長野驛着前の小事故のため高崎行の汽車に乗れず、一七・二七長野驛發上田行のに乗った。此汽車の込んだ事は驚くばかりで、起點にも係らず、停車しないうちから窓よりの有様俊一はY翁に荷物を入れて載せて漸く一席を得たが、窓は開閉ができません、いくら暑くとも如何とも致し難く、困りながらもともかく上田驛に着いた。驛前のY翁の知人の家の店に休憩、俊一は先ず茶を乞うて渴を醫し、蕃茄・林檎等の接待に預り、一九・五一(20分延着)の汽車にて滋野驛下車、二一・〇五山浦邸歸着、入浴、二二・〇二夕食を終り、二二・一五就眠。此朝穂波館から貰つて來た握飯は、腐敗の虞があるのと空腹を覺えたので、汽車中で全部腹中

へ納めてしまった。

(一) 前夜N氏來訪の節、飯山名物「イナゴ」の佃煮を戴いた。とても其まゝでは問題にならないので、宿で粉にして貰って、朝食にかけてたべたら、甚だ美味であった。「イナゴ」だと言わなければ何だか判らない。晝食にも寺で戴いた飯にフリカケて食べた。汽車中握飯をたべた時もつけた。今年は6月末から7月初にかけて蠶蛹の佃煮を粉にして食べたが、どうも昆蟲をたべる様な運命になるとは思わなかった。

「イナゴ」の後肢は、私にはとても口中では如何ともしがたい。Y翁の話では、自分もあの肢はまるごとでは因る。あれは粉にして味噌に交ぜて食べるのが普通で「イナゴミソ」といってよく食べたものだであった。そうきくと、聞いただけで大變うまそうである。

(二)、淨光寺薬師堂修理事務所は天下一景色がよく又清潔である。高地の凸角に在って見晴しは此上なく廣くていゝし、又土足で上らせないから、清潔の點に於いても申分がない。秋にでもなつたらさぞ氣持がよかるう。こうと知つたら一泊を申出たのに、惜しい事をした。

7月28日。

日曜日・晴。山浦邸滞在・柳澤翁來訪。休業。

六・〇〇起床、九・三〇柳澤平助翁八十歳の老軀を提けての御來訪。洵に感謝に耐えない。一四・三〇迄5時間にわたり溫容に接する事ができた。喘息の持病があるから寒くなると困ると仰しかったが、お見受したところではそんな様子は少しも見えず、記憶力等も少しも減退の様もなく、Y翁のお話はやはり讀書されたり原稿を書かれたり、そういふ事をしておいでになるとの事。御羨しき限りである。たゞお歸りになるのは總て爪先上りで、多少御困難がありそうだし、萬一のことがあるといけないからとてY翁は御子息の一人をつけて送らせたと、十分に責任を果して歸って來られた。柳澤翁も定めて心から喜ばれた事である。いつに變らぬY翁の柳澤翁に對する心づくし、一昔半前諏訪郡大門村佛岩寶篋印塔見學の際に示された細心の注意を、そのまゝ再び繰返されたのであった【正編】二一・一三〇。

明朝出發につき、今夕は俊一好物の萩の餅をつくるといつてくださった。夕食は恰も前夜輕井澤行の汽車で上田驛を發車した時刻、まるで態とした様であったが、全く偶然一九・五一に始まった。大型小豆のもの四、小型黄粉のもの二が主食であった。小豆を豊富につけたものが珍らしく、全部綺麗に頂戴してしまつた。副食物中葎の吸物は非常に香高く、朝鮮の山寺を泊り歩いたころの食膳を思い出す事ができた。而もお代り迄十分に戴いた。

7月29日。

月曜日・晴。山浦邸發・小諸驛より乗車・小海線經由・龍王驛下車・敷島村三井邸歸着・迄。

四・三〇起床。朝食も亦荻の餅、五・四〇長期の滞在を謝し、自轉車に荷物をつけ私も乗り、つまりライブ・ロードとデッド・ロードを積んだまゝ、Y翁が引張って小諸驛に向つた。何ほ何でもこれでは罰が當りそうだから、全力を盡して辭退したが、Y翁にかかつては驚に睨まれた小鳥以上で、下手に反對しようものなら、片手につかまれて腰掛の上に抛り上げられ、細引かなんかでぐる／＼巻にせられて、夫こそ文字通り手も足も出なくなる事、火をみるより明らかである。俊一生來愚鈍と雖も、これ位の事なら判らなくもない。だから至極從順に命に従い、車の上で四方の景色を眺めながら、安樂に小諸驛迄連れて行って戴いた。費した時間正に59分、つまり六・四四であつた。切符は行列して僅か3分間で求められた。乗降場へ出たが小海線の汽車は中々來らず、随分長く待つた後漸く着、小淵澤方面より五輛連結で來たのに、三輛に減じてから客をのせ、七・三七發。Y翁は中込驛迄見送ってくださいました。御厚志有難い事であつた。

實はM君が去る25日山浦邸を辭する時、私を迎に來る旨Y翁に言いおいて行かれた由、朝

小諸驛に向う途中初めて承り、さては第三の筈の深く且つ大きいのに、今更の様に驚歎した。これとても俊一の様な單純な頭の所有者には考えられない事だと思つたが、Y老は多分前夜來着されると考へて、態と夕食を晩くしたのに音沙汰がなかつたので、ことによつたら此朝小諸驛に居られるかも知れないという事であつた。然るに此驛にも見えないものだから、中込驛迄來てください、午後はどうしても上田市迄行かなければならないからとて、こゝでお分れた。ところが汽車が海尻驛に着いて停車中、知らないうちに私の席の傍で「お迎えに來ました」との聲がしたので、見たらM君が満面に笑を含んで立って居られた。中込驛でY翁と別れてから海尻驛でM君に出合う迄、時間にすれば1時間足らず、行程にして^{23.4}の約六里、此間だけが一人であつただけ、實にどこ迄人に迷惑をかけるのか、考へる迄もなく空おそろしい次第である。

小海線の汽車は約五分後れて小淵澤へ着いたが、本線の新宿行も少し後れたので、幸にうまく連絡し、車内に於いても一席を得、一一・四四龍王驛下車直に三井邸歸着。無事信州旅行を終了する事ができた上に、十二分の効果をおさめ得たのであつたのは、全く皆様の特別な御厚志の資であつた。二一・〇〇就眠。主人は夕刻外出したきり、歸宅の時刻は知らな

かった。

此日午後休養中、M君所蔵の旅行記「Max Kirsch, Von Berlin nach Ispahan (Verlag von K. F. Koehler, Berlin u Leipzig, 1927)」を見た。面白そうな本であった。挿圖も珍。

7月30日。

火曜日・雨後晴。休養。

此日は常説寺へ行く豫定であったが、早朝雨十粒ばかり降り直に歇む。併し空は一面に曇っていた。三井令閨の話に昨夜主人歸宅しなかったが、今朝は必ず歸ると思うとの事に、常説寺へは雨天なら詣らない筈故、決して急ぎませんと申しておいた。所が間もなく齊木翁來訪。何故この様に早く見えたのかと思つたが、別にたづねる必要もないから黙っていたら、奥さんから主人は今歸つたと知らせがあつた。これは想像だが、昨夜主人は齊木方へ一泊せられ、リヤ・カアへかせて老人を連れて來られたのであらう。やがて朝食となつた。翁と私と二人でたべ、主人は別室で家族と一緒にしかつた。そのうち復雨となり、また歇み天候不定。常説寺へは主人が他の用事かねて行つてくださる事になり、翁と私とは家にいた。主人曰く、今朝は人数が少ないので、米飯不足だが、後刻即席雜煮をつくと。扱て其雜

煮なるものが適當の時に出了が、餅が非常に軟かで様子が大分變つていたから、罐詰かと思つたら、そうではなくて携帶粉末に湯を注ぎ練ればできる由、軍隊で用うるものだとのであつた。いつの間にか消失した主人はひる頃歸宅され、K尼は雨天故今日は私が行かないと、きめて檀家巡りに出かけたのを呼び戻し、お太子様をきいたら、返してくれないで自分で持つて行くと言われたそうだ。どうも話が少し變で、何かそこには懸引めいた事が伏在するのではないかと思わざるを得なかつた。

終日降つたり歇んだり、齊木翁も終日滞在種々雑談、風あり割合に涼しく單衣一枚では肌寒し。夕食には「カボチャのホウトウ」なるものが出た。餛飩とポーブラとが主で、茄子も馬鈴薯も人参も刻み込まれ、味噌汁で十分煮てあつた。非常に美味なものでいくらでも食べられた。餛飩食としては第一の御馳走で、たとえば遠方から子供等が歸省でもした時、幸にポーブラでもあれば、今日はあの子が歸つたから「カボチャのホウトウ」でもつくらう、という様な次第だと、齊木翁が説明してくださつた。

然らば「ホウトウ」とはどんな字をかきますか、と伺つてみたが、どなたもサアと許りで御存知がない。不圖思ひついて辭書を拜借して引いてみたら「ハクタクの音便」とあつた。

そこで今度は「ハクタク」を引いたら「餛飩」とあり、餛飩の粉を固めた食物という解説がついていた。「ハクタク」が「ホウトウ」となったのは頗るむづかしい。Hard Rolled Paperが「ハトロン」紙と訛った程度に、他國者には全然見當がつかない。併し何といっても私にとってには美味此上もないものである。

二〇・三〇就床。雨は可なり降っていた。齊木翁は今夜宿泊された。何の目的で來訪されたのか判らないが、起きて洗面をしてから、食事をしようとして先づ茶を飲んでいたら、英俊が迎に來たと仰しゃった。終日閑談に費した。

「カボチャノホウトウ」は前にも夕食の時戴いたと思うが、誰もそんな説明をしてくださらなかったら、たゞ餛飩はこうすると随分うまい位に思つて食べていたのである。ところが、詳細に判つてみると、今迄餛飩が安價であつた時分に、知つていたらよかつたのに、まことに、惜しいことをした。此日以後大概一日おきに「ホウトウ」を戴くことができた。

7月31日。

水曜日・三井邸滞在・墓標點檢・立本寺本堂見學。

此朝は天氣も持直したらしく且つ涼しかった。七・五〇より石屋へ行つてみたが、五輪塔

一基完成していた。此石塔の臺座の反花が、室町時代のとすれば、平がカラスミで隅が玉子でもいゝが、鎌倉だとこれではよくない。だからやかましくいって敲き直させて鎌倉式反花に近からしめた。大體これでよろしいという見當がついたから、そうして此朝鹽田師も石屋へ來られたから、同師の案内で中巨摩郡池田村大字金竹、というむづかしいが、三井邸のある敷島村長塚と隣り合せの、日蓮宗立本寺(エ)へ行つてみた。これは古いと思うからは非觀てくれといふ話があつたから。

夫は如何にも古い事は確かで、室町時代の建造に係つていふと思われたが、縦横無盡に手が入つて居り、まことになさない有様にしてあつた。併し入つた正面外陣の所は注目に値している。肝心の外觀は椽を全部取去り、屋根もかえたものだから、形がとれないで何とも不恰好なものが出來上つていた。いつ迄いても限りはなし、一二・三〇に歸る事にした。同行の人々は三井政善氏他三氏に、主人と齊木翁と小生を加えて合せて六人、大きな食卓を圍んで偉大なるハム・オムレツを主なる副食物に、快談のうちに愉快なる會食が行はれた。食事がすんでも話はすまず、夫から夫と果しがない。

一六・〇〇になつて昨日から滞在の齊木翁と政善氏と去り、續て主人は今から甲府驛迄行

き、汽車の時刻を調べて来るが、明日はとても出発はむづかしいから、一層明後日に延期しでは如何、そうして他に用事もあるから、自身が送って行くつもりとの事であった。考える迄もなく、これは豫ての計畫らしく、K尼も未だ来ないところを見ると、どうも昨日話し合つて来たらしい。とにかく小生は手も足も出ないから、總て任かせた。つまり延期もするし、送っても戴く事にした。客は全部退去、主人も甲府市へ行かれ、小生獨り残りいろいろの書物を手當り次第讀んだ。

夕食は晝食の賑ひに引かえて單獨で、代用食の餛飩に味噌汁をかけて十分に戴いた。終つて二〇・三〇、主人は未だ歸來せず、K尼は遂に來訪なくつまり嘘で、待つていた方が間抜けと相場がきまつたらしい。私かに考うるに、こんな小刀細工をしないで、もっと卒直に打明けてくださればいゝのと思つた。食後睡魔連りに襲來、仍て臥床す。

昭和21年8月1日。

木曜日・晴。三井邸滞在・松尾神社参拜。

天候恢復、朝爽快。日のさし方は氣のせいが際立つて秋めいて來た。七・三〇K尼入來、曰く昨夕使者常説寺へ來り、「お太子さんの護符を渡してくれ、天沼は31日夜か8月1日朝

出發するから、同人の手許へ届ける」という意味の口上を述べたから、然らばいつ持參するかと反問したところ、今夜か明朝との答えに、自分は疑問を起し、そんな風なら今夜出發しない事は確かだから、明朝自身持參して手渡するといつて斷つたそうだ。眼から鼻へぬける様な男勝りの利口な尼さんとの談判は、相當にむづかしい筈で、直に馬脚をあらわさざるを得ない。夫にしても話が多少混亂している様だが、今更夫はどうでもよろしい。とにかく袋も新しくなり、無事に直接に入手したので安心ができた。そうして汽車中の用意にとて、進駐軍の米利堅粉(變な言葉だが)で造つたパンを持參された。

主人も其席に居られたので、懇談の結果二日間延期にきめた。つまり明二日は雨天でも常説寺へ行き一泊、三日歸來一泊、四日にたつ。理由は三日は土曜日故、翌日の日曜を控えて多分汽車は込むだろう。四日はたしかに稍や緩和の見込がある。夫に歸りにどの線を選ぶかも決めてないし、切符も買ってないそうだから。主人昨夕甲府驛で調べたところによると、此頃は各管内で勝手な時刻をかえたりするから、一度照會しないと確答しかねる。現に7月23日滋野方面行の時、取消しになっていた一一・四三甲府發の本線下り列車は、數日前に復活した様なわけだから、という様な次第で、延期しても大して不都合ではないと推定ができ

たので左様きめた。

朝は割合に涼しかったのに、やはり日中は相當なものだ。此日は松尾神社(つい近所で此村の氏神。式内郷社)へ参拜の豫定をしたが、ゆっくりして一六・四〇に出かけた。森があり、少しく曇り太陽も雲にかくれ、よく判らなかつたが、社殿は少なくとも桃山と推定し得た。或は室町末位迄はあるかも知れない。地方色も可なりで、いる様で、田舎式のところもあるにはあるが一寸面白い。明後三日は成るべく早いうちに再び見學を豫期し、一七・二五歸宿、早速鹽田師宛端書をかいたが、主人は食事もせず一七・四五から、甲府驛へ返事をきゝに行かれ、葉書は信立寺へ持参するといつて持つて行かれた。

夕食は今夜もまた獨り、一昨日名稱を覚え、美味を忘れる事のできない「カボチャのホウトウ」に麩の煮付の主副食物は珍らしかつた。二〇・三〇就眠。少しく曇り出したので、明日の天氣が多少心配でなくもない。

8月2日。

金曜日・晴後雨。三井邸發・常設寺行・泊。

朝好晴有望につき七・四〇千塚町停車場より天神森行のバスにのるつもり所、少し後れ

八・二五終點着。こゝから甲府方面へは九・〇〇か一三・三〇しかないとの事に、直に引返して常設尼寺へ行つたが、此分にては一泊の要なしとの話も出た、併し相談の結果、豫定通り一泊の事にし、暫く雑談中天候漸く悪化を初め、遂に驟雨に始り本降りとなり、たとえ歸れと言われても少し無理と思われだした。午後興の寸法を測り寫生をしたり、雨のため輿格納庫の敷地も檢分不能、夕刻ほんの僅か小降りの機を見て一通り實地をみた位の事であつた。

午後本堂に出張中の醫師より強力メタボリン2ccの注射を受く、先日同様K尼の厚意に出ず。此日は昨年佛印方面にて戦死した某師の一周忌に當るさうで、本尊前机左方に其上人の塔婆、左方には小生の爲に挿圖の様な塔婆をたて、禮拜供養をしてくださいました。夕刻敷地檢分の際、二基の塔婆は弟子の手により墓地の入口に樹てられた。こんな事は初めてなので、

記念のために特にこゝに記し、K尼の厚志を永久に感謝する事にした。

一四・〇〇入浴、ゆつ

くり休養。晝の主食は久

常設寺本堂に於ける塔婆の一 右表、左裏、長三尺寸餘

昭和二十一年八月二日

常設寺本堂に於ける塔婆の一

爲 聖徳太子御菩提曾遺骸養之也
以餘産功徳天沼安光様代建也

經云 我此土安穩 昭和三十二年八月二日天沼博士御歸洛途中安養
天人常充滿

し振りでベタード・ライス(但し人參の織切入)。夕食は餛飩一式、初めは冷麥、あとから餛飩、副食物はポーブラの煮付が主で、M君が自宅から持参した疑が濃厚なキング・ブランドの鮭の罐詰の肉が副えてあった。

二〇・三〇就床したが、蚊帳が一人吊りのためM君と俊一と上半身だけ入り、下半身は薄物をかけて蚊を防ぐ設備をした。涼しかったのと、蚊が少なかったのとで、これで十分目的を達し得た。右は決して常説寺の悪口を記したのではない。將來此寺が吉澤村チツサカどころではない、山梨縣、否日本に於ける有數な大尼寺となった時、其昔昭和年間住持であった第四十二世梶山智孝尼は、常説寺中興の祖と仰がれているが、同尼入寺の際は懷中餘す所僅に金□□錢、其後數年にして客人用蚊帳は三疊吊一帳といった有様であった。夫が今は此通り、まるで嘘としか思われない。という工合に後住は勿論、一般の大衆を感奮興起せしむる一資料たらしめんが爲に他ならないのである。夫は其頃實見した馬鹿正直な、もっと卒直に言えば天保錢的頭腦の所有者が、少しの飾氣もなく見た通り書いているのだから、これに嘘や誤りは絶対にない。

8月3日。

土曜日・晴、常説尼寺發、敷島村歸着・三井邸泊。

五・〇〇起床、甲府行一番バスは櫻橋を六・四〇に出るが、これには一般の客は乗せないけれども、そこはK尼の顔で寺の客は問題外との事。千塚町下車三井邸に入る、暫く休憩の後主人とK尼と俊一と松尾神社へ参拜、政善氏も参加せられた。一一・〇〇歸宿、間もなく鹽田師來訪。一四・三〇のバスで歸るとの事に、食事を終り直に松尾神社社殿に就いて大體の話をした。今日はこれで同じ話を三度した。ところが村役場から助役さんと社寺係とが來訪して、また神社の話をきく度いとあり、結局同じ様な事を四度話して相當に疲勞をした。此日の午後になって愈よ7日か8日に歸る事にきまった。これは先日來主人が少し無理をしたので、足部に神経痛を覺えたから、數日休養の必要があるのが主原因という事であった。そこで少し早い目に第一報として「七ヒカ八ヒキタクノヨテイ」という電報を打つ事にした。此電報明日K尼が甲府から打ってくださいる事になり、料金と共に頼みしておいた。夕食後直にねる。時に二〇・五〇なり。

此日鹽田師來訪するなり、短刀直入、立本寺本堂は應永以前に溯らせ得ないか、と質問されたので、

小生は吉野時代迄は、様式上むづかしからうから、元久等は到底無理であろうと答へた。鹽田師は再び日蓮宗では護摩を焚かない。夫だのに元は護摩堂であつたとすると、應永以後では工合がわるい。然らば日蓮改宗前護摩堂であつた確證はと反問したら、遺憾ながらないが、ただ記録にそうあるだけとの事。然らば俊一は様式上、室町中期より上らせるのは賛成致さぬ旨返事をした。天井裏でも調べて棟札でも出ればいゝがさもなくばはつきりした事は中々判らないだろう。M君は後に元護摩堂が建つていた所へ改宗して立本寺本堂を建てたとすればよからうといった。そうすれば話の辻褄だけは合う。

8月4日。

日曜日・晴。三井邸滞在・休養。

昨夜は8時間熟睡ができたから、多分疲れもとれるだろう。此日は三井一家墓参の日だそうだが、主人は足痛との理由で在宅。小生も終日全然外出せず、7月12日以来ほんとうの休養は此日初めてであった。午後二時間許りひるねをした。

8月5日。

月曜日・好晴。三井邸滞在・松尾神社参拜。

此朝の晴れかたは特別で、正に一點の雲なく、四方の山々は皆よく見えていた。四方が山

で取囲まれているから、ハルンの謂はゆる「The day is clear blue to the end of the world……」とは言えないが、若し海なら正にそういった有様。主人の足痛は治ったのか、切符購入と寫眞師K君宅へよるといって出かけた。俊一はもう一度松尾神社へ行く事にして、其通り實行した。大略式で單衣の着流しに下駄ばき。時間はゆっくり歩いて正に6分。せいぐ1時間位と思つていたのに、一二・〇〇迄かゝつた。主人は同じ姓の親戚の家の若い人を助手によこしてくれたので、梯子を借りて貰ひ、正面向拜料間の鹿入墓股(透彫で菊か梶の葉と一對の鹿入)の寫生をした。

朝早く出かけた主人は夕刻歸宅、出發は明後日早朝で、甲府驛より新宿行の汽車にのり、其夜東京泊り其翌日早朝大阪行の汽車(五・二五 東京驛發)で同夕刻(一八・一二)京都驛着にきめた。そうしないと、とても席は得られないという。賃金合計東京經由3等で42圓との事。こう決まれば其旨明朝(6日)家へ打電すれば、8日の夕刻迄には間に合う筈である。明朝はK君が寫眞をとりに来るとの事である。何れも初耳なり。二一・〇〇就床。

8月6日。

火曜日・晴後雨。三井邸滞在・慈徳院行・松尾神社行・天候恢復再び晴。

主人の案内にて敷島村大字島上條、慈徳院へ墓標を見に行く。途中「八ヒ一八・二二チャク」ヒトリエキヘタノム」と打電した。料金^{2.50}。慈徳院には古五輪が一基ある。此に就いての傳説は、甲斐源氏武田治部少輔信時の三男一條三郎幸鷹の墓標で、「若宮八幡の塔」と呼び、永和3年9月15日歿との事。様式上鎌倉末位はありそうで、笠を除き他は揃っていると思われる。笠も同時代らしいが、たゞ他の部分と揃っていない疑がある。

道祖神の廟が少しばかり面白いので、寫生しているうちに雨が降りだした。傘は持たず、雨は可なり強くなつたから急歩して、一〇・三〇迄にお宮へ行くつもり所、餘り雨がひどいのでよらずに歸った。主人は十分許りあとから歸宅され、直にお宮に行っているK君を迎えに行き、一層午後から出直す事にきめたが、其留守中雨は益々劇しくなつた。

晝食後天氣が晴れてきたので、三人一緒にお宮へ行き、一五・〇〇歸宅。主人の要求で記念寫眞二枚をとり、夫から主人はK君と共に立本寺へ行つたが私はやめた。夕食には最後の饅頭が出た。

8月7日。

水曜日・晴。敷島村三井邸發。甲府驛より乗車・東京經由・歸途に就く。

三・〇〇に眼をさまし四・三〇起る。此朝は如何にして驛へ行くのかと思つていたが、主人は相不變落付いたもの、悠々閑々、落付拂つて準備をすゝめ、自轉車二臺を用意し、一臺には荷物を着けて令弟をして驛に向い先發させ、一臺は主人操縦し、荷物臺には小生が跨り、五・三七出發、僅か15分にて荷物の車と同時に驛着。幸に座席は得られ、立川驛で直線電車へ乗換え、武藏小金井驛下車、荷物はないので徒歩多磨墓地へ墓標見學に行く。徒歩約30分で着した。M君が天氣がよかつたら案内をするとて、前日からの約を履行されたのである。

多磨墓地は横の門、即電車停留場に近い門から入った。先ず第一に變挺な背の高い十字形の平面を持った屏風に脚をつけた様なものがたつていたのが眼についたが、やはりあれは塔の一種であろうか。夫から奥の方へ進んでいったが、甚だ失禮ながらどれもこれも劣作ばかりで石工任せの拙いもの。よくもあんな形で皆満足しているかとあきれ果てたが、遂に東京都で有名な富豪の墓地へ行き當つた。

石質は何だか知らないけれども、何か黒味を帯びた様な石を水磨きにし、あらゆる石塔の種類、五輪塔・寶篋印塔・十三重塔等を刻んだのはいゝが、格好等全然なつて居らず、どこもこゝも乾枯て居り、まるで水氣はなく、細部にろくな形は一つとして見出されず、殊に笠

の軒反りから相輪にかけては、氣のどくで見居られぬ。總評としてはできるだけ金をかけて、出来るだけ拙い塔を並べ、こんなものを造るものではないと、大衆に警告している様なものである。主義も主張も統一もまるであつたものではなかつた。

代表的大富豪の墓がこれでは仕方がないから、正門の方へ歩を運んだから、入つたところにまたもや不思議な塔があつた。一體此墓地は日本のか外國のかを疑わしめる様な、正にありかえりな型式の塔——夫でもこれは確かに塔と見えるだけいゝかも知れない——があつた。而もおそろしく大きい。設計者は誰か知らないが、こうなると設計者も設計者だが、建てさせる者も建てさせる者で、どっちもどっちだと言ひ度い。日本の墓地には、こういうところへは石の層塔、例えば十三重石塔といった様な種類のものが、こんな不思議な日本というよりは、寧ろ外國のできそくなりなりの化物の様な塔より、どの位適當で且つ周圍の風物と調和がとれる位の考えをもっている人が、この墓地設計の際、關係者の中に一人位いてもいゝのではなかつたらうか。餘りひどいので何ともなさけなくなつた。正面の門だつて大分ベタ臭い。もう少し日本式要素を取入れたものが、なぜできなかったのだらうか。

其正門を入れて左手の、少し奥まつたところに、今度はとても偉大なる石燈籠が建つてい

た。どうも未だできてからさう間がないせいか、おちつかない點もある様なのは致し方がないとして、其莫大なる上に、恰好の物足らない事批評の限りでない。併し寄贈した人は、日本一の大石燈籠を建設した事を、石材商は日本一の大石材(夫には各部分共實に大きい)を切出して運搬の上、無滞加工して建てた事を、設計者は日本一の大石燈籠、古今未曾有の大きさのものを設計し、名を揚げた事を、何れも満足に思っているだらうが、石燈籠に限らず、總て大きいばかりが能でないのはいふ迄もない。山高きが故に貴からず、石燈籠莫大なるが故に美術上模範たり得ず、金を出して實に馬鹿氣たものを造つたものだ。これも亦、設計者も設計者だが、建てる許可を與えた當局も當局である。あれだけ東京都で有名な富豪なら、本人には判らないとしても、誰かに相談すればいゝのに、あきれたものだ。あんな馬鹿々々しい圖體ばかり大きな石燈籠は、敲き壊して澤庵石にした方が餘程よからう。

要するに「正門内廣場中央の塔」と、「此石燈籠」と、「あの有名な富豪の墓地に於ける不統一な拙劣なる石塔」とは、多磨墓地に於ける國辱の「三幅對」である。もう少し皆の衆はかゝる小石造建築に關心をもつべきであらう。俊一に遠慮なく言わせれば、多磨墓地にろくなものは一つもない。

武藏小金井驛に戻り、更に省線に乗ついで代々木驛下車、M君の親戚だというY氏邸で休憩、二三・一〇退去、再び省線に乗りつき東京驛に向つた。

8月8日。

木曜日・不定。東京驛發・京都驛歸着・歸宅。

東京驛へ着いたのは既に8月8日の〇・一五だった。驛内に無料宿泊所もあり、荷物の一時預所もある。早朝大阪行の第一列車に座席を得たくば、前夜から驛で待つ必要があるそうだ。勿論1・2等は此限りではあるまいが、3等客はどうしてもそうしなければ駄目だ。實は小生東海道を東京・京都間普通而も3等で旅行するのは初めてであるが、ルンペンに成り下つた今日此頃、2等や急行等は思いもよらない。其爲に前夜から詰めかけて荷物を一時預けとし、無料宿泊所なるものへ入つた。

取締は中々やかましく、乗車券がなければ入れない。荷物は預けようと預けまいと勝手だが、不安だから預けて入つてみたが、ああ、何と心細いところだろうか。私は其詳細を記すことは控える。とにかく昭和21年8月8日〇・三〇から昭和21年8月8日三・三五迄ごろねをした。そうして一時預けの荷物を受取り、四・〇〇大阪行の汽車へのつた。

汽車は乗降場に横付にしてあった。但しどこにも燈火は一つもついていない。夏だから東の方は薄明るいし、寒くもないから平氣だったが、冬であつたらこんな藝當はとても出来ない。勿論改札口は通行自由だし、殆んど誰もつて来ない。100人乗の客車に多いので10人位、どこでも座席のとり次第。ところが漸く東方が白むに連れ、追々人も増し、省線が一番で来た人は何れも席はなかった。

魔法瓶をもつか、驚くべき高價の飲料水の瓶詰でも携帯しなければ、車内では一日中飲物の入手困難を見なければならぬ。私もM君も窓際に座席を占めていたが、只一度ある驛で停車した際、丁度窓の下に水道の水栓が見えた。發車間際に幸に驛手一名窓下を通行したので晝辨當に用いた罐詰のとおいた空罐を出し、其内へ水道の水を一ぱい入れるべく頼んだところ、親切にゆすいで水を一ぱい入れてくれた。うれしかったのは永久に忘れない。

かくて途中幸に無事、40分後れ一九・〇二京都驛着、改札口迄M君は私の重い鞆を持ってくださったが、風滴が迎に来てくれたので、こゝでM君の一方ならぬ厚志を謝し、無事歸宅する事ができた。かくて近頃(昭和16年最後の)ない30泊31日の、私にとっての大旅行は正に終了したのであった。

(昭和21年9月5日起稿
昭和21年9月14日稿了)

建築及び工藝

今回一ヶ月にわたる旅行で、各種の建築を観察し、得る所多大であった。例により左に記しておくが、既に國寶に指定されたか、又は其上に修理済のもの等は略記し、未だ一般に知られていないものは、幾分詳細に記載しておく事にした。其順序は私の観た通り、つまり別項旅行記の通りにしておいた。

一金櫻神社

山梨縣中巨摩郡宮本村大字御嶽

(1) 東宮本殿 樓門を入った突き當りにある。方三間一間向拜附。「諸種の繪様皆吉野時代頃の特質をあらはせり」とある。正面は三間共出入口で、何でも棧唐戸を吊込んであるが、これは推定復原の様に思われた。柱上部に椽があるので、そんな所から暗示を得たか、椽拱

等總て和様であるのに、扉だけをそうしたのは、古いのが残っていなかった限り、少し無理らしい。

向拜柱には唐戸面をとり、椽勾欄寶珠は胴に二節あり、形割合によろし、内陣柱は比較的太く、内部の繫虹梁には唐様式の袖切あり。内陣鏡天井、方一間、正面上吹寄菱格子、外陣化粧屋根裏。中の間料拱詰組、左右脇間は間料束。

(2) 中宮本殿 三間社流造、向拜料拱間蓋股。此蓋股は脚内の彫刻中央の分「牡丹」、左右は「蓮唐草」。蓮の分は其葉三枚を皿の様な形となし、中心飾に其一枚を置き左右は蕾を配し、更に其左右に葉を一枚つつ並べ、其外側に便化蕾を入れ、空隙は莖を唐草の様に充たしてある。脚内彫刻總て極彩色、珍らしい意匠の蓋股である。他の木部は赤。

以上二建築、如何に夫れが國寶であるとしても、東宮は約800年、中宮は750年を經過し、其形式も夫々「入母屋流拜造」、「切破風流造」だの勝手な事をいっているのはよくない。

(ハ) 本殿 現在の本殿は拜殿・幣殿・本殿より成る。拜殿は今年から364年前、淺野幸長の建立という。大分手が入っているが、それ位のところもある。幣殿と本殿とは新しい。脇障子上の柱に巻きついている龍の彫刻は、左甚五郎作だといつてあの邊では有名だが、ただ夫だけのもの。

(ニ) 太鼓堂 東宮本殿に向い、向拜の前に立つて右を向くとある。靈山寺鐘樓〔續成龜模隨筆〕（一九三頁、七〇―七三頁）の様に、半分は高く半分は低い地所に建っている。併しあれ程地所に差はないから、なんだこればかりと思うだけのこと。建立年月未詳だそうだが、今のは家康の建造で、維新前には鐘樓であつたという。袴腰附、料枳和様詰組三手先、隅木は地唐様で飛簷和様、枳草入母屋造。桃山時代の様式をもつた比較的優秀なる建築。注目に値す。

(ホ) 三柱社 東宮の左側に並び立つ一間社流造の社殿に覆屋が架けてあるが、覆屋は享保七年建立とか書いてある。これは新しくて駄目だが、社殿の方は中々よろしい。向拜面取方柱。向拜柱上三料和様、木鼻は獅子で左右異なり、頭貫上中央は枇杷の彫刻を入れた慕股。

身延山久遠寺全景

寺務所

客殿

納骨堂

佛殿

納骨堂

礼堂

鐘樓
眞骨堂

祖師堂

本師堂



繪端書複寫

本柱圓柱、上「出三科」頭貫の木鼻と同様のものを繋虹梁に添えてある。正面料栱間牡丹入墓股。勾欄擬寶珠は胴に二節を有し、桃山頃のものとしては形極めてよろし。妻飾「豕扱首」イノコサス「支輪」あり。此建築も亦桃山時代であろう。

其他此境内にある諸建築に就いては、記載を見合わせておく。

二 身延山久遠寺 (八)

山梨縣南巨摩郡身延町

(1) 總門 二身延山の建築は何れも明治で、皆新しいときいていたのに、先ず第一に入った總門が、高麗門コウライモンで相當の年代をへていると見えたので、きいてみたら寛文5年建立との事、三浦安次が母の菩提のため、其年建立寄進したと。棧瓦葺で感心しないが、これで本瓦葺だと中々よからう。袖塀は新補。

(口) 三 門 創建寛永19年というから、夫があれば國寶の價値はあるかも知れない。現

在のものは明治40年の再建だそうで、非常に大きい、たゞ大きいだけでなさない非美術的建築。五間三戸入母屋造棧瓦葺の樓門、左右に山廊があり、上層に昇れる様にしてある事、禪宗寺院の三門と同様だが、下層虹梁上の「大瓶束」は虹梁より出て居ない。つまり「結綿」はなく上についている。虹梁の「袖切」のところは浪に千鳥を彫ったり、餘計な事をしていゝ。隅木は和様で、内部天井は鏡にしてあるが、山廊内部と上層内部天井は「竿縁」だから、どうも似合はない。上層中央には釋迦佛(脇侍なし)、左右には16羅漢8體つゝを安置す。どういふ次第か料栱は詰組だが、肘木は和様にしてある。

尙ほ妻飾「虹梁大瓶束」はいゝが、拙い「二重懸魚」が下がって居り、樽の口は思い切り飛び出して、そうして「箕甲」が平たいから、何といつても恰好頗る不満足、其上大棟がいつの時か大風に吹き飛ばされた儘になっているから、外觀は一層いけない。

(ハ) 法界堂 祖廟の傍にある。これも随分後補の個所があるが、先づ第一に氣のつくのは方柱面取で料栱は「舟肘木」。桁にも椀にも皆面が取つてある事である。柱面見付 0.55 一邊 6.3 其割約 1/11.5。これなら桃山と考えてよからう。「疎極木舞裏」、正面三間側面四間。内部外陣

に圓柱をたつ。其後方は一段高くし、唐様勾欄を巡らしているが、料束の圓いのが目立つ。其上部柱間にある墓股は、脚内の彫刻「浪に兎」で、これも亦桃山は確からしい。其後方は更に一段高くし、須彌壇の様にしてあるが、其羽目板の蓮唐草は、古いと見て差支ない様である。これで屋根が「檜皮葺」だといゝのに、何か銅板かそんなもので包み、妙な風にしてしまったので、惜しい事に大分見劣りがする。

(ニ) 祖廟 石築の面取單層八角塔で、相輪を上ぐ、相輪細く且つ短きに失するもの如く、どうも大して感心ができない。誰人の設計かあちこちで尋ねたが誰も知らない見え、とうとう判らずに終つた。とにかく全體としても、忌憚なく批評すれば、乍遺憾氣に入らない。

(ホ) 祖廟前の石橋 橋其物は丈夫で結構だが、勾欄の唐様(?) 親柱は、磯巾着が觸手をひろけた如く、どうもこれも意に満たない。

(へ) 山上伽藍の高麗門 コウライモン 大門を入ると、正面にとても大變な石段がある。夫を上らずに右手の斜面をゆっくり上ると高麗門がある。總門と同じ形だが、細部に雲泥の差がある事に誰でも氣がつくであろう。なさない門もあればあるもの。

(ト) 本山事務所と客殿 前記高麗門を入ると、左手に袴腰附ハカマコシツキの小鐘樓がある。其前を素通りをすると、右手に入母屋妻入のとても莫大な棧瓦葺の建築があり、其向って左手に客殿が續いている。尤も客殿には正面に別に唐破風附の車寄がついているが、何れも多大の金錢を投じて大きなものを造ったと、たゞ感心させられるだけ。

(チ) 新書院と奥書院 前者は單に新しい邸宅建築というだけのもの。後者は法主の居間及び應接間に當てられて居り、古建築だそうである。長押の釘隠に龜の飾金具を用いているのは、餘り他で見ない。

(リ) 佛殿納牌堂 客殿と直角に建つ入母屋造單層の大建築で、昭和7年竣成。其左右に方

三間寶形造ホウケイゾウ二重の位牌堂があり、廊を以て連絡しているから、平面及び立面としては、左右相稱で洵に堂々たるもの。向拜三間、珍らしく屋根本瓦葺だから遠景は非常によろしい。併し氣のどくながら細部は何とも申様がない。内部例えば脇壇等、面取角柱オモトリカクバシラを用い料枳イヒチキは大料枳木だから、そうして極彩色仕上で調和していない。内外陣の格天井も感心できない。

(ヌ) 眞骨堂 佛殿に竝んで眞骨堂がある。外部白壁八角堂で、内陣も亦八角、極彩色仕上内部の柱は金箔塗。内部に十四羅漢を安置し、中央に多寶塔型の廚子あり、上下料枳イヒチキ三手先、料枳間蓋股。内陣折上小組格天井。

眞骨堂前方に禮堂がある。此も亦古建築ではないが、私に言わせると、此高地に建てる諸堂内、最も興味のあるものである。簡單に記すと方三間だが、内陣柱四本の上部は、挿肘木を用いてある所は、正に「天竺様」の取扱としてあり、大虹梁の上部中央は料枳正に「唐様」であり、更に柱間によっては脚間に彫刻入の和様蓋股を入れてある。よくこれだけに造ったものだ。いつ誰がやったか知らないが、立派に三様式を巧に取扱っている。

(ル) 祖師堂 眞骨堂の隣は祖師堂でとても大建築。屋根は丁字形をなし、長野の善光寺の本堂と同様、入母屋妻入で、其後方に左右に妻を向けた屋根が交叉している。善光堂本堂程長くないから、全形としては初瀬寺本堂に似ている様に見える。そうして妻の大虹梁の中央に鬼形がのっているところは、焼失前の浅草寺本堂(浅草の観音様)を拙くした様であり、正面の向拜も混雑していて、どういふつもりか桁隠に桐唐草を用いている。

柱間の大きさは知らないが、とにかく正面は7間側面は12間あるから、七間十二面單層入母屋造棧瓦葺、正面軒唐破風附向拜あり、正面木階七級。周圍に木椽を圍らし、擬寶附昇勾欄及び縁勾欄を回らす」といった形。そうして内部も亦洵に美しく、金色燦爛として人目を眩惑している。奥の突き當りは框により一段高くして、中央に須彌壇があり、壇上には料拱三手先、屋根の鼻が龍の彫刻より成れる厨子をおき、其内に日蓮の座像を安置す。厨子の左右に三體つゝ並べる六僧の座像は、何れも故高村光雲氏の高弟の作品だそうで、さすがに藝術的價値は高い。

獨逸で出版された「世界の驚異」と題する繪入の美しい書物がある。そのうちに久遠寺の説明中、

Inneres des Buddhistentempels auf dem Minoburg, ganz mit Goldlack überzogen; die von der Decke hängenden reichgeschmückten Glocken haben dem Welt von einer Million Mark.

とあったり、また

Die Wände und Pfeiler sind ganz mit köstlichen japanischen Lack—schwarz und rot—beleidet, der reichgeschmückte Hochalter ist vergoldet und zeigt ein lebensgroßes Bildnis des Nischen in schöner Ausführung.

等とあるのは、此堂に就いての記事であろうが、異人さんは勿論、日本人でも在家出家を問はず、總て光彩陸離でさえあれば、形等はどうでもいゝのだから困ったものである。

(ヲ) 本師堂 其次即最右端が本師堂。これは釋迦堂ときいていたが、いつか位置も變へたし、又其後方へ土藏造の堂を建て、其内部へ厨子様のものを造り、佛具等を置いて洵に美しく飾つてある。この本尊は宗祖在世當時、草庵安置の釋迦を安置したそうだが、拜觀を致さなかつたので、従つて私は此記事に就いて敬意を表しておく。

(7)

經藏と寶物館 本師堂と直角に、遙か客殿に對し、向つて右に經藏、左に寶物館が建っている。前者は「多寶塔」型で、下層は土藏造、正面に出入口があり、現在は他の目的に使用しているが、經藏として建てたという。軒裏も漆喰塗で椀なし、隅木は和様、屋根は椀瓦葺で「稚子棟」なし、正面兩開の土藏式扉を吊る。左右側面は「角柄窓」の形を漆喰にて塗り出し、裏面は盲壁。

上層は圓柱十二本をたて、柱間全部白壁。上下層境の饅頭形上の勾欄は和様、上層料拱四手先で同じく和様。扇柱にしてあるが、尾極も隅木は唐様、「蛇腹支輪」を用い、屋根は銅板葺。相輪上部の寶珠及び軒先の巴文のみ鍍金。要するに和唐折衷というよりは寧ろまぜこぜの建築といった方が適評かも知れない。併し全體として白と赤で塗つてあるから、はっきりして割合によろしい。普通の多寶塔を見馴れている眼には、大分變つて見え、相當面白い建築である。故に細部をもう少し研究したら、遙かにいゝものができるだろう。

此多寶塔に並んでいる寶物館なるものは、今締切にしてあるから、何が入れてあるか知らないが、どうも外から見た所は、何とも不思議な建物で、東洋風の様でもあり、そうでもない様でもあり、どうも目障りになつていけない。窓の形でも變えたらもう少しは何とかなる

かも知れない。

(カ) 大鐘樓 其向い、つまりどちらが正面か私には判らなかつたが、位置は寶物館の前、本師堂に向つてゐる様である。

以上、ともかくも山上の建築を一通り記した。其配置は佛殿から本師堂迄、主要なる建築は南面し、夫等と直角に東方に於いては事務所と客殿とが西面し、西方に於いては經藏と寶物館が東面し、更に南方に大鐘樓が北面してゐるものゝ如くである。斯く方形に配置されていたのは、能登の妙成寺がそうであつた。他は知らないが、日蓮宗の大本山のひと總本山との建築の配置が、何れも三方又は四方を周つて、中心に空地を残す様になつてゐるのでみると、或はこういうやり方もあるのかも知れない。將來——私は未だこの寺しか知らないから——機會があつたら、もっと他の大本山も見學致し度く考へてゐる。

私は幸に久遠寺へ參詣し、伽藍の配置を見學し大に満足ができた。洵に有難い次第と喜びに耐えない。私は其建築物に就いて、無遠慮に批評をしたが、これは研究者のため、多少の参考になるかと思つたからで、悪口が目的でないの言う迄もない。熱望してゐた身延參詣

をお世話してくださったK尼とM君、見學に便宜を與えられた法主日圓院下を初め、諸堂を御案内くださった方々に厚く御禮を申上げる。

御禮は申上げますが、最後に少し憎まれ口も序に申上げます。これは敢て敵意を挿んでの故ではありません。全くあの立派な大建築を建てるに當り、何故に大工任せにして、美術上價値の少ないものを以て満足していらっしゃるのですか。私共からみると不思議でたまらないのです。一寸専門家に御相談なされば、まさかあんなものはできなかったでしょう。同額の金、或は何割か減額ができて、そうしてどの位いゝものができましたか、とても比較にはなりませんのであります。

單に極彩色で塗ってあって、美しくさえあれば、夫でいゝと萬一皆様が思召していらっしゃるならば夫は間違です。夫は皆様が全く建築に就いてお判りにならないから、大工棟梁の引いて來た圖を見ても、批判がおできにならないため、彼等の言いなり次第にさせたのでしよう。だからこそ金をかけてつまらないものができたのです。明治復興の際なら致し方がありません。最近になつても尙おどうも價値の少ないものをお造りになつて、夫で満足していらっしゃる御氣持が私には判りません。

そんな事をいつたつて、我々には判らないではないか、と仰っしゃるかも知れませんが、そうなら尙更専門家に御相談になつて意見をおきゝになつたら如何でしょうか。

餘計な事を申して棟梁には憎まれるし、皆様にも局外者は黙つて引込んでいろと、お叱りを蒙るのは覺悟しています。併し拙いものは拙いので致し方がありません。皆様のうちせめてお一人位はそういう方面にお氣づきになつて、將來新築をなさる場合には、東京都に立派な第一流の専門家が大概いらっしゃるのですから、一寸御相談になさる様豫め御勸告申上げておきます。決して御損をなさる氣遣は御座いません。

實際此お寺位名高くて大きくて、そうして堂々たる大建築が軒を並べ藁を連ね、參詣人は絡繹として四時絶えなところはそう多くありますまい、と同時に此お寺位拙い大建築が揃つているところは先ずありませんまい。洵にお氣のどくと申上げるほかありません。

奥の院及び七面山の建築に就いては、參らなかつたから一つも見えていないので、何も述べる事ができません。

三 白山社社殿(九—二)

長野縣下内郡岡山村大字桑名川

社殿建築に就いては【續成蟲樓隨筆】の「鯨五種」と題する記事中に可なり詳細に掲げたが、今夏幸に親しく見學し得たし、且つ豫々きいていた應永年間の棟札も、できるだけ注意して寫して來たから、参考のため夫を掲げておく。併し何としても古くて割合に文字も小さく消えかけていたし、元來此種のもを讀むのは最も不得手だから、恐らく間違だらけだろ

一 長野縣下内郡岡山村大字桑名川 白山社棟札

昭和三年七月二十五日

九月十五日



皇風永扇 掬領式部大夫入道沙弥道辨 大工右衛門大夫入道沙弥道安 小工左衛門大夫入道沙弥道安
 敬 白山大權現御廟奉建立維時應永六卯八月十二日 權大工大夫三郎朝盛 衛門三郎
 神德彌明 願主四郎左衛門丞 藤原 經吉 陶治大工平野助七 又太郎

う。何卒讀者諸君御覽になった際、誤りを指示して戴ければ有難い幸である。

此棟札の存在は、恐らくT君が以前に見て居られなかったら、どこかへ亡くなってしまったかも知れない。亡くならない迄も誰も氣がつかなかったかも知れない。というのは、同君から自分が約20年前、行った時應永の棟札を寫したが、どこかへしまいなくしたという通信があった爲、何とかして見度いと思つてY翁へお願いし、Y翁から神職へ申送つて戴いて漸く目的を達し得たのであった。何でも此棟札は神社にはなく、神職がどこか他から探してくださつたと承つた。少し疵があり、左下が缺損して、多分そこに小工の名が二人位書いてあつたろうのが、判らなくなったのは惜しいが、大した問題はない。夫から先方にある寫しには、右側の「……式部大光入道沙彌道辨」とあるのが、夫は「……道辨」らしく、同行のY翁にもみて戴き、どうもそうらしいとの事で、そうしておいたのである。

右の他拜殿造立の棟札が二枚ある。拜殿というのは現在の様に覆屋に過ぎないか、或は別に社殿の前に建築したものか知らないが、文字は左の通りであつた。

拜殿奉造立

延寶六 戊午 南呂吉日

社家織部

願主四郎左衛門尉

藤原

經吉宮本氏元祖也

ところが此は一行であったか、「願主」以下が別行に書いてあったか、或は裏面に記してあったか、たゞ手帳へ寫しておいただけで、今になっては判らなくなつて了つた。洵に申譯のない次第である。もう一枚のは此時より少し後の寛延ので、これは長さ1.835、上幅.275、下幅.220、厚.020、新しいのを上を山形にしてない。文字は一行に

敬
白 白山大権現拜殿奉造立 寛延三歲 南呂吉日

午 社家伊豫守

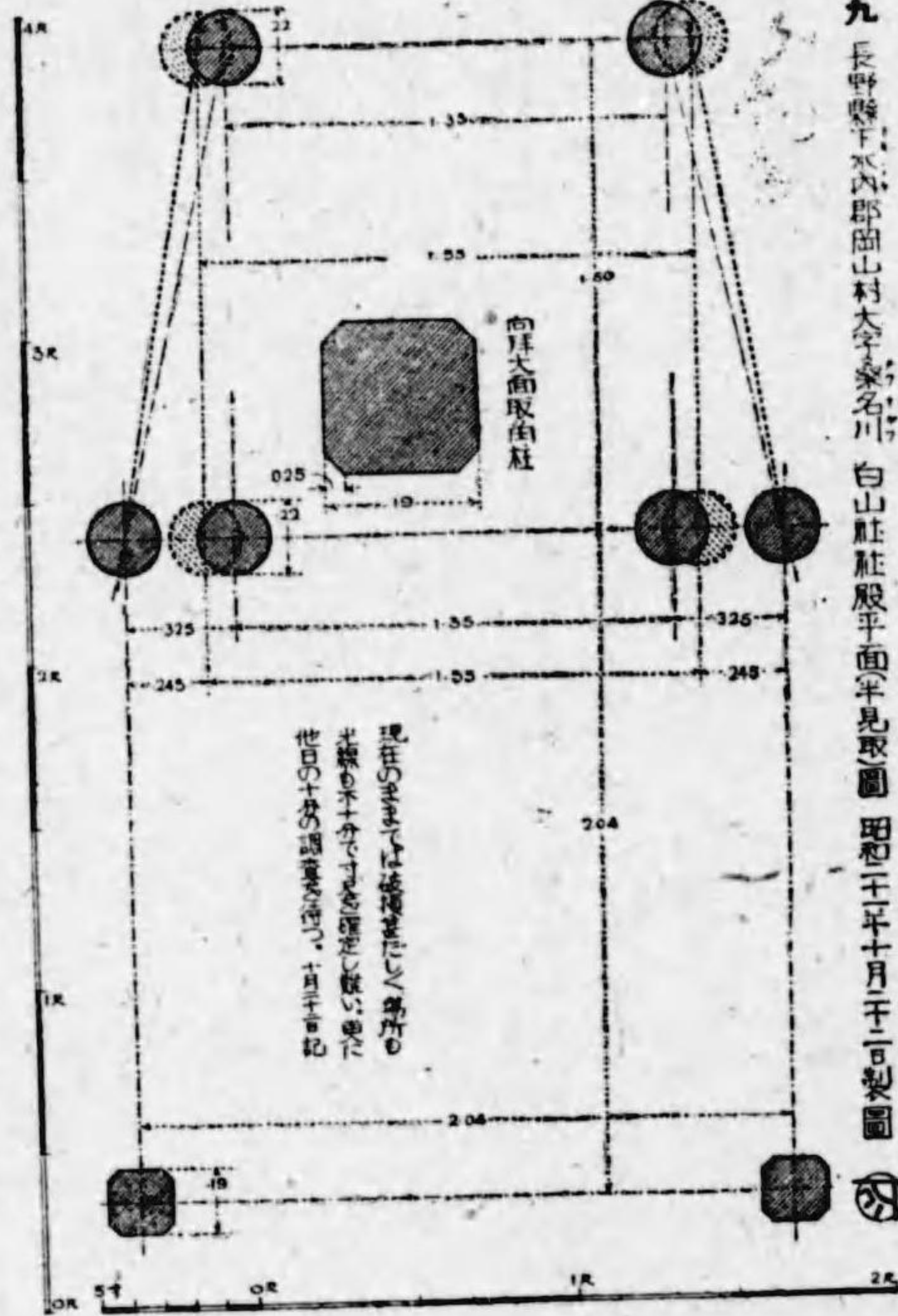
とある。干支割書の「庚午」の「庚」の字が、とても讀めない様な書き方がしてある。

以上三種の棟札のうち、申す迄もなく應永のが最も價値が高い。此存在は洵に有難いのである。

次に其社殿の平面が梯形をなしているものゝ如くであった事が珍らしい。薄暗いところで視力の鈍いものには、とても物差の目が見えないので、私が物差の一端を持ち、夫を大體圓柱（直徑僅に2寸2分、其中心と思はれる邊を）の中心と思われる邊へあてがい、反對側にいた人（横から定めるのは可なりやつかいであつた）の中心と思はれる邊へあてがい、反對側にいた人

から目盛を讀んで貰つたら後面柱眞々1.55、側面1.52で正面は2.04、此正面の*2.04は、Y翁から送つて戴いた材料にもそうあつたから、これは確かだと思ふ。正面には柱が四本たつてゐる（九）。

九 長野縣下内郡山田村大字桑名川 白山社殿平面見取圖 昭和十一年十月二十日製圖



中に二本と兩端に一本づつとであるが、其眞々を全部測つておけばよかつたのに、向つて右端と其次との眞々を測つて貰つただけでやめておいた。これが失敗の元であつた。其距離は0.33との事だつたから兩端の柱の距離を2.04とすると、中間の柱

*【續成蟲樓隨筆】第二〇一頁参照。同頁註記*の分に「何かの書き誤りか」としたのは取消す。書き誤りではなく正に二・〇四ある。

(即ち正面兩開板扉)は1.38となる。此で少しも差支はないが、若し0.33は0.23の読み違い——0.1も誤る事は有得ないと思うけれども——であったとすると、中央の柱の間隔は2.04—(2×0.23)＝1.58となり、僅に0.03の差だから、これは建物の歪に原因するとして、簡単に解決できると考えられる。

併しどうも此儘ですましておくのもいやだったが、丁度幸い9月27日に法隆寺に於いてY翁に面會の機があったから、柱間の寸法に就いて、同翁の野帳の寫しを送って戴く様にお願いをしておいたところ、10月9日附(滋野局10月10日消印)10月13日着で知らせてくださった。夫によると、「自分は後面は測れなかつた(實際とても測定はできないといつてもいい位で、(筆者)ので、出来るだけとつた寸法で製圖をしてみた)ら柱と柱との間が約0.26となり、夫を差引くと中柱の間隔は1.52となる。従つて1.55との差は0.03となるが、自身正面扉兩脇の柱真々を測つたのでは1.35故、隅柱との距は0.345になり、俊一のたづねた0.33より0.015だけ増す。君が人に讀んで貰つた後面の寸尺1.55と、自身で正面扉兩脇の柱の間隔を測つた1.35とでは、そこに0.20の差があるから、或は後面の柱間は兩方に0.10づつひろがったとも思えようが、夫では平面が矩形にならない。そんな建築があるかないか判らないから別紙を送る」とて詳しい寸法入の圖が封入してあった。

何れにしても現在の位置で實測は勞多くして效少なしである。明るいところへ持出して、ゆっくり時をかけて測らなければいくらやっても無駄であろう。而もY翁の圖には本殿の奥行が1.50とあるから(私は平面正方形と速断して測らなかつた)、これが正しいとすると、初めから正方形ではないのである。九で向拜柱の位置は動かないらしいが、本殿の柱のうち正面兩隅の圓柱も確かとして、あとの四本、即正面扉兩脇の分と本殿後方の分とが、どうも位置が少し怪しいと思うが、Y翁の測られた正面扉兩脇の柱の真々の1.35を正しいとすると、柱の位置は斜線(實線、左下か)を施した様になり、また1.55とすると、左上から右下に向つて斜線(柱輪郭と)を以て現わした位置となる。

斯る曖昧の平面圖は役に立たないから、一層ない方がいゝかも知れないが、次の事だけ判る。即ともかくも本殿が梯形で向拜が方形、全體としては六角形の珍らしい社殿。たとえ小規模と雖も形式としては先人未發後人の追隨を許さない建築である。そうして正面はいわゆる隅木入春日造、而も「地隅木」は唐様、「飛簷隅木」は和様の取扱がしてある。

随分ひどくなつていて、實際釋尊寺の例の厨子とどちかという位、當局は一日も早く調

*長野縣小縣郡大久保村、布引山、釋尊寺觀音堂内陣にある鎌倉時代に屬すと認められる厨子を指す。

査をして國寶に指定の上、斯道の大家に修理を依頼して、十分に保護を加え悔を千載に残さぬ様に御高配が願ひ度い。其うちに調査するでは間に合わない。
墓股は無惨に破損していて、復原は不要にできかねるから、最初の意氣込に反し、試みずにおくが、中央の牡丹は金箔置、葉と莖とは緑青塗の事だけは確からしい。だから饒術と牡丹とは少なくとも最初金色であつたらう。そうして木葉等も恐らく金箔を用いてあつたものと思つてよろしい様である。

最後に當局へもう一度重ねて御注意申上げます。早速御調査の上何とか御高配が願ひ度いのです。國寶が駄目なら差向き重美でもよろしいです。

四 佐野神社殿（一一一）

長野縣下高井郡穂波村大字佐野

一間社流造、正面一間向拜は角柱を用いてゐるが、大面取あり、其柱間の虹梁も特殊（例え、崎宮樓門のそれのような形）であり、正面料栱間は墓股、料栱「唐様三料」。本殿柱上「大料肘木（繪様、肘木）」、脇

障子の笠木は二重で、「竹の節欄間」を用いている。「昇勾欄」「椽勾欄」を備えているが、前者は「疑寶珠勾欄」で、疑寶珠は一節を有し恰好宜しく、後者は「組勾欄」にしてある。向拜と本殿とを連絡せる「海老虹梁」及び「懸魚」等に寶珠文様がつけてあるのが目立っている。
天正19年の棟札があるという話だが、實物はどこにあるか判らず、其寫しなるものを瞥見しただけ、寫し方等に遺憾な點があつたが、とにかく其寫しを更に寫して送つて戴き度く、ある方面に依頼しておいたが、未だ入手しないからこれ以上何もかけない。割合によく保存されているのは、覆屋の内にあるせいであろうが、大體に於いて天正19年を承認してよからう。多分棟札の寫しを送る事は先方でお忘れになつたのであろう。

五 淨光寺藥師堂（一三・一四）

長野縣下高井郡都住村大字雁田

（普通名稱は雁田の藥師）

三間四面單層入母屋造の建物、茅葺とあるが、修理後やはり茅葺にしておくつもりかど

うか知らない。修理進行中、應永の墨が出た。夫は書も畫もある。書も畫も大概卷料の含みのところに書いてあるが、削り方が粗末なところえ、書き方がぞんざいだから、どうもよめないものもある。其數例を示すと

おう永拾五年

(1) 薬師堂作

二月廿日

(2)

南無阿彌陀佛

應永十五年

二月

(3)

應永十五年

大野作

並四郎三郎作

吉日

繪は大工の描いたものらしく頗る幼稚で、あるものには「松」、他には「竹と蔓草」、時には「裸體の男子」等、殆んど價值のないものばかりだが、文字・繪等取り交ぜ合せて11種だけは見る事ができた。

次に此建築に用いてある墓股に就いて簡単に記載をしておく事にした。脚内彫刻が両面で異なっているのは、少しも珍らしい事はないが、内輪に沿つて溝をほり、薄い板へ文珠を彫刻して、夫を其溝へ嵌め込んであるのを、私は此建築に於いて初めて気がついたのであった。

嘗て平清水八幡宮本殿(山口縣吉敷郡平川村大字平井)の夫に於いて、内輪の中央に極めて薄く板を残し、其板に牡丹唐草をほつたのを見て、随分際どい薄い板を残したものが、これではもう餘命幾何もなく、ぢき破損するだらうとは心配になった事があつたが、こゝのは丁度其位の薄板に、同じく牡丹唐草を透彫とし、そつと嵌め込んだのだから、尙更きやしゃであり、従つて自然すぐ壊れる虞が多分にある。よくもこの様に手間のかゝつた仕事をしたものだ、連りに感心をした(一二)。併し其輪廓——脚ではない、内輪にそつと嵌込まれている牡丹唐草を刻した板の夫——の上部の曲線は、どういふのか際立つて拙劣、というよりは寧ろどうでもいふといった風な刻み方である。併しよく見ると、その拙い部分は輪廓の内輪に沿つてほつた溝に入つてしまふのだから(一二下)、出來上りは問題にならない(一四)。而も此牡丹唐草は透刻だから手綺麗で、表裏の間に板が残してあるから愈よ美事な作である。輪廓の内輪に溝をほるのが少し面倒な位で、結果は立派に成功している。

而も此牡丹唐草は、中心飾も左右も花だから、普通此種に見る様な公式に當嵌つていず、大に賑やかでよくできている。同じ位の大きさの牡丹入の墓股でも、錦織神社本殿(一五)のようなのが多いのに、其點に於いても拔群といえる。けれども和歌山縣有田郡鳥屋城村(トヤシロ)の白

岩丹生神社本殿の牡丹慕股に比べると、とても競争はできない。輪廓も申分はないが、牡丹は全體が向って右下から左方に及び、中心に花、右方に主に葉、中心飾と右上とに特殊の蕾、左方に開きかけの正面向き花を配してあるが、全體としても、部分をみても洵に點の打ち所のない完好なる意匠から成っていた(二六)。實にいつもそうであるが、上には上があるものである。とにかく脚内の彫刻は美事に違いないが、其輪廓は少しく太きに失したるもの、如く、恰好は遺憾ながら錦織のに一籌を輸しているというよりは、寧ろ大分の差があるのである。一三と一五とを比べてみれば誰人も容易に了解ができるであろう。設計者の腕前にもよる事勿論であろうが、又正平18年と應永15年と、約50年の差も幾分影響しているかも知れない。けれども亦、一方がきしゃなのは純裝飾慕股であるため、此に對し他方は裝飾兼實用という點も考へなければならぬ。そうして其脚先が頑丈過ぎる様に見えるのは、此様に不當の觀のある位に膨れて大きいのが桃山以降にあるが、其元は既に應永頃に始まったという見當がつけられるのである。

併しこゝに唯一つ書いておく事は、牡丹唐草を透彫にした薄板は、内輪中央に幅0.04—0.05の厚さの板を残し、上厚約0.04下厚約0.03の寸法を有し、内輪に沿いての見付は約0.025で、夫はそ

くり内輪内の溝中におさまって了うから(一四)、でき上りは一三でみる様に全然其有無は判らず、下からみるとよくも此様に美しく手際のいゝ仕事をしたものと感心するばかりだが、之に反し下側だけは高さ約0.115の板の部を残してある。恐らく補強と出来上った時文様の下端がけられて、折角の苦心が下から見えなくなるに對する注意とから考えたものと思われる。用意の周到なる洵に敬服にたえない(一三・一四)。

其他本鼻等も中々よくできている。但し内陣突き當りの天井廻り料栱中央のものから前方に、唯一個突き出している獸頭は、いやに兩方からおしつづいた様で、ものも新しい様だし、形も面白くない。これだけではどうも後補の様である。あれだけの慕股や木鼻の彫刻をする腕前の工人の仕事としては全く似合わない。

嘗て私は奈良興福寺講堂礎の様に、自然石の上端に十文字に細い溝を刻し、其交叉點が柱の中心を現わしている礎石が、愛媛縣周桑郡小松町大字北川の法安寺塔礎に用いてある旨を拙著に載せた事があるが(日本建築細變遷小圖録、第6・第7頁九及其解説)、夫と同じ種類のものが、こゝにも亦用いられているのは注意すべきである。故に今の所長野縣・奈良縣・愛媛縣に各一ヶ所づゝ見付ける

事ができたのである。

六 立本寺本堂

山梨縣中巨摩郡池田村大字金竹

三間四面料栱舟肘木の、正面からも側面からも、どうも纏まらない建築。夫も其管で、周圍にあるべき椽を全部除去して了ったからである。併しよく見ると大面取の角柱と舟肘木とは古い様だ位の事に気がつく。側面の方は手が入りすぎているし、背面は樹木が生えていて行けないし、そこで外部を断念して内部へ入ってみると、正面外陣上部が一寸面白い。室町位はありそうに見えるので、いきがつける。

外陣に入ると兩脇間及び兩側面よりも正面中の間のところの方が少しく廣くなっている。此はよくある手法で中央の部分を廣く使用せんがためである。後方は中央が須彌壇で兩脇は障り物のためによく見えないから確言はできないが、少なくとも正面と兩側面の外陣は同じ幅さにしてあったのであろう。つまり深さ一間の化粧屋根裏の外陣が周圍を廻っていたの

であろう。かくして内部の體裁をよくし、正面から入ったところを少し廣く使用ができるようにしてある。

正面の柱間は三間だが、中の間は廣く兩脇の間は狭い。この中間と兩脇の間とのあひだの柱は吹寄にして大面取角柱が二本立ててあったが、後に其うちの一本を途中から切断して了った。だから吹寄柱のうちの外側の方は鴨居止り、内部内外陣境のところでは内側の柱を途中で切つてある（床下には古い柱の一部分が残っている）。つまり臨時に後に挿入した梁の上のせてある。正面側柱上は吹寄柱の上に共通の舟肘木を用い其上に梁をのせ、同内外陣境は前記の様にしてあるから、この二本づゝの吹寄大面取角柱の上に乗せてある「繫虹梁」は自然吹寄になっている。夫で私はこゝでこれを「吹寄繫虹梁」と呼ぶ事にしたのである。

斯る名稱はまだなからうが、こうでも言わなければ現わし様がない。勿論虹梁は前後に架渡してあるので、左右にでないのは記す迄もあるまいが、下の柱が吹寄だから當然の結果である。そうして此「吹寄繫虹梁」は、正面側柱にたゞ挿込んであるが、内外陣境のところでは柱から出した挿肘木の先に料一個をのせ、其料で虹梁の袖切（三角形の袖切ではなく、東福寺東司の夫の様な形の袖切）のところを支えさせてある。其虹梁下端には鎌倉系統の三葉形の様な原始的「錫杖彫」

がほってある。尙お其上に、四本の虹梁の内、外側の夫の上には珍らしい特殊の大瓶束が用いてある。特殊大瓶束という名は寧ろ不都合で、「特殊圓束」という方が適當かも知れない。というのは大瓶束の様に上に「粽」があり、少し細くなっている特徴はなく、純然たる圓形であるから、つまり短かい柱であり、下部には結綿があつて、大瓶束の様に虹梁に跨がっている。此は當時の建築家が唐様の大瓶束から暗示を得て、これを柱に應用し、以て獨創的意匠を試みたものと考え。大分ひどく隨時隨所に手入がしてあり、洵になさけない有様であるが、よくもこれだけの考えをだしたものだ、只管感嘆するのみである、こういう取扱は小生寡聞で、つい他に見た事がない。

内陣天井は今紙貼がしてあつて判然しないが、其外陣に喰みだしているところは、竿縁が一本入っている。當初内陣天井全部がこうであつたか、或は外陣に喰み出した分だけが竿縁で、あとは鏡天井であつたか、其邊がはつきりしない。文句で書くときよく判らないし、又書けもしないから、非常に物足りないが、他に適當な方法がないから、今はこれでがまんして

*M君が寫眞をとつて送つてくださる事になっているが、未著だし、待つてゐる事も失禮で催促もできないし、當分止むを得ずがまんしておくが、他日入手したら何等かの方法で何かに判る様にかくかも知れない。とにかく珍らしい取扱で敬服をした。

おかざるを得ない。方柱一邊 0.52、面内 0.40、面見付 0.06、其比約 $\frac{1}{8.6}$

甲信旅行から8月8日夕刻歸宅したら、鹽田義遜師から信書が来ていた。そのうちに、

……御指示の如く立本寺本堂舊護摩堂室町末期との事……永年の御批評に對し、別に素人の我々より云々申上ぐる筋には勿論無之候えども御覽被下候過去帳の記事に對し研究致し……改めて御教示を願ひ上げ候」若し室町末期とすれば應永頃と思われ候か然れば護摩堂は眞言時代末覺成前後の建立となり眞言宗時代の末期となり龍平寺創立以後再建のものと相成候萬一同堂が開山青山法印の創草當時のものとするれば鎌倉末期と相成候が該堂が再建か眞言時代の最初創立のものか其邊篤と御教示相煩し度過去帳の記事により御迷惑乍ら……御教示を願上候……

とあつた。此寺元は「龍平寺」といつたが、應永七年順海法印の時、眞言宗から日蓮宗に改め、同時に「立本寺」と改めたとある。青山法印という人は元久二年寂とあり、そんな古いものでない事はいふ迄もないし、再建という事は確かだらうと思う。然らばいつ頃の再建というのが最も適當かというに、眞言時代の再建とすれば少しく古過ぎやしないか、つまり應永の初めになるからである。私は様式からみて先ず室町中期位に考えるのが一番適當であらうと思つてゐる。

何にしても十分調査の上、推定復原してみたら、随分面白い珍らしい建築ができ上るので

はないかと思っている。

七 松尾神社本殿

山梨縣中巨摩郡敷島村大字長塚

敷島村の畑中に立ち東面す。式内郷社という。一間社入母屋造、一間向拜軒唐破風附。正面木階六級、向拜角柱大面取。向拜料栱唐様三杓。本殿圓柱料栱出組、料栱間墓股、料栱唐様、化粧角木及び種和様。併し隅木は正面左右のものは地唐飛和なるも、後方左右のものは、共に後補で和様になっている。これは修補の時こうしたのか、或は當初からそうであったのか、其邊の事はよく判らない。十分調査してみても、ことによつたら判らないかも知れない。正面木階六級、正面及び左右側に椽がある。昇勾欄の擬寶珠は二節だが、椽勾欄の分は一節、正面幣軸の面は大分角張っている。

此建築に於いて變っているのは墓股である。墓股は正面向拜梁上と唐破風内とに二つづゝある。

上方の分 文様「雲」(一六)

下方の分 兩面文様を異にす

正面 菊又は梶の葉に鹿二頭 (一七)
背面 菊又は梶の葉

本殿の分は四方向料栱間に一個づゝあり、何れも裝飾的片面のもの

正面料栱間 松 (一八)

左側面料栱間 竹

以上一八でみる様に、中央から左右相稱な様にしてあるのは、正に鎌倉系統だという事に直に氣がつくであろう。「松」の幹は中心の岩の様なもの(何だか判明しない)の向つて左から生えてい、るが、左右に枝を出し、葉の集りが五つ、丁度對稱的に刻んである。「竹」の方は中心に一本あり、其左右に葉の數と莖の有様は少し異なるが、巧に平均をとる様に一本づゝ配置してある。だから此等の「松」「竹」は原始的圖案的のまゝ傳えられた意匠である。

背 面料栱間 水・水草・鶴 (一九)

右側面料栱間 水・浪・水草・龜

所がこの二つは一九に明らかだが、何れも繪畫的彫刻にしてある。前者は池水(?)の一

方から水草が三本生え、其反対の方に飛鶴を配して平均をとっている。水草の葉が大きい割に「鶴」が大變に小さいのは、高いところを飛んでいるつもりか。併し「龜」はそうでない。この方も池水から水草の葉が三つ出て居り、其配置は左右で一と二とし、中央に水中より上半身を出した龜がいるが、龜の出たあたりは浪がたつたと見え龜の向きと反対に浪頭を刻んである。これはどこ迄も龜を中心飾として、其左右に然るべく水草と浪とをほったので、鶴と龜とで幾分意匠をかえてあるが、松と竹との様な事はない。つまり此本殿の料栱間蓋股は四個の内二個づゝ、圖案的と繪畫的のいわゆるめでたきものを用い、而も植物と動物とを主とし、變化をもたしたので、設計者は餘程考えたのであろう。夫にしても鶴と龜との大きさを常識で考えると、如何に鶴が高く飛んでいるところにせよ、とても其比例を無視していること、柄淵八幡神社本殿の「楓葉に鹿」の蓋股の如くで、洵に面白いのである。

併しながら私の興味を惹いたのは向拜の「鹿と木葉」の兩面蓋股である。此が正背面で文様を異にしているだけなら、別に取たてていう程でもないが、珍らしくも鹿が二足、而も雌雄が雌を先頭に、植物——此は梶の木らしい——間を歩いているところを彫刻したので、

＊【續成蟲樓隨筆】第三二八—三二九頁参照。

＊表の方は鹿を主として現わし(一七上)、裏は葉が主で、其間から鹿の脚が見えている(一七下)。而も其鹿たるや頗る奇抜で、何とも愉快極る姿勢をしているが、かゝる意匠はついでまだ見附けていない。

向拜の屋根は正面に軒唐破風がついている。この鹿蓋股の上方、唐破風の内に雲入蓋股がもう一つある(一六)。どうも變挺なもので、決して傑作でも何でもないが、考えは珍らしいといえる。片面のもので、兩脚の末端も類例のない卷雲に終り、脚内の文様も亦、卷雲を左右相稱につけてある。この脚端の卷雲の外へ若葉式の雲をもう一つ附けるか、或は現在内方に向つて曳いている尾の雲の形を少しかえて若葉の様にし、左右取りかえて置くと、他の五つの蓋股と同式となる。そうなれば平凡だが、このまゝだと變つて見える。

＊申譯の様であるが、向拜の蓋股は正面からは勿論、裏面からでも随分足場がわるく、足元が危険でゆつくり寫生ができなかつた。たゞさへ不得手な寫生に、かう足場がわるくては、ろくな寫生ができる筈はない。だから一七に示したのは大體の圖で、實物との距りは大目にみて戴き度い。尙お圖中葉脈の細いのは葉の表、太いのは裏、縦線を引いたのは反対側の葉がすき間から見えている所を現わしたつもりである。

私は此等の墓股の意匠が大分變つてゐると、恰好も割合によろしいのだから、少し無理かも知れないが、室町末期のものと推定をしたが、やはり今になって考えてみると、桃山時代とした方がよさそうである。立本寺本堂の古い部分と比べると、たとえ建築家が全く異なつたとしても、尙且そこに幾分時代の相違を認めなければならない。

最後に向拜の柱は、角柱一邊 0.475 面見付で 1.10 。側面に小穴等が幾つもあけてあり、どこか他から他の材料をもつて来て可然取替えて修補したものと考えられなくもない。

右記載の二建築は今回の掘り出しものである。

私は常説尼寺へ二度も参詣して、近頃問題になつてゐる「輿」を親しく拜觀したが、これは一種の工藝品だから、却て建築の間へ狭まな方がよからうと思ひ、一つ離して終りに記す事にした。私は有職故實に關して門外漢で何も知らず、従つて何もかけないから、建築上の立場から見た所を記しておく。

墓股を記した序に【續隨筆】の正誤表をつくる時、發見できなかった誤植をこゝに訂正しておく。他

にもあるが、これが最も重大と思うから、取あえず記したのである。第五〇頁「奈良時代」のうちの、「口、法隆寺西院鐘樓」とあるのは「經樓」でなければならぬ事はいふ迄もない。どうして間違つたのか、原稿に何とかいたか、最早手元にないので、どこでどう間違つたのか、今更調べようもないが、とにかく重大な誤植である。仍てこゝに後ればせだが、正誤した次第である。

尙おもう一つ序に、同書第三七七—第三八二頁にかけて、墓股脚間に入れた彫刻の内の「空想動物」を記したうちに「白澤」を失念してぬかしただから、こゝに附加しておく。白澤に就いては、同書第四一九—第四二二頁にかけて書いたのは書いたが、墓股の脚間に入れた彫刻としてはなかつた。だからこれも追加しておく。

(以上二項昭和21年11月30日記)

八 常説尼寺の輿 (二〇・二二)

山梨縣中巨摩郡吉澤村吉澤

常説尼寺には古い「輿」がある。これは順徳上皇の御乘輿と傳え、既に學者によりて調査研究が進められ、有職故實の老大家江馬文學士は、既に先年親しく視察されたが、同氏の視察前後の状況は、昭和19年9月其寺發行【常説寺の順徳上皇御乘輿に就て】と題せる小冊子

に詳細記されている。其巻頭に江馬氏は、

私は未だ拜見しないが甲斐吉澤村の板輿は寺傳に順徳上皇御配所御遷幸の節、乘御あらせられしものといわれているが、同寺の由緒傳説と現住の智孝尼の證言並びに御寫眞の三つから推考しても、寸毫も疑もないもので、御輿の形式は鎌倉時代の數々の特徴を示している。……

とあるのでみると、正にそうであろうと思われた。江馬氏一行の調査は昭和19年1月13日午後2時(午前2時とあるのは誤植か)過ぎに行われたので、其次第は同冊子第13—15頁に記されている。そのうち私の疑問の點を書いてみると、

(ア) 料のまはりに「束」があつた(第13頁第7行)というのは何か誤記らしい。束のあつた形跡はない次に鎌倉時代の特長を列挙してある中(第14頁第2行以下)に

(イ) 前板に亥の目がついているが、是れは前方の大簾の動搖を防ぐ爲、簾についた紐を結ぶためのものである」とあるが、後に記すが、猪目のところに紐を結んだ形跡もなし、且つ猪目が横にあげてあるのはどうしたものか。

(ウ) 棟の内側に三本ある棧に何れも面があり、平安末のものは面幅が總幅の $\frac{1}{4}$ とある。この棧は母屋と棟木とで、必ずしもそうとは限らぬ様である。竿縁天井の面等は遙に小さい時もある。

(エ) 第16頁第15行「破風の下に束と料がある。料の下にあつた筈の束がないのは剝脱か」とあるが、

これは或は糊位でつけてあつたので、脱落したのかも知れないが、釘の一本位打っておきそうなものだのに、どうしたものか、併し現在では束のあつた形跡はない。誰か最近下の開いた束の形を、きずをつけて了つた。つまらないいたづらをしたものだ。

(オ) 第十七頁第三行から第四行にかけて、内部でつかまるために圓形の棒(冊子には欄干とある)を、「手形の如き木を貫きて(かへる股と稱す)あることなど」は「古式の證左で」と書いてある。これも挿圖の解説に示すが、墓股とは縁の遠いものだけれども、頗る興味のある木片である。

私も亦他の點から、此輿の年代は凡そ鎌倉初期頃でよからうと思つた。全體の寸法は獨りでは測りかねたし、光線も不充分で寸法を読みにくかつた點もあり、旁誤なきを保し難い。夫どころでなく、當然多少の誤測があつたと見て、凡そこの邊だろいう位に考えておいて貰い度い。以下總て單位は尺とす。

(ア) 寸尺。

長柄 長 11.47。輿長 3.15 幅 3.24 (殆んど正方形)。柄前方長 4.90、後方長 3.42。上幅 2.76。高(桁迄)約 2.90。桁上端より大棟頂上迄 0.45。

(イ) 前面及び後面妻に取付けてある料の比
 幅.165 高.115。比約 $\frac{79}{1.0} \parallel \frac{7}{10}$ 。幅.165 高.11。比 $\frac{605}{1.0} \parallel \frac{6}{10}$ 。
 これで見ると、少しく背に相違があるが、小さいものだから大した事はない。何れも鎌倉初期と見て差支ないと思う(二一四)。

(ウ) 奥の臺(二一四)・兩長柄の下に夫々二つづつ取付けてある及び正面兩方に刳抜いてある孔(二一〇)、即洲濱型とでもいふべき形をしたものは、少し不満足の點はあるが、これだけが新しいとは思えないから、やはり當初のものとするべきであろう。而も江馬氏は、方立に浮彫の手形がついているのは、日本中で此奥だけである。手形は天皇の御召ものに限ると證明して居られる。私は全然其方の知識がないから此證明に敬意を表する。

(エ) 前板の猪目型の孔は二一〇・二一〇の様なものであるが、これには前方の大簾の動搖を防ぐため、簾につけた紐を結ぶのが目的だという事であるが、紐を結んだとすれば、いく

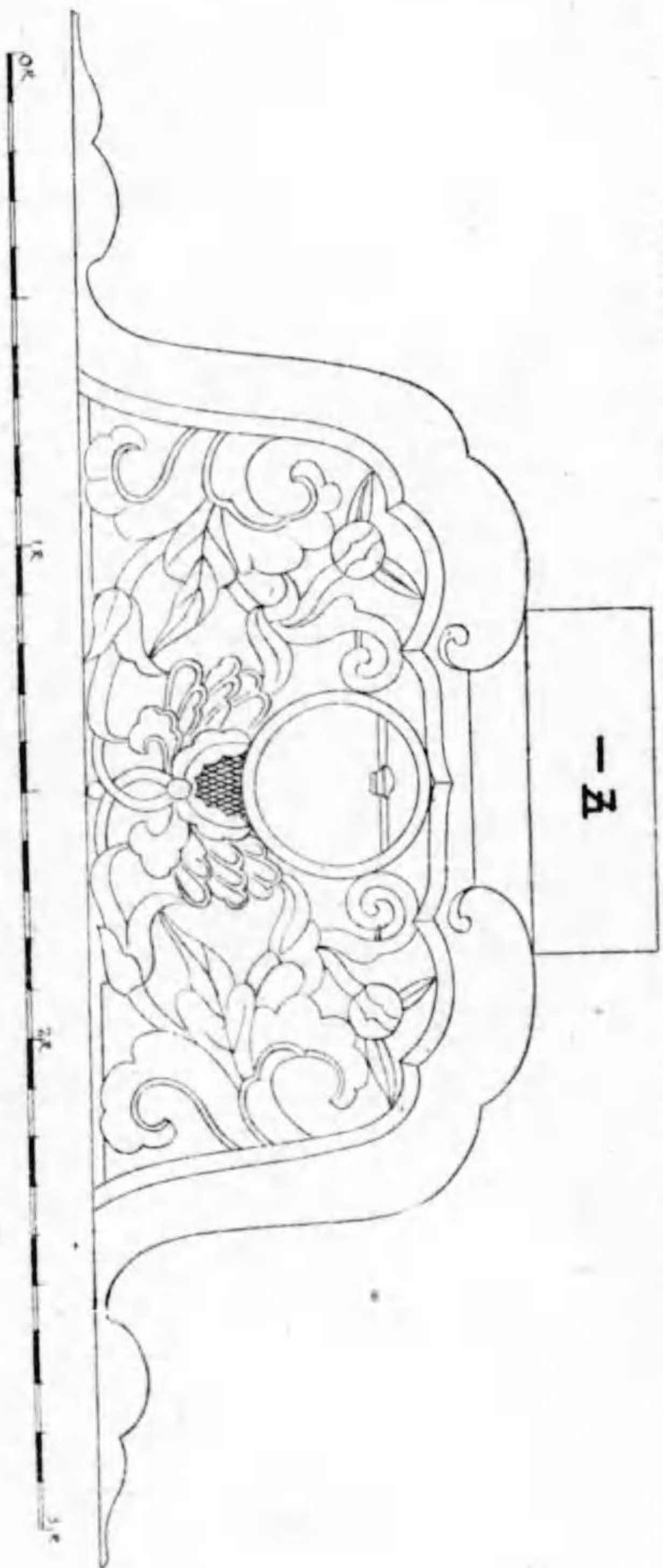
らかカタも残っている筈だと思われるが、料下の束同様、そんなカタは全くないし、且亦猪目が横向きにあげてあるのも、私には了解ができない。態々猪目型等にしないでも圓孔の方が都合がよからう。併しこんな例が他にあれば肯定する。此方面にも同様に門外漢で判らない。

(オ) 終りに小冊子中に用いてある名稱「かへる股と稱す」とあるところの、つかまる爲の直經8分の木を貫いてある木片に就いて述べる(二一〇)。確かにこれは平たくおいてあれば墓股の模型の様に見える(二一〇)。これも何とかもつと造り様もあつたろうのに、造りにくい妙な形にしたものである。今此を中央から二つに切り間を少し離し、平たい所をつくり、そこへ奥兩妻にある料(どちらでも差支はない。元より大した相違はないのだから)を入れ、其兩方の曲線は、兩方の頭を料尻につけたまゝ先端を少しく下げ、其先は少し延ばして簡単な木鼻の様なものをつければ、正に板墓股ができる(二一〇)が夫れである。點線のところは想像で描いたもの。實線のところは實物。而も夫はたしかに鎌倉時代、遠慮しても室町時代は間違なしと思われる曲線輪郭を持った至極良好な板墓股であり、兩妻の料はおそろしい程よくこの曲線と階調を保っている事が、容易に看取できるであらう。

最初に記した様に私は有職故實の方面から何もいえないが、右記載の諸點からやはり鎌倉初期の形式をよく現わしていると思うのである。

(昭和21年9月19日稿)
(昭和21年9月19日稿了)

大阪府中河内郡富田林町大字甲田、路社錦織神社本殿右端木杵間龕彫



昭和二十一年五月二十四日寸楮、昭和二十一年十月六日製圖・(2)

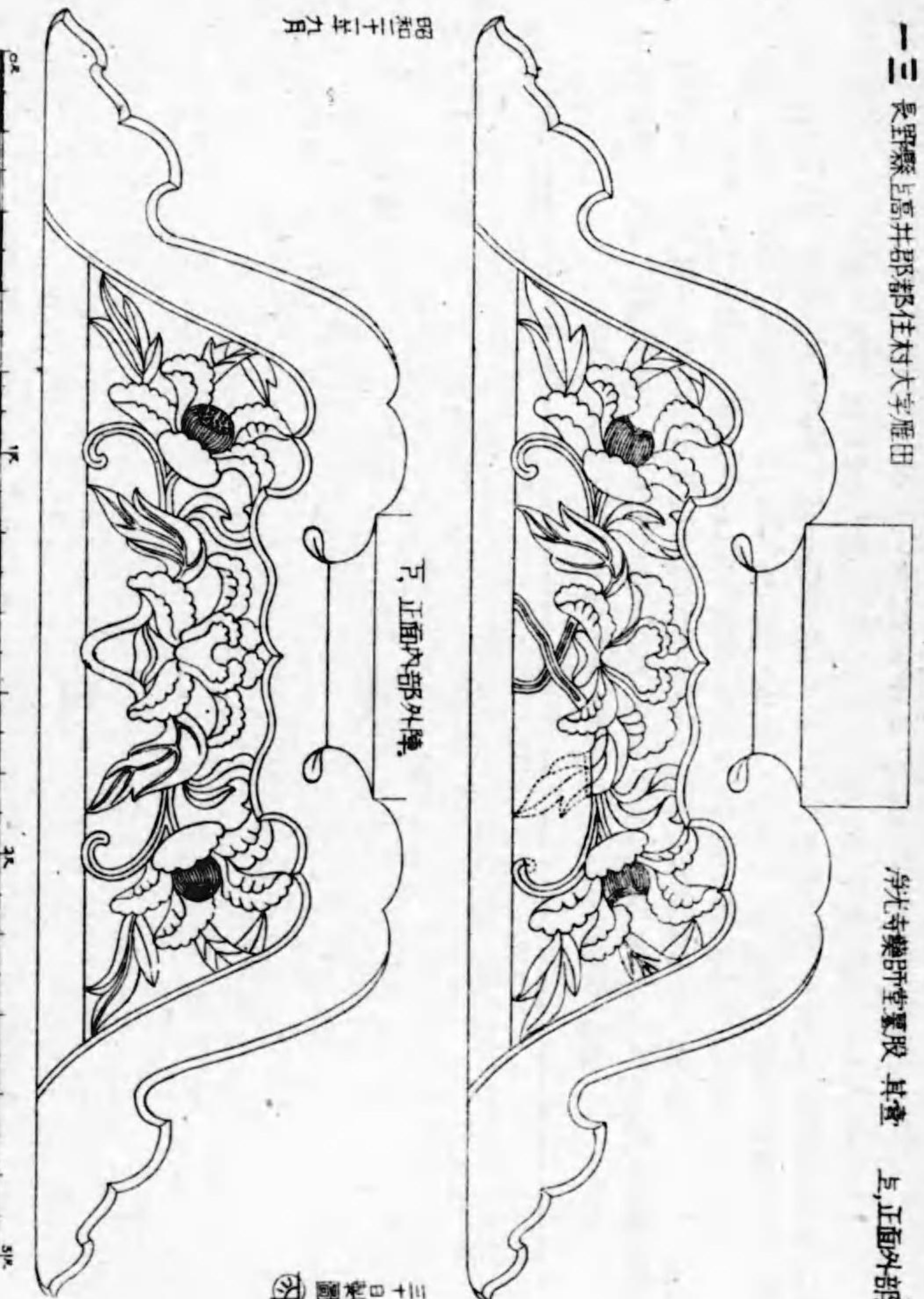
錦織神社本殿は三間並立であり、向拝及び木殿料束間に向拝彫刻があるが、本殿のは三個共同式の地味彫片垂幕彫、鎌倉以降江戸時代にかけても尚ほ相當に費用された牡丹唐草である。此種は種類例が多いが、中心飾たる上上の圓木杵間に何を入れたか、三個共全々異なり、至低判らぬが、他の例から推推すると、恐らく唐草であった。

其次は對坐寺樂師堂の彫りと同じであるが、背が高いのを通り大きく見える。併し對坐寺のは中心飾も彫刻のも、三個共に開花してゐること、恰も平清永の繪宮山口縣吉敷郡向拝の夫の如く大に張かである。此種の牡丹唐草の特徴は、普通「中心飾に開花、左右に蕾又は半開の花を彫し、残りの空間は幹と葉或は唐草をたす」のである。

特にこの反對のものがあるが、一般に此が公式で、どこにあつた以外のものはつちがい。

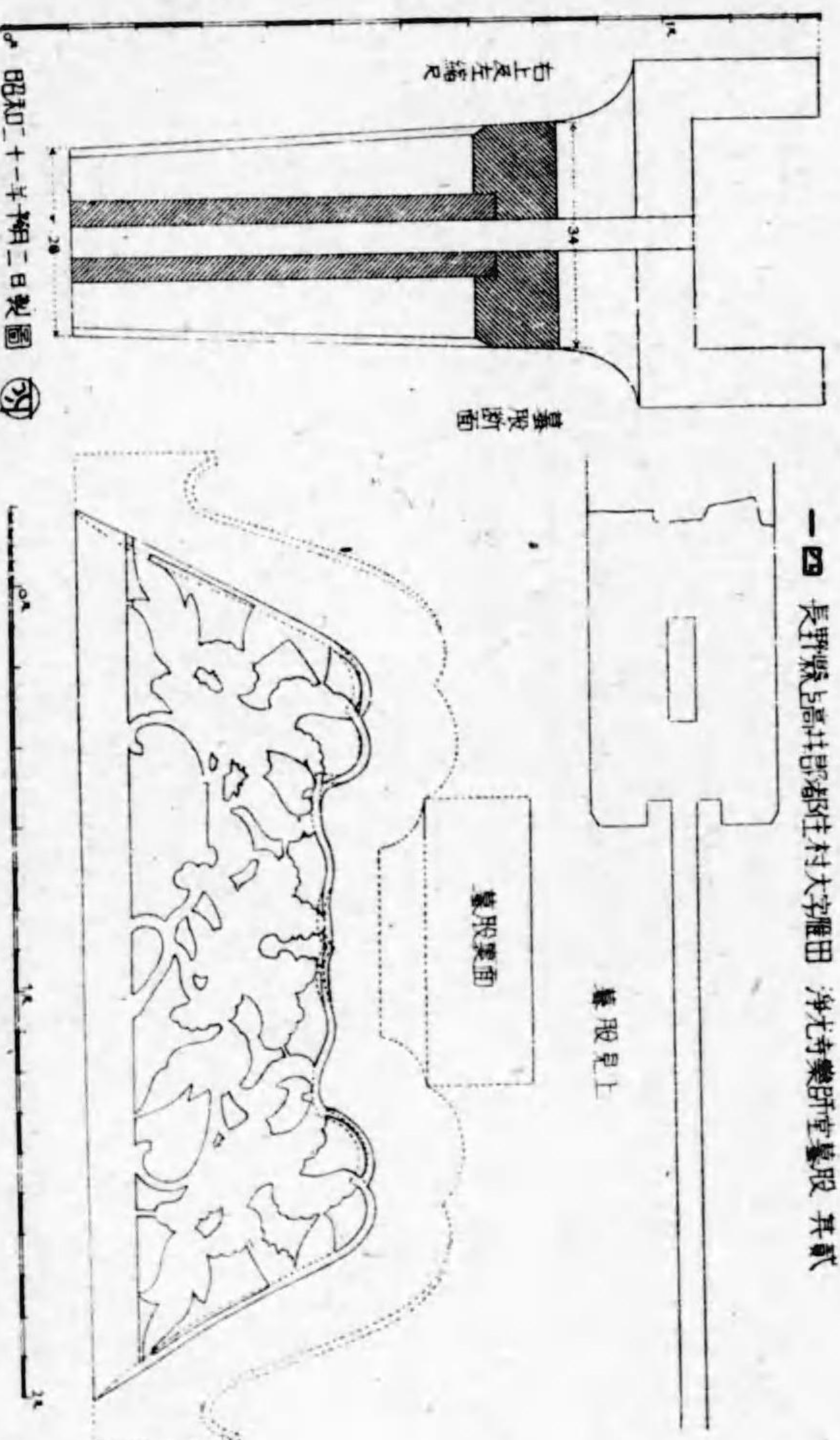
一三 長野縣上高井郡都住村大字雁田

淨光寺樂所堂裏段 其意 与, 正面外部



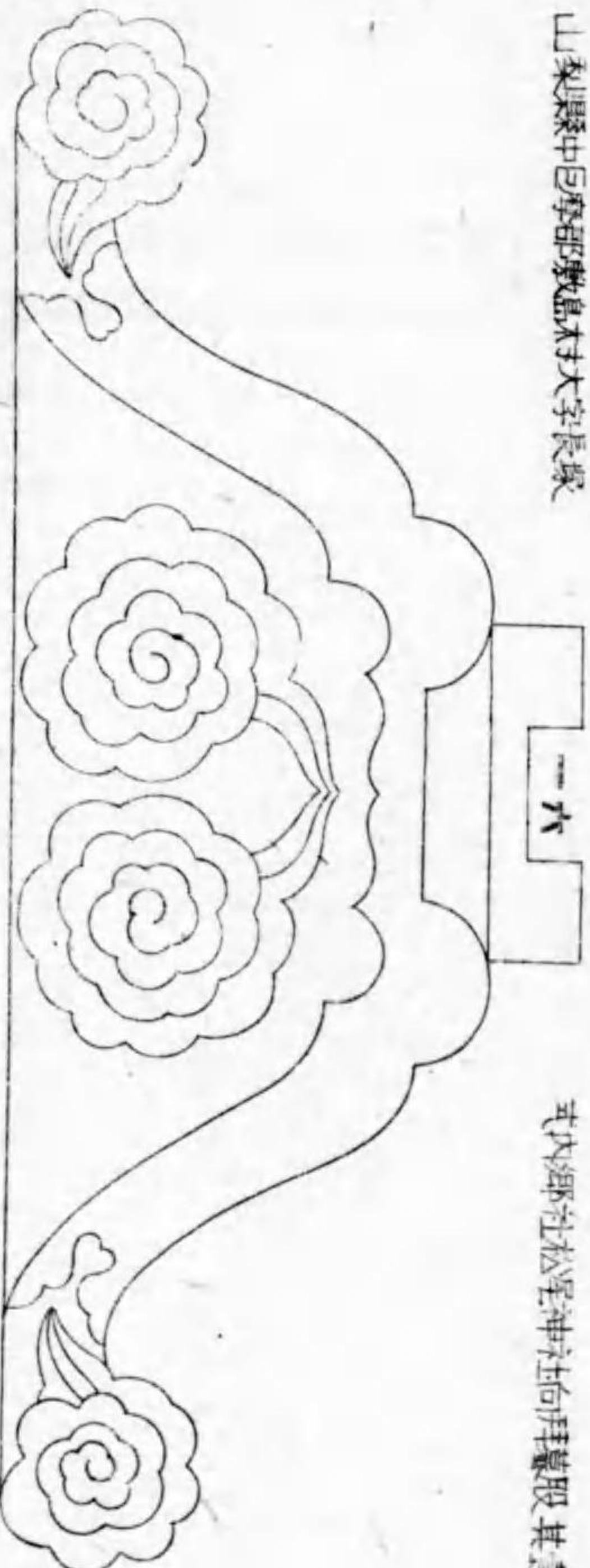
三十日製圖

一四 長野縣上高井郡都住村大字雁田 淨光寺樂所堂裏段 其意



山梨県中巨摩郡敷島村大字長塚

式内郷社松尾神社向拜幕股 其壹




昭和二十一年五月五日撮影・同十月五日製圖・

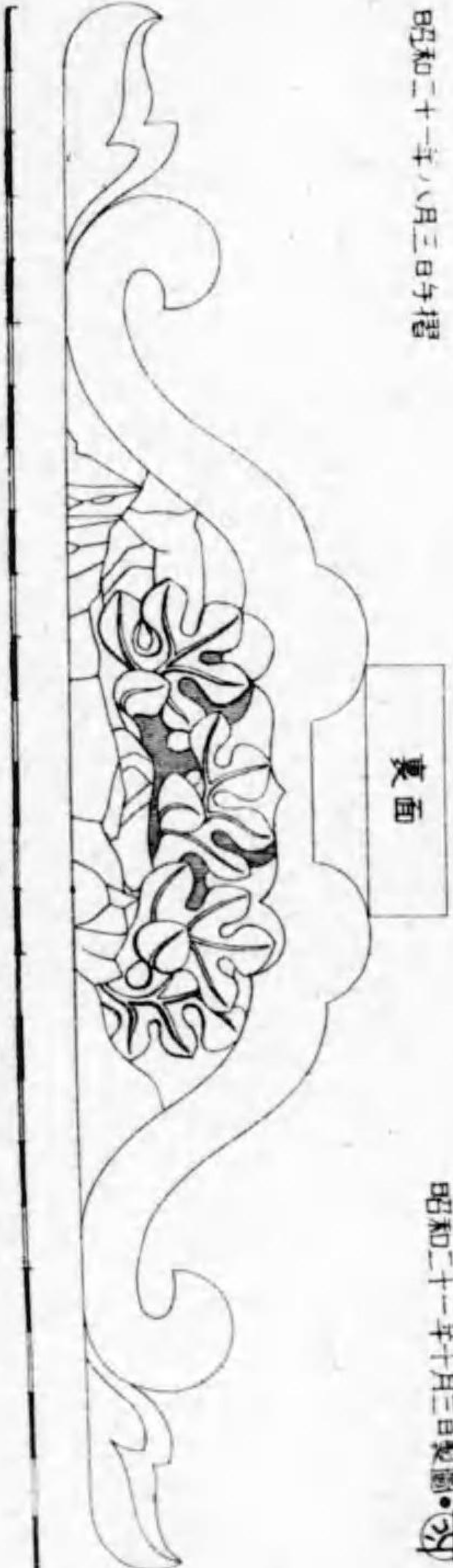
向拜幕股は二種ある。此は上方のもので、変形に雲葉股と見るべく、傑作とはいへぬが、どちらかといふと、珍らしい意匠である。雲葉股の最も古いのは室町時代に見出されるが、其美的價値は到底後世のものに比肩しにならないし、また同時代の若葉葉股にも形が優れたのがあつた。此幕股は両脚の先端が雲形で、纏らない様に見えるが、此先に若葉を附ければ、他の五つ其輪郭に於いては全く同じとみる。此は併せて他のと全く変つてゐるから、或は後補かも知れぬが、やはり當初のもつと見て可からう。

一七 山梨県中巨摩郡敷島村大字長塚 式内郷社松尾神社本殿向拜幕股 其貳

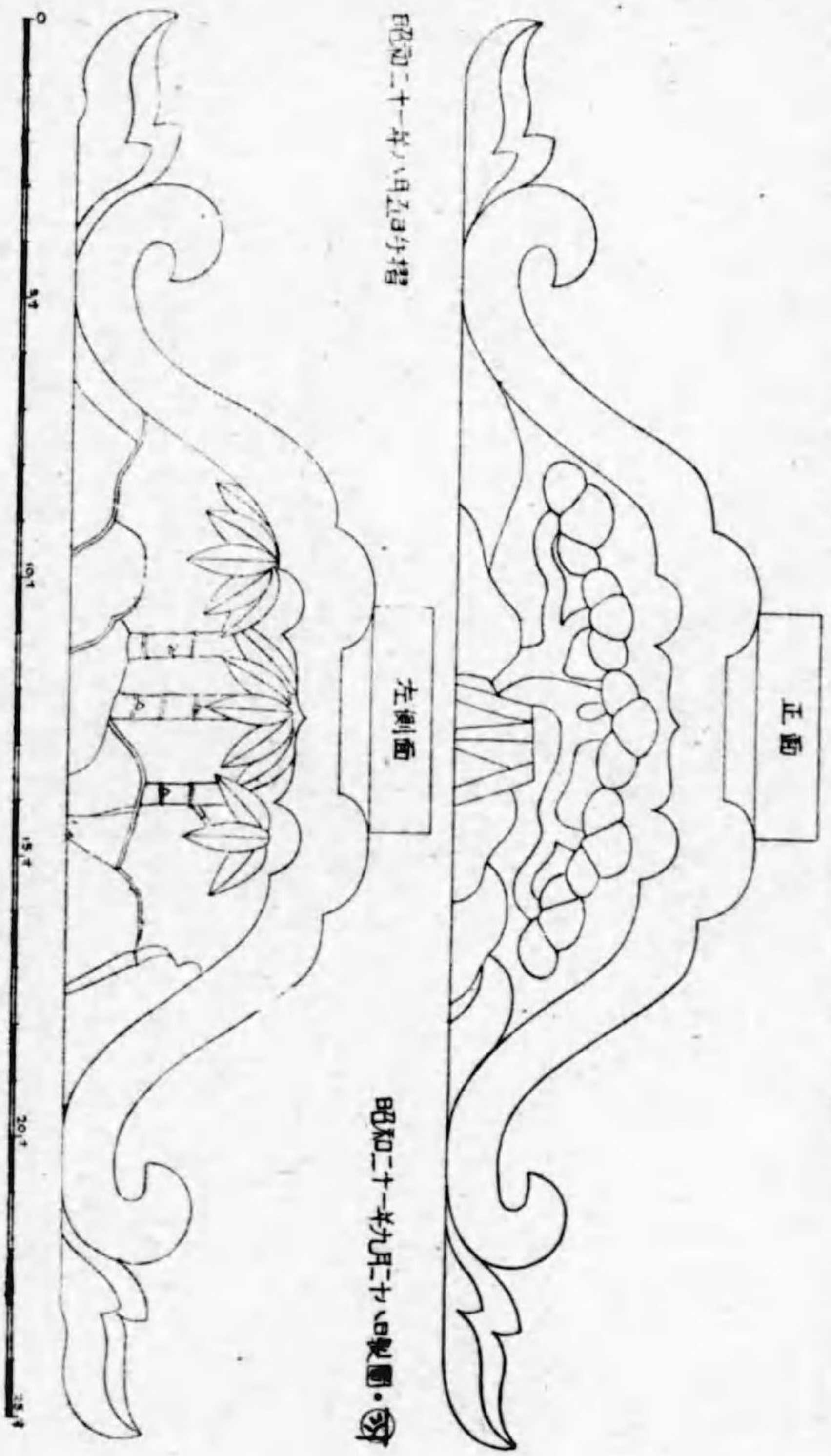


昭和二十一年八月三日撮影

昭和二十一年十月三日製圖・



一ノ八 山梨縣中巨摩郡敷島村大字長塚 式内神社松尾神社本殿裏板 葺煙

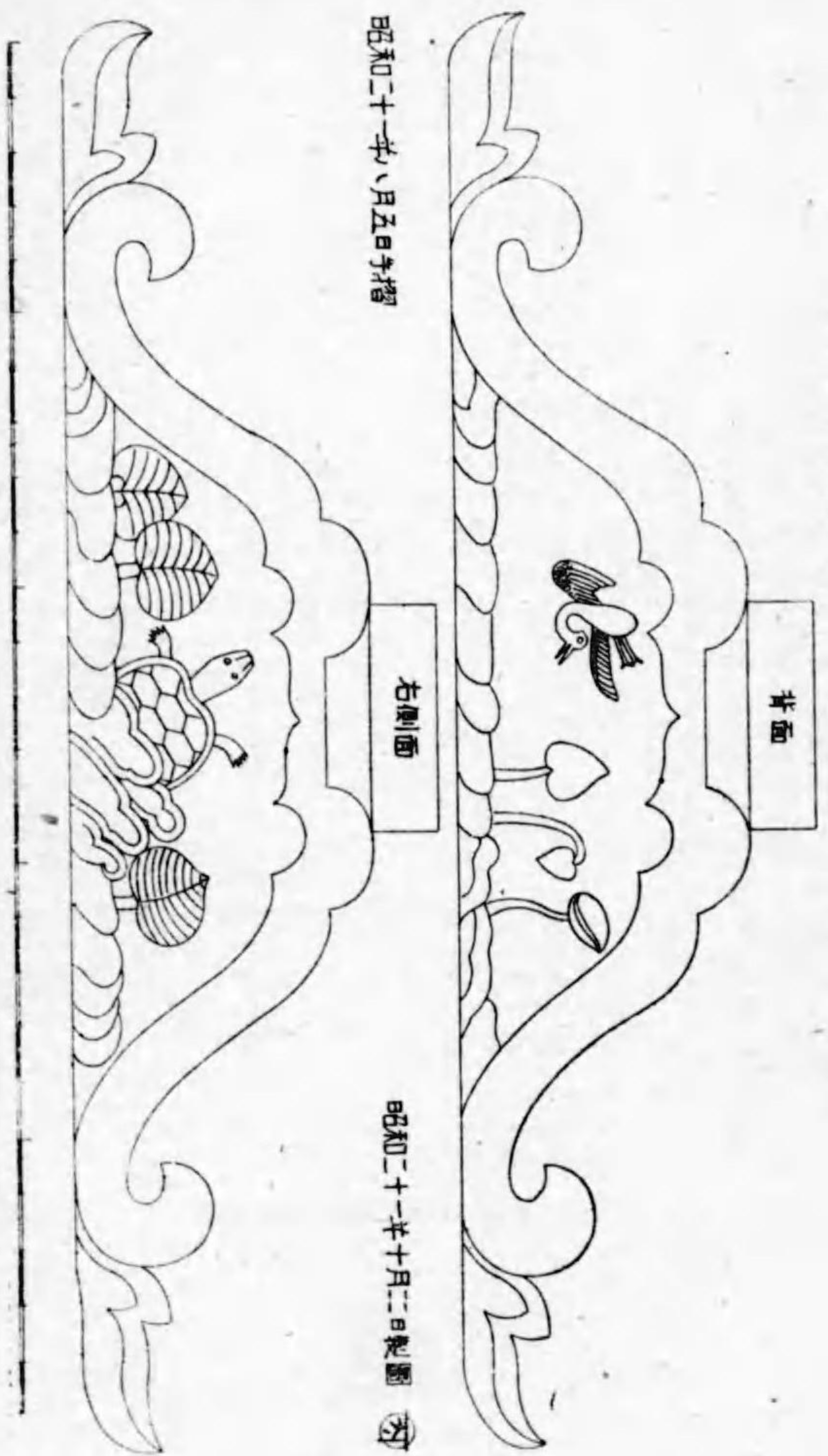


昭和二十一年八月三日抄

左側面

昭和二十一年九月二十四日製圖・切

一九 山梨縣中巨摩郡敷島村大字長塚 式内神社松尾神社本殿裏段二枚



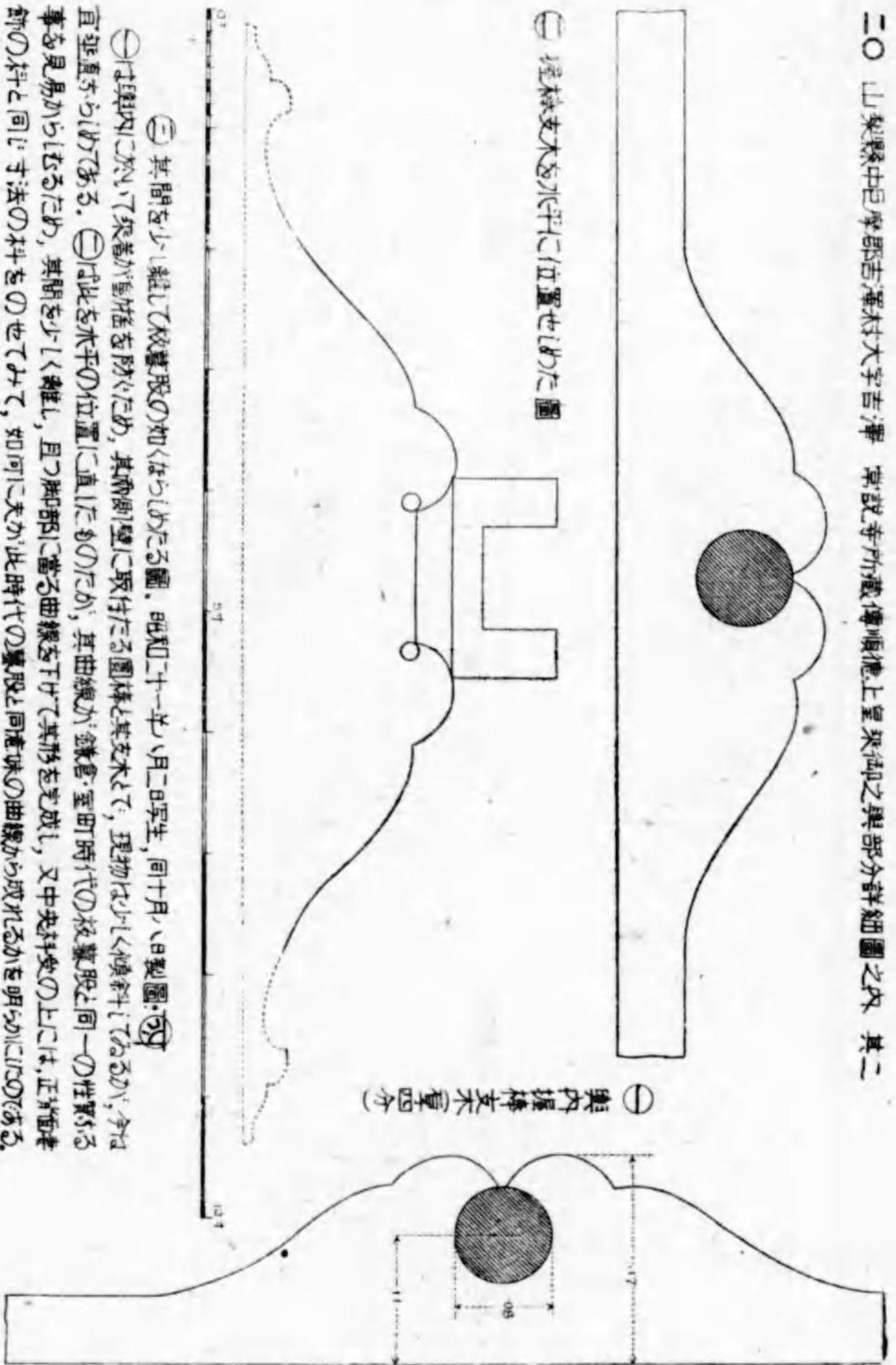
背面

右側面

昭和二十一年八月五日抄

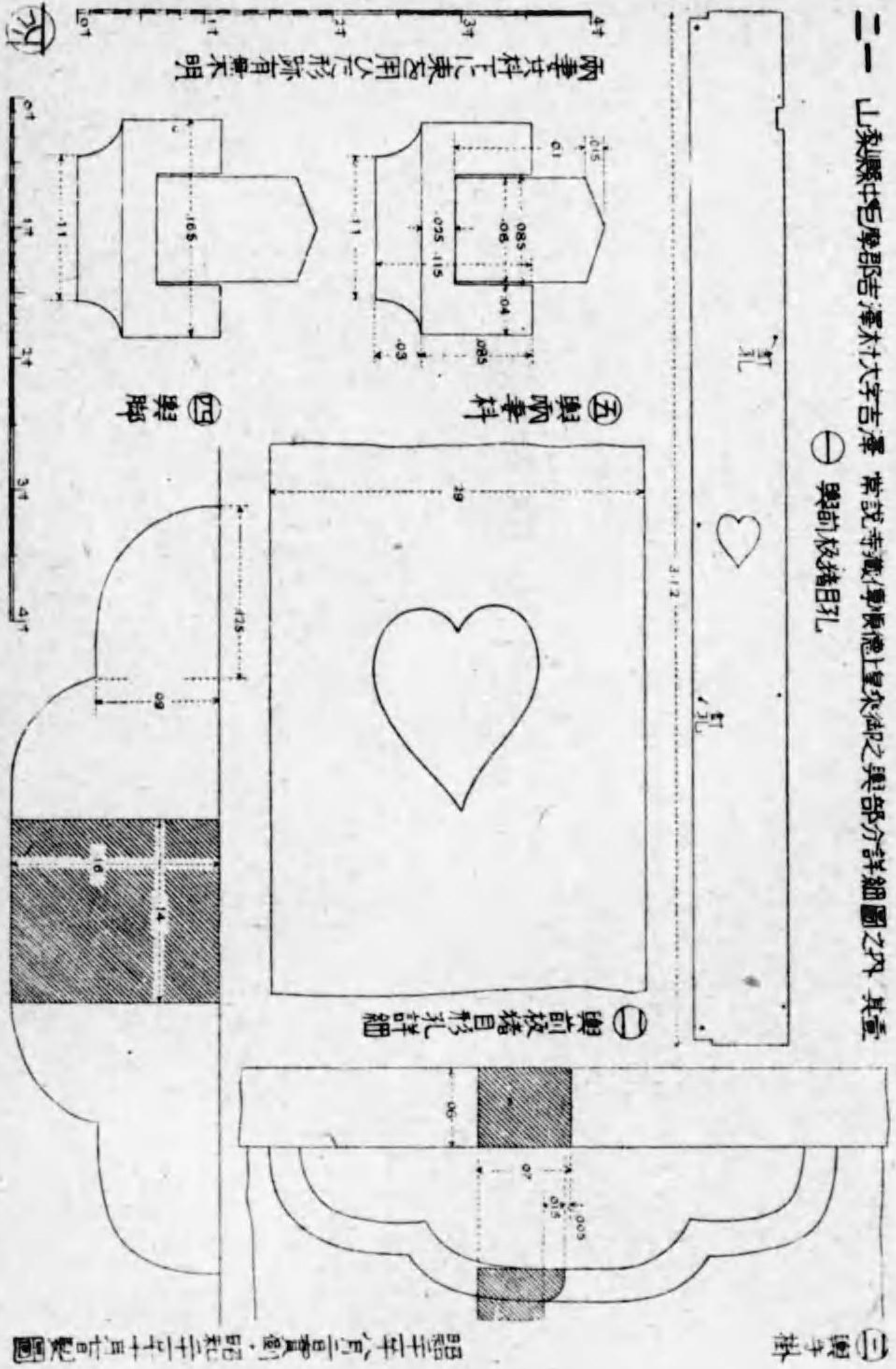
昭和二十一年十月二日製圖・切

二〇 山梨縣中巨摩郡吉澤村大字吉澤 常説寺所藏傳順德上皇架御之輿部分詳細圖之内 其二



③ 其間を少し縫じて絞股の如くはらひたる圖、昭和二十一年一月二日写生、同十月八日製圖、
 ④ 此輿内に於いて架蓋が重棒蓋を防ぐため、其前脚壁に預付たる圓柱を架木とて、現物は少し傾斜してゐるが、今は
 直垂置ち上げてある。⑤ 此を水平の位置に直したるものだが、其曲線が鎌倉・室町時代の絞股と同一の性質を
 事を見易からしむるため、其間を少し縫じ、且つ脚部に當る曲線を下げて其形を完成し、又中央料束の上には、正背面
 脚の料と同じ寸法の料をのせてみて、如何にか此時代の絞股と同意味の曲線から成れるかを明らかにしたのである。

二一 山梨縣中巨摩郡吉澤村大字吉澤 常説寺藏傳順德上皇架御之輿部分詳細圖之内 其壹



昭和二十一年一月二日写生、同十月八日製圖